

只野眞葛

奥州ばなし

(附・曲亭馬琴註)

附・藪野直史注

「やぶちゃん注：本書は文政元（一八一八）年成立した、怪奇談集である。考えてみると、私が初めて手掛ける女性の書いた怪奇談集である。

底本は天保三年から翌年にかけて曲亭馬琴によって成された写本を親本とした所持する一九九四年国書刊行会刊の「江戸文庫 只野真葛集」（鈴木よね子校訂）を用いたが、恣意的に漢字を概ね正字に直して示す。

元の真葛が振ったルビは非常に少なく、[ブログ版](#)では殆んど私が推定で読みを振った。ブログではその区別をしたが（〈〉と（ ）であるが、「三郎次」以降で誤って逆転させてしまったので注意されたい。圧倒的に多い方が私の追加した読み取れば間違いない）、ここでは五月蠅いだけなので、区別をせずに、そのままルビ化した。但し、[ブログ版](#)で老婆心で附したものの、いらないと判断した箇所は大幅にカットした。ルビ作業が煩瑣なためである。ルビが原本のものかどうか、或いは、ちよつと読めないと思われた部分は、[ブログ](#)の当該話を見られたい。或いは、読みを振っているかも知れない。

私の判断で段落を成形し、改行も行った。句読点や記号も追加してある。【】で示したのは底本にある原本の割注・傍注・頭注である。本一括版では、その都度、その違いを注しておいた。

以上の通りで、本縦書 PDF 版はブログ分割版の完遂の後に作成したものである。なお、ブログ版で附した本書内の先行する話へのリンクは使い勝手よいと思うので、そのままとした。【二〇二二年一月三十一日公開 藪野直史】

目録

- 一 狐とり彌左衛門が事^{并ニ}鬼一管
- 二 おいで狐の話^{并ニ}岩千代権現
- 三 白わし
- 四 七ヶ濱谷
- 五 熊とり猿にとられし事
- 六 三郎次
- 七 大熊
- 八 かつば神「やぶちゃん注…本文標題では「かつは神」。
- 九 柳町山伏
- 十 乙二
- 十一 てんま町
- 十二 猫にとられし盗人
- 十三 めいしん
- 十四 狐つかひ
- 十五 上遠野出豆
- 十六 砂三十郎
- 十七 澤口忠太夫
- 十八 四倉龍燈
- 十九 龍燈のこと
- 二十 狐火
- 二十一 影の病
- 二十二 高尾がこと
- 二十三 狼打
- 二十四 與四郎
- 二十五 佐藤浦之助
- 二十六 丸山^{并ニ}谷風 桑田嘉太夫「やぶちゃん注…本文標題は「丸山」のみで、「桑田嘉太夫」ではなく「菊田喜大夫」とする。」
- 二十七 トラ岩^{并ニ}富塚半兵衛 附貞山公鶉の話

「やぶちゃん注…本文標題は「トラ岩」のみ。」

狐とり彌左衛門が事并ニ鬼一管

此宮城郡なる大城の、本川内にすむ小身者に、勝又彌左衛門といふもの有き。天生、狐をとることを得手にて、若きより、あまたとりしほどに、取様も巧者に成て、この彌左衛門が爲に、數百の狐、命をうしなひしとぞ。狐はとらるゝことをうれひ歎て、あるは、をぢの僧に【狐の、をぢ坊主に化るは、得手とみへたり。】「やぶちゃん注…原割注。】「化て來り、【物の命を、とること、なかれ。】

と、いさめしをも、やがて、とり、又、何の明神とあふがるゝ白狐をもとりしとぞ。

其狐の、淨衣を着て、

「明神のつげ給ふ。」

として、

「狐とること、やめよ。」

と、しめされしをも、きかで、わな、懸しかば、白狐、かゝりて有しとぞ。

奇妙ふしぎの上手にて有しかば、世の人「狐とり彌左衛門」とよびしとぞ。

其とりやうは、鼠を油上にして、味をつけ【此の味付るは口傳なり。】「やぶちゃん注…原割注。】、其油なべにて、さくづをいりて、袋にいれ、懷中して、狐の住野にいたりて、鼠をふり廻して、歸りくる道へ、いりさくづを、一つまみづゝふりて、堀有所へは、いさゝかなる橋をかけなどして、家に歸入て、我やしきの内へわなをかけおくに、狐のより來らぬことなし。【「やぶちゃん注…「さくづ」は宮城方言で「米糠」を指す。】

ある人、

「目にもみえぬきつねの有所を、いかにして知。」

と問ひしかば、彌左衛門、答、

「狐といふものは、目にみえずとも、そのあたりへ近よれば、必、身の毛、たつものなり。

されば、野を分めぐりて、おのづから、身の毛、たつことの有ば、狐と、しるなり。」と、こたへしとぞ。

勝又彌左衛門と書し自筆の札をはれば、狐、あだすること、なかりしとぞ。【解「やぶちゃん注…馬琴の本名。】、云、相模の厚木より、甲州のかたへ五里ばかりなる山里、丹澤といふ處に、平某といふものあり。これも狐を捕るに妙を得たり。土人、彼を呼て「丹平」といふ、といふ。その術、大抵、この書にしるす所と相似たり。享和年間「やぶちゃん注…一八〇一年〜一八〇四年。】、予、相豆「やぶちゃん注…相模と伊豆。」を遊歴せし折、是を厚木人に聞にき。【「やぶちゃん注…原頭注。】

又、其ころ、鯰江六大夫「やぶちゃん注」なまづえろくだいふ」か。この話とこの本文は、実は「柴田宵曲 妖異博物館 命數」で既に電子化している。参照されたい。」といふ笛吹ふえふきの有し。國主の御寶物に、「鬼一管きいちくわん」といふ名有なある笛、有けり。是は、昔、鬼一といひし人のふきし笛にて、餘人、吹こと、あたはざりしとぞ。さるを、六大夫は吹し故、かれがものゝごとく、あづかりて有しとぞ。【世の常の笛と替りたることは、うた口くちの節ふし、なし。もし、常人、ふく時は、かたき油にてふさげば、ふかるゝとぞ。】「やぶちゃん注」原割注。】

「やぶちゃん注」本冒頭の長めのこの一篇は、実は後に続くものと異なり、標題を持たない。但し、冒頭に配された目録に以下の標題が掲げられてあるので、それを配した。また、かなり長いので、注を段落の後に挟み込んだ。注の後は一行空けた。

「鯰江六大夫」「まなづえろくだいふ(なまづえろくだゆう)」か。この話と、この本文は、実は「柴田宵曲 妖異博物館 命數」で既に電子化している。参照されたいが、そこで私は以下のように注している。

*

「鯰江」「なまなづえ(なまづえ)」列記とした姓氏(及び地名)である。ウィキの「鯰江」によれば、『藤原姓三井家流、のち宇多源氏佐々木六角氏流』。『莊園時代には興福寺の莊官であったという。室町年間、六角満綱の子高久が三井乗定の養子となり、近江愛知郡鯰江莊に鯰江城を築き』、『鯰江を称して以降、代々近江守護六角氏に仕え、諸豪と婚姻を重ね勢力を蓄えた』。永禄一一(一五六八)年に『鯰江貞景・定春が観音寺城を追われた六角義賢父子を居城に迎えたことから織田信長の攻撃を受けて』、天正元(一五七三)年九月に『鯰江城は落城、以後一族は各地に分散した。一部は同郡内の森に移住して森を姓とし』、『毛利氏となった』。『なお』、『定春は豊臣秀吉に仕えて大坂に所領を与えられ、同地は定春の苗字を取って鯰江と地名がついたという地名起源を今日に残している』。このほかにも、『豊臣秀次の側室に鯰江権佐の娘が上がつっていたという』とある。

「六大夫」この通称と「笛吹き」から見て能の囃子笛方か。

「鬼一管」「きいちかん」と読んでおく。原典にもルビはないが、「鬼一」を前の持ち主の名とし、これは通称としては「きいち」が一般的である。

*

故有ありて、六大夫、「網地あせふた二わたし」といふ遠島えんたうへ流されしに、笛のことは、御沙汰なかりし故、わたくしに、もちて行しとぞ。

「やぶちゃん注…『網地二わたし』現在の宮城県石巻市の沖合にある網地島あじしまか。ウィキの「網地島」によれば、『隣の田代島とともに流刑地でもあった。重罪人が流された江島に対し、網地島と田代島は近流に処せられたものが流された。気候が温暖で地形がなだらか、農業にも漁業にも適した土地であったので、罪人の中には、仙台から妻子を呼び寄せて、そのまま土着した者もいたという』とある。ここ（グーグル・マップ・データ）。」

島にいたりては、笛をのみ、わざとして吹たりしに、いつの頃よりもしらず、夕方になれば、十四、五歳ばかりなる童わらはの、笛たけがきの外たちに立て聞きたりしを、風ふき、雨降あめふりなどする頃は、

「入いりて、きけ。」

と、いひしかば、後は、いつも入て聞たりしとぞ。

かくて、數日すじつを経しに、ある夜、この童、笛、聞終りて、なげきつゝ、

「笛の音のおもしろきを聞も、こよひぞ、御なごりなる。」

と、いひしかば、六大夫、いぶかりて、その故をとふに、童のいはく、

「我、まことは人間にあらず、千年を経し狐ありなり。爰に『年經し狐有』と、しりて、勝又彌左衛門、下りたれば、命、のがるべからず。」

と云。

六大夫曰いはく、

「しらで命をうしなふは、世の常なれば、是非もなし。さほどまさしう知ながら、いかでか、死にのぞまん。彌左衛門がをらん限りは、我、かくまふべし。この家にひしともりて、のがれよかし。」

と、いひしかば、

「いや、さにあらず。家にこもりてあらるゝほどの義ならば、おのが穴にこもりても、しのぐべし。彌左衛門がおこなひには、神通をうしなふこと故、『命なし』と、しるしるも、よらねば、ならず。いまゝで心をなぐさめし御禮に、何にても御のぞみにまかせて、めづらしきものをみせ申まべし。いざいざ、望のぞ給へ。」「やぶちゃん注…「しるしるも」底本は「しるしる」の後半は踊り字「く」であるが、思うにこれは「しるく知るも」（はつきりと判っていたけれども）の謂いではあるまいか？」

といひしかば、

「『一の谷さかおとし』より、源平合戦のていを、みたし。」

と、いひしかば、

「いとやすきことなり。」

と、いふかと思へば、座中、たちまち、びやうびやうたる山とへんじ、ぎど、どうどうと、よそほひなしたる合戦の躰、人馬のはたらき、矢のとびちがふさま、大海の軍船に追付く、のりうつるてい、おもしろきこと、いふばかりなしとぞ。

「やぶちゃん注…この狐が自身が捕獲されて命を失うことが判っていないながら、それを避けることが出来ないことを奇異に感ずる御仁もおられようが、これは私などには極めて腑に落ちるところの、彼らの宿命的システムなのである。私の「怪奇談集」の中にも実は枚挙に暇がないほどあるのである。中でも私が偏愛する一篇が「想山著聞奇集 巻の四 古狸、人に化て來る事 并、非業の死を知て遁れ避ざる事」である。是非、読みたい。

「びやうびやうたる」「渺渺たる」。但し、その場合は歴史的仮名遣は「べうべうたる」が正しい。「果てしなく広く、遠く遙かなさま」を謂う。

「ぎど」「巍々」原義は「山の高く大きいさま」で前を形容するものと思うが、同時にこの語は「徳が高く尊いさま」の意があり、武将の決然たる振舞いを名指して、以下に続く。

「どうどうと」「堂々と」だが、馬を馭し、特に制止する際のかけ声の感動詞「どうどう」（歴史的仮名遣はこのままでよい）を掛けてもいよう。」

ことはてゝ消ると思へば、もとの家とぞ、成たりける。

さて、童のいふ。

「何月幾日には、國主、松が濱「やぶちゃん注…現在の宮城県宮城郡七ヶ浜町（しちがはままち）松ヶ浜（グーグル・マップ・データ）」へ御出馬有べし。そのをりから、鬼一管をふき給ふべし。必、吉事、あらん。我なき跡のことながら、數日、御情の御禮に、教奉るなり。」

とて、さりしとぞ。

扱、彌左衛門、わなをかけしに、七度までははずしてにげしが、八度目に懸りて、とられたりき。

六大夫、是を聞て、

「いと哀。」

と、おもひつゝ、教の如く、其日に笛を吹しに、松が濱には、空、晴て、のどかなる海づらを見給ひつゝ、國主、御晝休のをりしも、いづくともなく、笛の音の、浦風につれて聞えしかば、

「誰ならん、今日しも笛をふくは。」

と、御あたりなる人に問はせ給ひしに、こゝろ得る人なかりしかば、浦人をよびてとふに、

「是は、網地あせふた二わたしの流人、鯨江くじやう六大夫が吹候ふきさうらふ笛ふえなり。風のまにまに、聞ゆること、常なり。」

と申まうしたりしかば、君くん、聞しめして、

「あな、けしからずや。是より、かの島までは、凡海上およそ三百里と聞くを、【小道なり。】やぶちゃん注…原割注。「小道」とは「坂東道」などと呼ばれる短い里程単位。一里を六町とする。しかし、それでも百九十六キロメートル相当になってしまふので謂いはおかしい。網地島と松ヶ浜は三十五キロメートル弱ほどであるから、「三十里」の誤りか、遠島の島としての誇張表現であろう。」

「ふきとほしける六大夫は、實に笛の名人ぞや。」

と、しきりに御感有しが、ほどなく、めしかへされしとぞ。

「やぶちゃん注…以下、底本ではポイント落ちで、全体が本文二字下げ。一行空けて示す。」

狐の笛をこのみて、後のち、化けをあらはし、源平の戦のていをしてみせしといふこと、兩三度、聞しことなり。其内、是は、誠に證據も有て、語かたりつたへしおもむきもたゞしければ、是をもとゝして、外ほかを今のうつりとせんか。又、是も狐の得手えてものにて、をぢの僧ぼけに化ばけるたぐひならんか。笛吹は猿樂のもの故、さるがくの中に、「やしま」・「一の谷」などのたゝかひを、おもしろく作りなして、はやす故、笛吹の心、みな、『このたゝかひを見たし』と、願ねがふことも同じからんか。かの笛、いまは、上かみの寶物ほうもつと成て有。金泥にて、ありしことどもを、蒔繪まきゑにしたるといふ。

おいで狐の話^{并ニ}岩千代権現

「やぶちゃん注…前回で述べた通り、以上の標題は目次に拠った。」

また、安永年中、江戸なる眞崎に、「おいで狐」とて、きつねの晝中^{ひるなか}に出て、人に見られしことありき。

「やぶちゃん注…「安永」一七七二年～一七八一年。

「眞崎」この中央付近の旧呼称（グーグル・マップ・データ）。ドットした石浜神社内には旧「眞先稻荷明神社、現在、眞先稻荷がある（旧地は同神社の南端部分に当たる）。」

伊勢の宮を移し奉りしかたはらに、人いかふ「やぶちゃん注…「憇ふ」。」家の有し。其家のうしろに狐の穴有しに、家なるばゞの慈悲ふかゞりしによりて、客にうりあましたる團子・でんがくやうの物を、狐穴の口に持行て、

「これくへ。」

と、いひつゝ置たりしが、いつとなく無なりしかば、

「はこび入て食しならん。」

と、おもひて、いつも、あまりあれば、もち行ておきしに、ある年の頃よりか、ばゞのゆけば、穴の口につらをさし出して、くひなどせし故、食をもちゆきては、

「おいで、おいで。」

と、よぶに、後々は穴よりいでゝ、人の來るところまでも、ばゞにつれて行し故、大評判と成て、江戸中の人、

「狐見ん。」

とて、墨田川に小舟うかめつゝつどひしに、夏の末になりて、よべども、よべども、いで來ず。

見に來し人は、手もちなく、

「だまされたり。」

と悪口して歸るを、正直なるは、ばゞは、人にいひわけなきのみならず、

「狐のいかになりつらん、あたへし物もつみたるまゝにて、くひしてい「やぶちゃん注…

「體」。様子。」にもなければ、もし、犬にや、くはれつらん。」

と、涙おとして、おもほれるたり。

其頃、日本堤にて、駕かこのものゝ、狐をころせし、と、いひしは、
「それにや。」

と、よくきけば、大きな雄狐なりし。この出しは、ちひさき雌狐にて有し。

さて、夜中に、うば、大熱いでゝ、なにやらん、ものゝつきしてい「やぶちゃん注」體「體」なりしかば、近き稻荷の別當べたうに申して、

「祈禱加持。」

と、のゝしりけり。

うばのいはく、

「さ、なさわがれそ、かたがた。我はこのうばの情なさけによりて、食をやすくせし狐なり。語かたりおくべきことの有によりて、しばし、うばの身を借かりたり。しづまりて、わがいふことを、きかれよ。我は、みちのおくの宮城野に、雌雄めをと、年へてすみし狐なり。故有ゆゑありて、この所に來りて住すしに、此うばの情により、心やすく年月としつきをおくりし、大恩を報ぜんと思ふより、この家に徳つけんため、日の光のおもてぶせなるをしのぎて、人にも見えしことなりし。このほど、雄狐の、人に、ころされたりき。是はさる故有て、のがれがたき命なることは、『こつ通』
「やぶちゃん注」意味不明。多く、変化の妖獸は自分の逃れ難き死期を察することは多くの伝承や怪談に出る。例えば、先に示した私の偏愛する一篇『[想山著聞奇集](#) 卷の四 古狸、[人に化て來る事](#) 并、[非業の死を知て遁れ避ざる事](#)』を是非、見られよ。」といふこととうへにてしりたれば、くやむべきならねど、千年に近き契りのほど、かく、わかれしかなしさに、たへがたく、有にもあらでをるを、ひたすらによび給ふもくるしく、またことよし有て、今、故郷の宮城野へ歸るなり。されば、のちの形見に書おくこと有。筆紙、給へ。」
といひし故、とりあたへつ。

「このうば、物かゝぬを、なにとかすらん。」

と、人々まもりゐたるに、いとゝ、くはしり書て、

「是ぞ、宮城野の狐なる、しるし、よ。」

といひつゝ、

「や」

と、たちて、外の方にあゆみ行きしが、うばは、のけざまに、たふれたりき。

いき出て後、有しことどもを語るに、

「さらにおぼえず。」

と、こたふ。

今、わがかきしといふものも、手にはとりつれど、よむべきやうもしらねば、人によませたり。

草はつゆ露はくさ葉にやどかりて

それからそれへ宮城のゝはら
とぞ有し。

かくてのちは、この書たるものを實にしつゝ、入りくる人ごとに、いだして見せし故、かはほりにうつしなどして、いぬる人も有し。【宮城野の狐の爰に來りしは、かの勝又彌左衛門を恐てなるべし。大がい、年來、同じ故に、爰に入たり。彌左衛門が子、今、文化十四年、八十の翁、ながらへて有。狐は食のとぼしきものか、かく食をあたへられしを大恩と思ひ、又、油鼠に通を失ふも、もはら、食にまよひし故ならずや。雄狐の彌左衛門が爲に命失ん事を恐れて、爰に來りつれど、定命にて、人にころされしと、さとりにしや。】「やぶちゃん注…原頭注。」

「やぶちゃん注…「かはほり」「蝙蝠扇」(かはほりあふぎ(かわほりおうぎ))の略。開くと蝙蝠が羽を広げた形に似るところから、薄い骨の片面或いは両面に紙を張った扇を指し、この紙には詩歌や絵を描いた。

「勝又彌左衛門」前話「狐とり彌左衛門が事并三鬼一管」参照。

「年來、同じ故に」前話の割注で馬琴自身が、享和年間(一八〇一年〜一八〇四年)に、モデルとなったとぼおしい狐狩名人「勝又彌左衛門」、人呼んで「丹平」の話を採取した、と述べている。

「文化十四年」一八一四年。

「油鼠」秘伝の味付けをした油で揚げた鼠。同じく前話を参照。」

「あや子父はくすし薬師にて有しほどに、日々、入くる人の、「世にめづらし」とおぼゆることは、あらしひかたる中に、この狐の書し歌を寫してもてこし人有しかば、同じく寫しとりて、殿「やぶちゃん注…藩城。」にも出て、人々にみせしに、但木下野といふ人、これをとりみて、

「實に、これや、宮城野の狐なるべし。やつがり、むかし、寺社奉行の職なりしころ、仰ごと蒙りて、寺社の縁起を、くはしく尋しに、宮城野のかたほとりに、岩千代権現といふ宮、有し。その、よりおこりは、むかし、松島なる瑞巖寺に、岩千代といふ兒有き。年のほど、十六ばかりにて、かたちよく、心もしづまりて、ものゝ哀思ひしれるが、一とせ、

『宮城野の月みん。』

と、師にいとまをこひて、從者ひとり、ゐて、ゆきけり。をりしも、秋の草のさまぎまに、ひもとぎ、わたせし、眞さかりなるに、月さへ、くまなくて、夜更るまゝに、草葉の露ごと

に光のうつりしは、えもいはれず、

『歌よまん。』

と、かたぶきて、

月はつゆ露は草葉にやどかりて

と、世のはかなさをおもひつゞけしに、下のさらに出こねば、ひたすらに、此上をうち返し、打かへし、口ずさみて有しが、やどりにつきても、食くひもくはで、この歌をのみ、となへしが、

『風のこゝち。』

とて、打ふしたりき。二日三日にいたくおもりて、そこに、はかなくなりぬる迄も、歌を、くり返し、となふることは、やまざりし、とぞ。それよりいづくともなく、夜毎夜毎に、宮城野の中にて、この歌の、かみをとなふる聲しければ、おちおそれて、道行人みちゆくも、たえき。師の禪師、このよしを聞いて、いと哀あはれにおぼして、

『教化きやうげせばや。』

と出立いでたちて、宵より、かの野に、あなうらをむすびて「やぶちゃん注…坐禅して。」、おこなひる給ひしに、夜中ばかり、かの聲の聞えければ、

それこそそれよ宮城野のはら

と、一句の偈げを添給へば、冥れいのまどひや、はれつらん、そのゝちは、音なく成しとぞ。所の者、これをあはれがりて、宮居をたてしなり。むかし、この野に有しことを狐しりの知しは、年經て住しこと、あきらけし。」

と、さだめしとぞ。【解、按ずるに、「松嶋圖誌」に云、「宮千代が墳は、天童庵の境内にあり。高サ云々」。又云、「封内名蹟志」、「宮城郡南目村、宮城野、廿四間、東、畑中に、空地の小塚有。里人是を「兒塚ちこづか」といふ。昔、松島寺の兒宮千代といふもの云々」と、しるして、歌も、その傳も、この書にしるせしと、おなじ。かゝれば、下にしるせし岩千代は、宮千代をあやまれるにや、猶、たづぬべし。又、按ずるに、宮千代が事は「奥羽聞老志」に出たり。こゝに餘あまりなければ、贅ぜいせず。「觀迹聞老志」、「宮城郡」の條下を併ならひ見るべし。○解、云ふ、あや子は、このさうしの作者、眞葛の俗名なり。「おあや」といへるを、物には「あや子」と書かるなるべし。父は工藤平助、名は「平」といひし、仙臺侯の醫官なり。「やぶちゃん注…原頭注。】。【此兒、秋の夜中、露ふかき野を分わけ、夜氣にうたれ、ゑき「やぶちゃん注…「疫」。病い。」をうれひしものならんか。「やぶちゃん注…原頭注。】。【月は露云々」「それこそそれよ云々」とありしを、かの狐は、ほゝゆがめて、おぼえしなるべし。「やぶちゃん注…原頭注。】

「やぶちゃん注…「岩千代權現といふ宮」本文でも過去形で語っている通り、現存しないよ

うである。

「あや子父は薬師くすしにて」馬琴も添えている通り、只野真葛は本名を「工藤あや子」「綾子」「あや」「綾」と言い、父は仙台藩江戸詰の医師工藤（周庵）平助（享保一九（一七三四）年）寛政一三・享和元（一八〇一）年）であった。馬琴の糞のような波状的に馬鹿付けした考証割注には注を付ける気にならない。特に最後に附したそれは、私にはひどく厭味な感じがしてならず（私の読みの間違いかも知れぬが）、出来れば、ここからカットしてやろうという気さえした。

「但木下野」但木氏は本姓橘氏、遠祖は伊賀守重信に発し、下野国足利郡但木に八千石を領し、郷名を氏とした。重信は伊達家初代伊達朝宗に仕えたなど、諸説があり、家歴は極めて古い（以上は幕末の仙台藩士但木土佐のウイキに拠った）。

○又、是にひとしきこと有。人の子の十五なる男子、月のあかきをみて、「寄よせてよまん」とかたぶきしに、

こよひの月は空にこそあれ

といふ下の思ひ、よられしかば、またの日、學友の童わらはどもの中にいでよ、

「昨夜、月をみて、うたをよまんと思ひしが、半かんがへいでば考出かんがへいでて、いまだ、上を思ひえず。」と、いひしかば、

「それは、いかにといひし。」

と問し時、

「こよひの月は空にこそあれ」

と、いひ出しかば、

「月が空になくて、いづくにかあるらん。」

と、學友、こぞりて笑ひそしりしを、十五童じふごのわらは、かつ、恥はぢ、かつ、無念に思ひて、

「これが上を考得かんがへえて、笑し人々の口、ふたがん。」

と、食をとりめて考へしが、終つひに思ひえずして、死したりき。

その灵れいの、あまかけりて、いづくともなく、此下このしたを、となふる聲の、家の上に、聞へしかば、人、おそれたりき。

あるうたよみの、これを聞て、

池水のかげは氷にとぢられて

と上を示しかば、其のち、聲やみたり。

同じたぐひのことゝて、ともに岩千代やしろの社やしろにつたはりて有と、いふ。

白わし

近きころまで、此國の家老をつとめたりし、中村日向といふ人の在所、岩が崎といふ所の百姓に、山狩をこのみて、春夏秋冬ともに、山にのみ、日をおくるもの有し。外に「狩人（かりうど）」といはれて世をわたるともがらも、四、五人ありつれど、山路の達者、およびがたくて、友とする人なく、いつも老人にて、かりありきしに、ある夕方、うしろより、しう【ウ、引。】やぶちゃん注：原割注。シユウー！】といふ音して、

『頭をはたかれし。』

と思ひしが、のけさまに、たふれたりき。耳のわきより、血、出しかば、

『こは、たしかに、鷲にかけられたるならん。』

と、氣ばやくさととりて、終に出合しことはなけれど、

『かゝる時はうごかぬぞよき、と聞。』

と思ひて、即死のていにて、もてなしてゐたりしは、ものなれしふるまひなりき。

眼をほそく明て、あたりを見めぐらせば、ほど遠からぬ木の枝に、白羽なる大わしの、すは、ともいはず、飛かゝらんず、と思へるさまにて、尾羽をひらきて、とまりゐたり【鷲の、一あて當てうごかねば、打ころしたりと思ひて、又、かゝらず。「うごく時は死なず」とて、又、かけらるゝ故、終に命うしなふものとぞ。「やぶちゃん注：原割注。】。

『扱こそ、かれめが、なすわざなれ、につくし、につくし、とおもへども、うごかば、かけんのおそれ有。さりとて、むなしく見過さんや。』

と、ひそかに、鐵砲を廻せしに、鷲の運や、つきつらん、さらにおどろか得有し故、一うちに打おとしてみれば、世に稀なる大鷲にて、足のふとさ、一束有しとぞ。

此羽を、國主に奉りしかば、

「天下一の羽なり。」

とて、ことなめでさせ給ひしとぞ。

鐵山公御代のことなり。

この男は、一年に、熊、十の餘を、いつも、えたり。

すべて、鐵砲をかつぎて山を行時は、鳥獸も懼おそれて、影かくすを、この鷲、あまり猛意にほこりて、狩人にあだなせし故、かへりて、やすくうたれしぞ、こゝちよき。

「やぶちゃん注：「中村日向」中村家は仙台藩重臣の家系であるが、真葛が直接に話を聴き得る人物とすれば、中村景貞（宝曆五（一七五六）年～天保四（一八三三）年：別名に「日

向」がある。真葛より七つ年上）であろう。明和二（一七六五）年に家督相続、安永元（一七七三）年には第七藩主伊達重村の同母妹を娶っている（但し、彼女は三年後に二十七歳で亡くなっている）。近習番頭から小姓頭を経、天明二（一七八二）年に奉行職（他藩の家老職相当）に就任、第八代藩主伊達斉村（二十三歳で病没）の末期養子として幼少で相続した第九代藩主伊達周宗を補佐した。しかし、その周宗も疱瘡で十四歳で死去してしまう。ところが、幕府によって大名の末期養子は相続時の当主の年齢を十七歳以上五十歳未満に規定していた。そこで景貞は幕府はもとより、藩内に於いても、周宗の死を三年間秘匿し、末期養子の規定抵触することなく、伊達斉宗の藩主就任に貢献したとされる（ここまでは主に彼のウイキに拠った）。真葛はこの前後に仙台藩江戸上屋敷に奥女中として奉公しており（安永七（一七七八）年九月十六歳に始まり、天明三（一七八三）年まで。その後は重村娘詮の嫁ぎ先であった彦根藩井伊家上屋敷に移ってさらに五年勤めている）、重貞との接点を充分に考え得るからである。

「一束」握り拳の親指を除いた指四本の幅。通常は矢の長さの単位に用いる。ここは後で矢羽になってしまうことから、謂いとしては自然である。

「鐵山公御代」仙台藩主に「鐵（鉄・鋏）山公」という諡号の藩主はいない。「鐵」「鉄」「鋏」の崩し字を馬琴が誤ったか、底本編者が判読を誤ったかしかないと感じる。可能性が高いと私が思うのは、「鉄・鋏」の崩しが、やや似ている「獅」で、獅山公は第五代仙台藩藩主にして「中興の英主」と呼ばれる伊達吉村（延宝八（一六八〇）年〜宝暦元（一七五二）年）を指し（戒名「續燈院殿獅山元活大居士」。諡号「獅山公」）、元禄一六（一七〇三）年から隠居した寛保三（一七四三）年まで、実に四十年もの長きに亘って藩主を務めた。本書は文政元（一八一八）年成立であるが、例えば、真葛は、名品の紀行随想「磯づたひ」の中で、鰐鮫への父の復讐を果たした男の話の聞き書きを、「獅山公」時代の出来事、と記している。」

七ヶ濱

いにし文化「やぶちゃん注…文化は一八〇四年から一八一八年まで。」のはじめ、蝦夷松前に防人をいだされし間のことなりき。

七ヶ濱の内、大須といふ所にて【十五が濱、七ヶ濱など云て、又其の小名ありて、取あつかふ人の爰よりこゝ迄と切ためにわけたり。「やぶちゃん注…原割注。】、もがさおこりて、うれふるものは、大方、死たり。

其ころ、こゝかしこの墓をほりて、何ものゝわざいや、死人をくひしとぞ。

稀有のこと故、所のもの寄合て、死せし子共の菩提、又は「あくまよけ」の爲とて、祈禱などして、いと大きな角塔婆を山の頭【風越峠。「やぶちゃん注…原傍注。】にたてたりし。下は大石にてたゝみ上げたりしを、夜の間に、たうばを、引ぬき、石をも、なげのけて、土をふかくほりかへして有しとぞ。

「やぶちゃん注…文化」一八〇四年から一八一八年まで。

「蝦夷松前」北海道南部の渡島半島南西部にある現在の北海道松前郡松前町（まつまえちやう…グーグル・マップ・データ（以下同じ）。なお、かなり知られていることだが、現在の行政上では北海道では茅部（かやべ）郡森町（もりまち）以外は総て「町」は「ちやう」と読む）附近。江戸時代、松前藩が置かれ（福山藩とも称した）、蝦夷地松前地方を領有していた。足利義政に仕えた武田信賢の子信広が蝦夷を平定し、光広・義広・季広を経て、慶広の代に徳川家康に所領を安堵され、松前福山に立藩し、松前氏を称した。寒冷地のため、米作が出来ず、当時の藩としては例外的に石高がなく、蝦夷一円を実質領有し、アイヌとの蝦夷交易権を独占した。寛政一（一七九九）年に北辺防備のため、東蝦夷地（蝦夷地の東部・南部）が仮収公され（享和二（一八〇二）年正式収公）、文化四（一八〇七）年に残っていた西蝦夷地（蝦夷地の北部・西部）が収公されて全島が江戸幕府直轄となり、松前藩は陸奥国伊達郡に移封された。しかし、文政四（一八二二）年には蝦夷全島が返還され、復封となり、当初の仮称石高は九千石であったが、天保二（一八三一）年には一万石格となった。しかし、安政二（一八五五）年には、再び北辺防備のため松前福山、江差二港を含む小部分を残して蝦夷地の大半が収公されると、陸奥梁川・出羽東根（山形県）合せて三万石を与えられ、ほかに出羽尾花沢（山形県）一万余石を預地として付せられ、毎年一万八千両の金子が交付されたが、藩庁は依然として松前福山に留まり、領地には代官を送るだけであった。

明治元（一八六八）年、福山から厚沢部村の館に居所を移し、版籍奉還後、館藩と称した後

に廃藩となった（『ブリタニカ国際大百科事典』による）。

「防人をいだされし間」江戸後期、松前藩は千島列島を南下しつつあったロシアに備え、蝦夷地北辺の警備に当たっていたが、二〇一八年、択捉島中部の振別で現地ロシア人によって現地で亡くなった彼ら防人の墓が発見されている。新聞記事によれば、択捉島には松前藩の他、弘前・盛岡・仙台藩から送り込まれた多くの「北の防人」が現地で亡くなっている、とあった。

「七ヶ濱」「大須」話からてっきり松前福山周辺の旧地名・旧通称と思って調べたが、見当たらない。この「蝦夷松前……」という部分は単に時制設定を示すためのものであり、これは、真葛が後に「磯づたひ」（リンク先は私のPDF一括版）で旅した、旧宮城県宮城郡七ヶ浜村、現在の宮城県宮城郡七ヶ浜町（しちがはままち）のことである。「大須」の地名は現認出来ないが、この付近の地図を見るうち、七ヶ浜町南西端に接して、多賀城市大代（おおしろ）という地区があることに気づいた。「大須」と「大代」とは東北弁では近似した発音に聴こえはすまいか？

「もがさ」疱瘡。天然痘。

「角塔婆」四角柱状を成した供養用（墓に立てる地方もある）の卒塔婆のこと。四角塔婆。年忌法要等の際に墓の傍に建てる薄い板状の板塔婆に対する柱状の塔婆で、形状は板塔婆と同じく頭部五輪塔を模したもので、上から空輪・風輪・火輪・水輪を刻し、一番下の地輪の部分が埋め込む部分まで長くなっている。板塔婆よりも遙かに長く（三〜六メートル）、形状も安定を持たせるためにも有意に太い（一辺幅十三〜三十センチメートル）。

「風越峠」不詳。地名としては、あるにはあるが、とんでもない入海の彼方の宮城県石巻市折浜風越であるから、違う。仮に私が仮に指定した先の「大代」ならば、旧地図を見るに、北部が丘陵ではある（今昔マップ）。

「土をふかくほりかへして有しとぞ」この死人を喰らう鬼は供養塔婆を墓と勘違いしているのである。」

「いかなる大力ものゝ悪いたづらならん。」

と、いひて有しが、それより疱瘡の波、いよいよ、あしく、日々、死人數々有を、あらたに土をうがちし所は、ほりかへして、くはれぬこと、なし。

かゝれば、親々は嘆きうれひて、是をふせがん爲に、随分、重き石を墓におけども、とりかけて。くふこと、やまず。

其くらへるさま、着せたるものを残せしのみ、骨・髪ともに跡も、なし。

たゞ、手首をひとつ、石の上に残しおきしこと、ありき。

諸人、おちおそるゝこと、かしがまし。

雨後に行てみれば、足跡とおほしく、人の腕にて、おしたる如くなる形に、壹尺餘のあと有。【足跡の形 。】「やぶちゃん注…原割注。底本の原文から画像で採った。」】

是にて、化生けしやうの大サまはいも知られたり。

あるは、狩人の打たる鹿の、皮をはぎし肉を、外おきに置しをも、一夜の中に、骨まで、食くひたり。

「これ、しゝ・むじなのわざ、ならじ。甚はなはだ、大食おほくひなるものなり。」

と、いや、まし、おそれたりき。

其ころ、誰いふともなく、

「『ほうそうば』』『やぶちゃん注…疱瘡婆。』といふものありきて、死人しびとをくらはん爲に、おもく、やませて、人を、ころす。」

と、となへしかば、公おほやけにうたへて、鐵砲打の人を、くだし給はらんことを願ねがひまうし申たりし。

さる間に、所のきもいりをつとむるものゝ倅せがれ三人、十五・十三・十一なり、一度にほうそうにとりつかれしが、只一夜の内に、一時に死たりしかば、父は狂氣の如くになりて、

「死せしことは、是非もなし。このなきがらを、むぎむぎ、化生の食じきとは、なさじ。」

とて、ひとつ所にうづめて、十七人してもちし、平めなる大石を上におき、たいまつを兩方にたてゝ、きびしく番人をつけ、外にもなれたる獵師を二人、一夜百疋「やぶちゃん注…金二分。一兩の四分の一。一万八千七百五十円相当。」のあたひにやとひて、まもらせけり。

二、三日有て、狩人の云いひ出でるは、

「かく、あかしを置おきては、化生のよりつくこと、有べからず。くらくして、兩人めぐりありきて、こゝろみたし。」

と、いひしかば、それにまかせて、ともしを引ひてありしに、夜中に、何やらん、土をうがつやうなる音の聞えしかば、

「さてこそ、あやしきものよ、ござんなれ。」

と、しのびてよせしが、かねての手なみにおちおそれて、今さら物すごく、兩人、ひとつにかたまりて近づき見れば、暗夜やみよにて、ものゝ色目は見えわかねど、何か、うごくやうなりしかば、かくし持もちたる火繩いを出いせしを、見るやいなや、驚おどろて、はねかへり、柴山わを分わけて逃去にげさりし勢いきほひ、つばさはなけれど、飛とが如ごとし。しう【ウ、引く。「やぶちゃん注…原割注。シェー!」と、なる音して、柴木立しばこたちの折をひしぐる音、すさまじく、そのあほる餘風あほるに、兩人共、引うごかされて、前にのめらんとせしほどなりしとぞ。

十七人して、やうやうもちし石も、とりのけて有しが、番せし人の音をきかざりしは、木の葉の如くとり廻せし。力のほどもしられたり。

されど、親の念や届とどまつらん、うづめし子は、くはれざりし。夜明よあけてのち、其逃去し跡を、人々、行て見るに、一丈五、六尺ばかりなる柴木立【こゝは大濱といふ所なり。】「やぶちゃん注・原傍注。」の、左右へわかれて、なびきふしたるさま、いと、物すごし。いづくまでかく有しや、往ゆきて見ねば、しらず。これ迄、こゝより來つらんと、心づくほどの跡もなかりしが、火繩におちて、まどひ逃し故、かく荒しなるべし。

其のち、絶たえて來らず。

柴の分れしあとは、二、三年は、たしかに見えしとぞ。【是は、はやく聞しことなりしが、『偽にや』と、いぶかしく思ひて有しを、藤澤幾之助「やぶちゃん注・不詳。」と云人、其濱ひらに知所有しりて、とし毎に山狩に行しかば、よくことのやうをしりて語るによりて、書きとめたり。柴木立の分れし跡も行て見たり。】「やぶちゃん注・原頭注。」

其頃、まちの市日いちびに、用たさんとて、二人づれにて女の來りしが、【五十ばかりの女老人、また、三十ばかりにて、子をおひたるが一人。】「やぶちゃん注・原割注。」【五十ばかりの女、ものにおちたる如くのていにて、氣絶したり。

市人、驚きさわぎて、

「薬よ、水よ。」

と、いたはりしが、ほど有て、いき出いでたりしを、つれの女の介抱して、ともなひゆきしこと有つれど、何の故といふことを、しる人、なかりき。

さて、三年をへてのち、氣絶したる女、語出かたりだしたるは、

「さいところ、市町いちまちにゆきしに、ふと、むかひの山を見たれば、そのたけ、一丈餘りもやあらんと思はるゝ毛ものゝ、大木の切口に腰をかけて有しが、頭には、白髪、ふさふさと生おひたるが、山風に吹みだれ、つらの色は、あかくして、めんてい、ばゝの如し。目の光、きらきらとして、おそろしきこと、いふばかりなし。『是や、此頃、死人を掘出ほりだして、くらひし獸ならん』と、おもふやいな、五體、すくみて、氣も消きえて有しが、其ほどに、『語かたりいでなば、身にわざわひもやあらん』と、おそろしさにつゝしみて有しが、獸の通りし跡さへなくなりし故、今、語るなり。』

と、いひしとぞ。

是をもて思へば、「ほうそうばゝ」といひしも、より所、あることなりき。塔婆をぬきしも、かゝる邊土にて、かばかりのことせし人あらば、誰と名のしれぬこと、なし。あらたに土を堀「やぶちゃん注・ママ。」、石をすゑなどせし故、『ものや、あらん』と、ほりみしことなるべし。死人の有無をだにさとらぬは、いきほひはあれども、神通じんつうを得しものには、あらざるべし。いづちより來りしや、古來、前後、聞およばぬこととぞ、人、かたりし。

「やぶちゃん注・妖怪を集成したサイトのこちらの「疱瘡婆」に、本篇の訳物を扱った記事があり、そこで水木しげるの「日本妖怪大全」（私も所持している）の「疱瘡婆」の同話引用があるが、そこで水木は本篇総てを松前の出来事として書いている。サイト主は『北海道の松前と宮城県での話は、場所の違いだけでほとんど同じ内容になっている。これが何を意味しているかはよくわからない』と述べているが、**要するに、水木は初読時の私と同じく、本篇を誤読している**のである。

なお、所持する湯本豪一編著「妖怪百物語絵巻」（二〇〇三年国書刊行会刊）の「ばけもの繪巻」（作者不詳。近畿・北陸・関東・東北の十二の妖怪譚を挿絵付きで記す。絵巻物自体の制作は明治時代のもものと推定される）に載る人肉を食う老婆の化した鬼婆の話を添えておく（[画像はこちらのブログ公開版で見られたい](#)）。とともに。以下に文を表記通りに電子化しておく。踊り字「く」は「々」若しくは正字化した。

*

みちのくしのふ郡に住ける
農人の母心かたましく生る
ものゝ命をとり後にはこれ

を

食とせしを其子いろいろ
いさめけれと聞入れす日々に
長してある夜、墓原に
行てしゝむらを

喰ひ終には

ゆきかた

なくなり

にける一と歳も立て杣

人奥山に分入しに此老女

にあへり 兩の手に

人の首を持^テさなから鬼の如くなる

面赤しおそろしき云わんかたなし

杣人 からき命をひろひ人に語りければ

國の守より伝ありて飛道具をもつてうちころ

すへしと七村に觸あり村々立合て其

ありし所を取まき鉄砲をうちたつれば
誠の鬼とかたちをなし雲に乗りて
失ぬ

*

「みちのくしのふ郡」は陸奥国信夫郡しのぶ。現在の福島県福島市に概ね相当する。北で宮城県に接する。底本の図像解説で湯本氏は『宮城県には疱瘡で死んだ子供の墓をあばいて食べる「疱瘡婆」の話が伝わっている。疱瘡婆もここに描かれた妖怪と同様に鉄砲で追われており、両者は関連のある言い伝えであろう。「かたまし」とは、悪賢いこと』と記しておられる。本篇の異人は「婆」ではないが、これは恐らくは本篇の内容を意識されて附記されたものと考え、ここに挙げることにした。」

熊とり猿にとられしこと

これは、あや子が、こゝに下りし、又の年ばかりのことなりき。

二人組にて熊をとる狩人有しが、

「熊を、もとむる。」

とて、山をゆきしに、大木のもとに、穴、有て、其木に、ことごとく、爪にて、かきし跡の有しをみつけて、ひとり兎人が、

「是を、とらばや。」

といふを、ひとりは、

「益えきあらじ。たしかに、猿なるべし。」

とて、くみせざりしかば、歸りつれど、はじめに「とらん」といひ出いでし人は、とかく、心、すまで、

「我兎人、行て、とらむ。」

とて、いでたりしが、其夜、かへらざりしかば、

『たしかに。猿にとられつらん。』

と思ひて、外に人ふたりをたのみて、三人づれにてゆきて、穴の口をふたぎ、熊とりのしかけにして、長柄の鎗にて、つきころしつ。

中に入てみれば、昨日來りし人は、とられて、くはれたると見て、着たる横ついでざしと、帶ばかり、穴の中に有て、何もなし。

「皆、猿の食くひ盡したるなり。」

とぞ。

その猿は、九尺ばかり有しと聞し。

すべて、「さる」といふものは大食おほくひなるものにて、また、食するものなき時は、いく日も、くはで、をるものなり、とぞ。

山にすむ獸は、里のものと、ことなり・をかしきふし、なきことながら、大食ついでの次に、かきつ。

「やぶちゃん注…「あや子が、こゝに下りし、又の年ばかり」真葛、本名、工藤あや子（綾子）が、江戸を出て、仙台藩上級家臣只野行義つらよしの妻となつて仙台に赴いたのは、寛政九（一七九七）年九月十日であった。その翌年。

「横ついでざし」よく判らぬ「着たる」を文字通りに「きたる」と読むならば、「帶」との関連か

「横刺織」で、緯糸を浮かせて文様を織り出した浮織物のことかと思われる。「着たる」を「つけたる」と読むなら、髻もじりに挿した笄こうがいのことを指すとも読めなくはない。別段、猟師が総髪を絡げて房状に後頭部に纏めて、そこに笄を挿していても、日本刀の笄と同等のものと考えれば、少しもおかしくはない。但し、帯との自然さ、発見時の現場の映像からは、やはり前者が自然であろう。にしても、この猿に食われた男は槍なんぞの得物を全く持たずに熊狩り（実はやはり猿だったのだが）行くというのは、これまた、ヘンではある。

「大食の次に、かきつ」（眞葛が確かに「おほぐひ」と訓じているかどうかはやや疑問はある）里で見掛ける獣類と見かけは特に変わらないけれども、大食いであるという点は異なっているので、それを次いでに記さんと、この話を書いた、という意でとった。」

三郎次

又、爰なる家人に、菅野三郎次といふもの有し。【若きほどの名なり。今は三力と云。「やぶちゃん注・原割注。」】知行は平地にて、【大みち。「やぶちゃん注・原割注。」】一里の餘をゆねば、山なし。故に薪たきぎに不自由なれば、十六、七の頃、さしたる役もなき故、朝、とくおきて、一日の薪、朝とくおきて、一日の薪をとり、いつも山に行しに、ある朝、松山の木の間より、女の、髪をみだしてあゆみくるを見て、

「いづちへ行くものならん、髪をもとりあげずして、早朝にたゞひとり老人、爰を行は。」

と、心とゞめてまもりをれば、こなたをさして、ちかよりこしが、松の上より、頭ばかり出いでて、面を見あはせしに、色白く、髪は眞黒にて、末は見えず、眼中のいやなること、さらに人間ならず。朝日に照て、いとおそろしかりしかば、つかねかけたる薪も鎌もなげすて、逃歸りしが、二度、その山に、いらす。家にかへりておもひめぐらせば、松山の梢の上より頭の出いでしは、身の丈、二丈もやあらん。頭の大おほいさも、三尺ばかりのやうにおぼえしとぞ。

これ、世にいふ「山女」なるべし。

「やぶちゃん注」家人「家臣。」

「菅野三郎次」知行地を持つ以上、相応の重臣でなくてはならない。

「大みち」通常の里程単位。

「眼中のいやなること」所謂、尋常の目つきでないことを謂う。所謂、「邪眼」である。

「山女」山姫。ウイキの「山姫」より引く。『日本に伝わる妖怪。その名の通り、山奥に住む女の姿をした妖怪で』、『東北地方、岡山県、四国、九州など、ほぼ全国各地に伝わっている』『山女の名は民俗資料、中世以降の怪談集、随筆などに記述がある』。『各伝承により』、『性質に差異はあるものの、多くは長い髪を持つ色白の美女とされる。服装は半裸の腰に草の葉の蓑を纏っているともいうが』、『樹皮を編んだ服を着ている』とか、『十二単を着た姿との説もある』。『熊本県下益城郡という山女は、地面につくほど長い髪に節を持ち、人を見ると』、『大声で笑いかけるといふ。あるとき』、『山女に出遭った女性が笑いかけられ、女性が大声を出すと』、『山女は逃げ去ったが、笑われた際に血を吸われたらしく、間もなく死んでしまったという』。『鹿児島県肝属郡牛根村（現・垂水市）では山奥に押し入ってきた男を襲い、生き血を吸るといふ』。『信州（長野県）の九頭龍山の本性を確かめるために山中に入った男が、山姫に遭って毒気を浴びせられ、命を落としたという逸話もある』。『屋久島では山姫をニイヨメジヨとも呼び、伝承が数多く残る。十二単姿で緋の袴を穿いているとも、縦

縞の着物を着ているとも、半裸でシダの葉で作った腰蓑を纏っているともいうが、いずれも踵に届くほど長い髪の若い女であることは共通している。山姫に笑いかけられ、思わず笑って返せば、『血を吸われて殺されるという。山姫をにらみつけるか、草鞋の鼻緒を切って唾を吐きかけたものを投げつけるか、サカキの枝を振れば難を逃れられる。しかし、山姫が笑う前に笑えば、『身を守れるとの伝承もある』。』かつて屋久島吉田集落の者が、山に麦の穂を供えるため、旧暦『八』月のある日に『十八』人で連れ立って御岳に登った。途中で日が暮れたため、山小屋に泊まった。翌朝の早朝、飯炊きが皆より早く起きて朝食の準備をしていたところ、妙な女が現れ、眠る一同の上にまたがって何かしている。結局、物陰に隠れていた飯炊き以外の全員が血を吸われて死んでいったという。『宮崎県西諸県』(にしものかた)『郡真幸』(まさき)『町(現・えびの市)』の山姫は、洗い髪で、『山中で綺麗な声で歌を歌っているというが』『やはり人間の血を吸って死に至らしめるともいう』。『同県東臼杵郡では、ある猟師が猿を撃とうとしたが』『不憫になってやめたところ、猿が猟師にナメクジを握らせ、後に猟師が山女に出遭ったところ、実は山女はナメクジが苦手なので襲われずにすんだという』。『大分県の黒岳という山姫は絶世の美女だという。ある旅人が山姫と知らずに声をかけたところ、山姫の舌が長く伸び、旅人は血を吸い尽くされて死んでしまったという』。『高知県幡多郡奥内村(現・大月町)では山女に出遭うと、血を吸われるどころか出遭っただけで熱病で死んでしまったといわれる』。『岩手県上閉伊郡上郷村(現・遠野市)の山女は性欲に富み、人間の男を連れ去って厚遇するが、男が精力を切らすと殺して食べてしまふという』。『これらのように山姫、山女は妖しげな能力で人を死に至らしめる妖怪とされるが、その正体は人間だとする場合もある』。『例として、明治の末から大正初めにかけて、岡山に山姫が現れた事例がある。荒れた髪で、ギロギロと目を光らせ、服は腰のみ』『ぼろ布を纏い、生きたカエルやヘビを食べ、山のみならず民家にも姿を見せた。付近の住民たちによつて殺されたが、その正体は近くの村の娘であり、正気を失つてこのような姿に変わり果てたのであった。妖怪探訪家・村上健司は、各地に伝承されている山姫や山女もまた』『この事例と同様、人間の女性が正気を失った姿である場合が多いと推測している』。『昭和に入ってから山女の話はあり』『昭和一〇(一九三五)年頃、『宮城県仙台市青葉区で山仕事に出た女性が』『三』歳になる娘を草むらに寝かせて仕事をしていたところ、いつしか娘が姿を消していた。搜索の末、翌朝に隣り』の『部落の山中で娘が発見され』『母ちゃんと一緒に寝た』と答えていたことから、人々は山女か狐の仕業と語ったという』。『また、屋久島では昭和初期になつても山姫やニイヨメジヨの目撃例がある。『旧正月と』九月十六日』には山姫がバケツをかついで潮汲みに来る』『小学生が筍取りに行ったところ、白装束で髪の長い女に笑いかけられた』『雨の夜、宮之浦集落の運転手が紫色の着物の女に出会った。車に

乗るよう勧めたが、そのまま行ってしまった」など、現代的な要素を含んだ実話として伝承されている』とある。」

大熊

熊とりといふものは、身のあやうきものなり。頭かしら老人、組する者二人、みたり組にて熊とるもの有しが、ある年の暮に、不仕合ふしあはせつゞきて、うゑにのぞむこと有しかば、雪中、山に入り、

「もし、穴に入そこねたる熊や有ある。」

と、【熊といふものは、穴に入て冬ごもりすれども、堀「やぶちゃん注…ママ。」て入ものにはあらず。おのづから岩穴の明あきて有に入なり。身、大きく成て、入べき穴なければ、熊笹などにかこみて、背のかくるゝ程につみし中に入て、上にさと木の枝などを、雪よけの爲ばかりに、引ひきかけて有ものなるとぞ。】「やぶちゃん注…原割注。】ひらおしに尋たづねもとめたるに、折よく、見あたりしかば、頭立かしらだつものは、

「ほそきかはをへだてゝ、二ツ玉をこめてひかへゐて、老人の組子をやりて、後うしろより鑢やりにて、したゝかに、つくべし。手おひに成しを、爰にて、うちとめん。」

と云合いひあひて有しに、つきにゆきしもの、心おくれして、ふるふ、ふるふ、そと、尻をつきしかば、すぐに、はね出いでたり。熊とり、逃るとすれど、すでに頭をくらはれんとせしほどに、鐵砲もちを持し男、

「それぞれ、熊にくはるゝぞ。」

と、今老人につげんため、さけびしかば、其聲こゑを聞て、その者のをるかたへよぢもどりて、一かみにせんとかゝりしが、河をとびこえんと、少しためらひし所を、打とめたりき。

さて、めでたく春をむかへしと聞きく。

この時、打そんじてかまれなば、それきりのことなるべし。あやうし、あやうし。

「やぶちゃん注…「不仕合」上手く行かないこと。ここは熊の捕獲が例年に比して有意に低かったことを謂うのであろう。無論、それ以外に凶作も重なったものであろう。

「うゑにのぞむ」「飢に臨む」。すっかり飢餓に陥ったことを謂う。

「さと木」「里木」。自然の樹木。

「ひらおし」「平押」。しゃにむに押し進むこと。

「其聲を聞て」「主語は熊。」

かつは神

在所中、新田といふ所に、合羽神かつばがみとせうする社有やしら。みたらしめきて、池の如くなるもの
有、いかなる晴天つゞきても、かるゝこと、なし。それより、用水の堀、つゞきて有し。

此家人なる、細産甚之丞と云しもの、十七、八の時分、下まちの若き者兩人と、同じく水
をあみて、用水堀をくぐりくらして有しに、三人、おなじくくぐりしが、いつのほどにや、
水無所みづなきに出たりしに、きれいなる家居有て、内に、はた織音おるの聞へしかば、いぶかり思ひて、
「爰は、いづくぞ。」

と、うちなる人に問ひしかば、

「爰は、人の来る所、ならず。早く歸れ。」

と、こたへし故、驚おどろ、さらんとせしかば、よびとゞめて、

「こゝに來りしといふことを、三年過ぬみとせすうちは、人に語るべからず。身に、わざはひあらん。」
と教たり。

いよいよおそれて去しが、また、もとの用水堀に出たりき。

その往來の間、いつも、心おぼえず成て有し、とぞ。

さるを、町のもの、耆人、そのとしの内に、酒に酔よひて語出たりしが、ほどなく、死したり
しかば、是に、みごりや、したりけん、甚之丞は、一生、かたらざりし。

「やぶちゃん注…この話、河童伝承としては類がない龍宮伝承と語りを禁忌する異類異界型
の混淆が感じられる非常に変わったものである。

「新田といふ所に、合羽神とせうする社有」これは仙台からはかなり北に離れるが、現在の
宮城県大崎市岩出山上真山街道上にある磯良いそら(いそら)神社は「カッパ明神」と通称する(グ
ーグル・マップ・データ)のことではあるまいか。そのサイド・パネルにある岩出山町の説
明版画像によれば、

*

この西方にある「やぶちゃん注…この説明板は本殿から東南に離れた鳥居脇にある(スト
リート・ビューで確認済み)」。磯良神社は、カッパの虎吉を祀ったものと言伝へられていま
す。

虎吉は、陸奥の豪族、藤原秀郷の馬屋に仕え、主人に大変気に入られていましたが、ふと
したことからカッパの正体がばれ、暇をもらって主家を出ました。主人から持仏の十一面観
音をもらい平泉をあとした虎吉は、諸方を転々とし、ここを永住の地と決めました。その

後、ここを通る酒売商人がお堂をつくって祀ったと伝えられています。

例祭は、旧暦の6月15日です。

宮城県 岩出山町

*

とある。河童が人に化けて、しかもかの秀郷に仕えていたというのは、河童伝承の中では稀に見る話といえよう。言ってみたい。拡大して見ると（サイド・パネルにも画像有り）、祭殿の前に有意に大きな池（沼）がある。

「細産甚之丞」不詳。この姓も検索に掛からない特異な姓である。仮に「ほそうみじんのじよう」（現代仮名遣）と読んでおく。

「いつも」現実世界に戻る、その間中、ずっと。

「町のもの」甚之丞と一緒に泳いでいて、堀端で待っていた残りの二人には、甚之丞は少しだけ話たものであろうから、その兩人に孰れかであろう。

「みごり」「身懲り」であろう。」

柳町山伏

本、柳町といふ所に住、つかまき師夫婦の者有き。代々有徳にして、ほどにつけたる調度やうの物までも、ともしからで、實心の者なりし。

娘、二人、もちしが、とりどり、相應の生れなりしを、祕藏して有し。

姉娘、十三ばかりの時、庭におりて、あそびて有しが、春のことにて、

「風の上りを、みおくる。」

とて、石につまづき、くつぬぎ石にて膝を打しが、つよく痛、はれて直らず、終に足なへに成て、二、三年わづらひて、死たりき。

妹娘も、ほどなく十三と成しが、同じく庭におりて、同じ石につまづき、膝を打たりしかば、二親、心にかゝりて、醫師をもとめ、いろいろ、薬用をくはへしかども、いゆることなく、又、足なえになりて、十六までながらへしかば、其間、たからをつくして、祈禱・まじなひにいたるまで、よしとあるかぎりのことはせしかども、いさゝか、印、なし。終に息引とりしかば、水なども手向て、屏風、引廻して置しに、うなる聲の聞えしかば、

「すは、息吹かへせし。」

と悦て、母の行て見つれば、娘が云様、

「扱、至極、快寝入て有しが、今、何方へやら行所を夢に見たりし。又、ねむたく成し故、寝んと思ふが、よく寝入てあらば、夜具をはぎてみ給へ。」

と、いひて、ねむりしかば、二親、うちゑみ、

「もし、快氣にもやなる。」

と、思ひいさみて、少し程をへて、夜具をまくりて見たれば、こはいかに、其面、むすめにはあらで、鬼のごとし。

色、赤黒く、眼中、

「きらきら」

と光て、いたく、いかれるおもぎしもの、おそろしき、云ばかりなかりしかば、思はず、とびのきて、夫にその由をつけて、兩人して行てみしに、前に、かはらず。

夫婦、あきれてゐたる時、かの變化、おき直りて、眼をいからし、聲たて、云やう、

「汝等二人に、いひきかすべきこと有て、あらはれたり。そこさらずして、吾云ことを、よく、きけ。われは是、此家の七代先の祖に金をとられて、殺害せられし山伏の灵なり。我、昔、官金をもちて上方へゆきし時、先祖の男と、ふと、道づれに成たりしが、茶屋に入て、ともにのみ食してのち、『あたひを、はらはん』と、懷中より金入をとり出せしを、【此山伏

のふるまひ、油斷のやうなれ、凡百五十年か、又は二百年に近きほどのむかし故、人の心もおだやかにて、金などみせしなるべし。「やぶちゃん注・原割注。」此家のあるじの見て、山中にいたりし時、無躰に打擲して、終に切ころし、官金をうばひとりて、出世をなせしぞや。其時の無念さ、骨髓にとほるといへども、代々、運、さかんにして、たゞりをなしがたかりしが、やうやう、七代にいたりて、運かたぶきし故、うらみをはらすなり。かくいふことを偽と思はじ、外にたしかなる證據、有。たんすの引出しに入て有、太刀こしらへの大小は、わが、さし料なり。」

尺は何寸、銘は何々といふことを、つまびらかに云て、【此大小の尺と銘を、女の言にて、おぼえぬぞ、くちをしき。「やぶちゃん注・原割注。」】
「いそぎ出し、みよ。是、たがはぬ證據ぞ。」
と、いひしとぞ。

夫婦は夢のこゝちして、おそろしさに手もふるう、ふるう、大小をとり出して見しに、變化のいふに露たがはざりしとぞ。

此大小は、先祖よりのつたはりものとて、代々、仕廻てのみ置しことにて、銘も寸も、夫婦、しらす有しを、まして、娘子共のしるべきよし、なし。

「實に、昔、さることや、有つらん。」
と、あやまり入て有しに、又、變化の曰、

「此娘の命、たすけたく思はじ、我、のぞみし官位のほどの供廻りにて、この家より葬禮を出すべし。【そうしき「やぶちゃん注・ママ」・供廻り、いくたりといふことも、たしかにしらず。「やぶちゃん注・原割注。」】さあらば、命、たすくべし。さなきにおきては、これ限りぞ。」

と、いはれて、二親は、ふしまろび、

「いかやうのことにても、仰にそむくまじ。娘が命、たすけ給へ。」
と願しかば、

「いそぎ、葬禮の仕度せよ。」

とて、夜具、引かづきしが、又、もとの娘の面にぞ成たりし。

變化は、かくいへど、かゝる大病人の有家より、葬禮を出さんは、外聞、かたがた、きどくに思ひて、寺へ其よしを談じて、法名をもらひ、人をやとひて、寺の門前より、したくして、はふりのていをなしたりしに、その人々の、寺の門に入たるころ、變化、あらはれ、母をよびて曰、

「此家よりいさば、娘が命たすけんと思ひしが、餘りに略過たる仕方なり。是にては、命ごひは叶まじ。」

と、いかりて有しとぞ。

父は、葬式とゝのへて、

「是にて、娘が命、たすかるや。」

と、心こころ悦よろこ、かつ、案あんじながら、歸りしに、有しことどもを聞て、おぢ恐れ、又、家より葬式をとゝのへて出いしたりしかば、山伏の灵たまも、しづまりや、したりけん、あらはれずなりし。

むすめも、一度、引とりし息いきの、かへりしこと故、怨靈おんりやう、たち去さては、へたへたと、よわりて、消きうせしとぞ。

このほどの心盡しは、むだごとゝ成て、月のうちに、三度、葬式を出したるとぞ。

むこ養子なども有しが、此變化に恐れて、家をいでゝ、をらず。二親も氣ぬけして、家をもうりつ、數代すだいの富家ふけも、長病中ながわづらひのうちの物入ものいにつかひはたし、やれ衣い一重ひとへならで身みに添そものもなく、ゆくへ、しれず、なりしとなん。

山伏は七代までたゝるとは聞つれど、かく、たしかに見聞みきしことも稀まれなれば書置かきおく。

娘むすめの、うなり、くるしみし聲こゑは、近邊きんぺんの人、

「聞きに、たへがたかりし。」

とぞ。二親のおもひ、まして、いかならん。【このはなしも、はやく聞て有しが、「もし、偽いつはりにや」と、心もとめざりしに、召つかふ女の、筋すぢむかひなる家にて、娘のやうす、變化へんげの有し次第しだいも、くはしくかたるを聞て、しるしぬ。「やぶちゃん注…原割注。」】

「やぶちゃん注…本篇は既に「柴田宵曲 妖異博物館 大山伏」の注で、一度、本文のみを正字化して電子化しているが、再度、零からやり直した。

「柳町」「本柳町」「ウィキの「柳町(仙台市)」が町の歴史について、非常に詳しく書かれてあり、本篇の当時のロケーションを想起する上で甚だ有益である。是非、読まれんことをお勧めする。『柳町(やなぎまち)』は、日本の宮城県仙台市青葉区に位置した町である。伊達氏に従つて米沢から岩出山に、次いで仙台に移転し、『さらに移転して現在地に落ち着いた』六『つの御譜代町の一つで』、二十四『の町人町の中では』五『位につけたが、江戸時代から現在まで』、『豪商や大店舗を見ない庶民的な商工業地である』とあり、一九七〇年の『住居表示で一番町一丁目に属して地図から消えたが、町内会が柳町でまとまり、街路に歴史的町名の表示がなされ、存在感を残している』して、以下、より細かな変遷が記されてある。
ここ(グーグル・マップ・データ。仙台駅の南西直近)。

「つかまき師」「柄巻師」。貧しい守備範囲外の注を附すより、サイト「刀剣ワールド」の『日本刀職人「柄巻師(つかまきし)」〜日本刀の柄を仕上げる』を読まれるのがよからうと存ずる。

「有徳」富裕。「いうとく」「うとく」孰れの読みでも、この意味も持つ。

「ほどにつけたる調度やうの物までも、ともしからで」ほどほどに設けた家内の調度品といったものに至るまで、貧相なものではなく。

「實心」誠実。

「とりどり、相應の生れなりし」二人とも、相應の美形の生まれであった。

「よしとある」何らかの効果があるとされる。

「此山伏のふるまひ、凡^{およそ}……」ここは「此山伏のふるまひこそ、油斷のやうなれ、」（已然形）「凡そ……」の「こそ」を省略した逆接用法である。

「百五十六年か、又は二百年に近きほどのむかし」本書の成立は文政元（一八一八）年であるから、一六六八年から一六一八年となり、寛文八年から元和四年の江戸前期となる。

「官金」この山伏は、後で「我、のぞみし官位のほどの供廻りにて」と述べているから、何らかの官職を金で求めるか、幕府の隠密の職務に就かんとしていた者であったようである。さすれば、大金を所持していてもおかしくない。

「仕廻てのみ置しことにて」大事に仕舞っておいただけであったために。

「むすめも、一度、引とりし息の、かへりしこと故、怨靈、たち去ては、へたへたと、よわりて、消うせしとぞ」山伏の怨霊によってではなく、一度、仮死した後、怨霊が憑依したことによって、弱り切っていて、そのまま空しくなったというのである。

「月のうちに、三度、葬式を出したるとぞ」山伏の略式葬儀と、やり直しのそれに、娘の葬儀で、三度である。

「山伏は七代までたゝる」全国的に「猫を殺すと七代祟る」とか、「坊主（山伏）殺せば（或いは「騙せば」）七代（或いは「八代」「百年」「末代」）祟る」と言う伝承は広く分布しており、文芸でも怪奇談から落語まで、かなりメジャーな祟りとして使用されている。山伏は修験者であり、本来は古くから祟りを成すものを調伏することを重要な生業としていたが、さればこそ、魔道との接点も濃密であるが故に、彼自身が執拗^{しつうね}き怨霊と化するというのは頗る腑に落ちはする。上記の通り、「七」は確定数ではなく、単に長いことを意味するもので、

「七」自身には限定的な由来はあるまい。

「召つかふ女」只野家の下女。」

片倉小十郎、領地なる白石に、「千壽院」と言山伏、有ありき。元來、風流をこのみ、雅情に心をなげうちて、祈禱・守札まもりふだなどのことは、「わけもなきもの」と思おもひながして、「乙二」といふ俳諧師なりしが、其やど守もりに、越後より來りし夫婦の者、おきたりし。心だてあくまで正しく、身をしまし、人の爲にはたらくをもて、心のたのしみとし、たぐひなき慈悲心の者なりしが、さる故にや、はじめ來りし時は、夫婦ともさしつゞりたる絆纏はんとんを着て有しが、次第に仕合しあはせよく、今は、馬をも、たておくほどになりし。其ほとり、娶よめとり・賀かとり、又、凶事等にて、いそがしきことの有折りは、しる・しらぬをわかつたず、未明ゆきに行て、夫は薪たきぎをわり、婦は水を澤山にくみ入いれ、手つだひて、すぐにかへり、野かせに「やぶちゃん注…連字するこの「に」の右手に編者による衍字指示と思われるママ注記がある。」にかゝり、ふるまひには、あづからず。是、常の諸業なり。稀代きだいの夫婦とて、人々、ほめものにしたり。

「やぶちゃん注…「片倉小十郎」伊達家の古くからの名臣の家系片倉家の直系子孫。初代は伊達政宗の近習にして後には軍師的役割を務めたとされる片倉景綱で、通称の「小十郎」は代々の当主が踏襲して名乗るようになった。

「白石」現在の宮城県白石市。白石城（グーグル・マップ・データ）は景綱が政宗から下賜されている。

「千壽院」後は『乙二といふ俳諧師』と（脱字が疑われる）「なりしが」で、同一人物である。この人物、奥州白石の俳人として実在し、しかも小林一茶や夏目成美と親しい友人でもあった。中田雅敏氏の筑波大学学位論文「小林一茶の生涯と俳諧論研究」（二〇一六年。PDFでダウン・ロード可能）によれば、本名・通称を岩間清雄（宝暦五（一七五五）年～文政六（一八二二）年）で、俳人としては松窓乙二と称した。論文の注「57」に（下線は私が附した）、『陸奥国白石の巨理山千手院権大僧都岩間清馨の息の修験者として京都、江戸、蝦夷地函館、松前、東北、北陸を行脚している』とあり、俳風は「芭蕉よりもなお悄然としてわびに徹し」とされた（『白石市史』、一九八一年）。中村真一郎の『蠣崎波響の生涯』（新潮社、一九八九年）に詳述されている」とあり、論文内にも書かれてある通り、当時、拿捕されたゴローニンを函館で目撃するなど、ただ者ではない。平凡社「世界大百科事典」では、生年を宝暦六年とし（諸辞書も同じ）、『江戸後期の俳人。姓は岩間、通称は清雄、松窓と号す。奥州白石の人』で、享和三（一八〇三）年に『江戸に出』、成美・巢兆・道彦らと交わり「はたけ芹せり」を刊行し、文化七年から十年（一八一〇から一八一三年）にかけては、『北海道滞在をはじめとし』て、

『越後などに旅を重ね』たとする。芭蕉・蕪村を慕った化政俳壇の雄で、『誠を重ね』、『作風は感覚的また重厚閑寂である。没後』に「乙二七部集」が編まれた」と記し、「夏霧にぬれてつめたし白い花」の一句を引いている。

「やど守」留守番。以上の通り、若き頃より乙二は各地を行脚して、家を空けていたのである。後で出るが、乙二には嫁はいる。

「馬を」「たておく」馬を飼ひ養う。

「野かせ」「野良稼ぎ」の略であろう。農耕。

「ふるまひには、あづからず」所持手伝いの御礼や報酬は一切、受け取らなかった。」

扱、その所の足輕に、大のあばれもの有て、諸人、もてあましたりし。又、百姓にも、同じたぐひのもの有、兩親もなし、妻に成人もなくて、心まかせにあぶれありきしが、この兩人、酒酔さけよみのうへ、口論におよび、兩方、名におふあくたれどし「やぶちゃん注…「同士」」。おそろしさに、よりつく人もなかりしに、終に刃傷にいたりて、足輕を、百姓の切ころして有し。折節、他より來りみし野良山伏、通とほりかゝり、このていを見るより、百姓をたすけて云、
いはく

「其方、人をころしては、命たすかるべからず。我は見のがし得さすべきまゝ、早くこの地を立されかし。」

と、をしへたりしに、百姓は、いまだ酒きげんや、さめざりつらん、

「かほどの悪人をころせしに、いかで、にげかくることのあらん。いらざる山伏の心ぞへや。」と、ほこりみたり。

山伏は、云かけしことも、どかれて「やぶちゃん注…「退どかれて」。退しりぞけられて。」「』にくし』とや思つらん、

「爰すなを立さらばこそ、見のがさんとはいひつれ、その儀ならば、われも通かゝりて、たゞには、過すがたし。いぎ、我にしたがひ來れ。」

とて、役所へつれゆき、有しこと共ともを云いあげしに、足輕を、まさしう、ころせしうへは、所ところ仕置しおきとて、論なく、首をはねられたりし。

「やぶちゃん注…「所仕置」仙台藩内にあつた支配・法制度で、罪科が判然としていて、「所仕置」と確定するや、仙台から当該地に速やかに引き戻された上、当地のまさに足輕組の者が罪人の刑執行を行ったものようである（諸論文を参照）。」

所にては、

「二人の悪者、一度にうせたり。」

とて、悦よろこびみしに、かのやど守夫婦、その夕方かせぎも仕廻しまはして、家にくつろぎゐて、たばこのみながら、ふと、語いでい、

「人には、もてあまされし人々なりしが、誰その御仕置になりしこそ、思へば、ふびんなれ。跡とふ人も、なきに。」

と、夫のいへば、婦も、

「げに。さなり。心がらとはいひながら、今更、いとほしきことなり。いざ、我々兩人して、なきがらを納をためつかはさばや。」

といふを、夫も、

「されば、仕事もしまひたれば、それ、よからん。」

と、いひ合せて、やどをたち出しは、七ツ半「やぶちゃん注…午後五時。」頃なりしと。

棺箱をとりのへて、仕置場迄は、【大道。「やぶちゃん注…原割注。通常の里単位。】壹里餘も有所を、夜にかゝりて行て、【深切のいたり極れば、きたなし、おそろしとも、思はざるものなるべし。なみなみの人の思おもひよりがたきこと共なり。「やぶちゃん注…原割注。】から「やぶちゃん注…骸。」を納をため、夫婦、さしになひて、其ほとりの寺にいたりて、

「かくかくの次第なり。餘りふびんに存ぞんぜらるゝまゝ、わたくし共夫婦にて、からを納参りたり。法號をさづけ給はらん。」

と、こひしとぞ。

俗さへ、かほどの功德をおこなふこと故、法師は一言もいふことなく、何とか書かきてとらせしを、とりをさめ、

「さて。とてもに、御さしつかへなくば、此寺中へ、此からを、かくしたし。」

と願し故、住持も感じ入て、

「さほど思はゞ、藪きはの際いりになりとも、をさめよ。」

と云し故、兩人して、穴を堀ほり「やぶちゃん注…漢字はママ。」て埋うづめ歸りき。

扱、法號は、佛壇へも入いれがたければ、出入口の柱にはりて、あかしをかゝげ、飯を備へなどして置おきしとぞ。

「やぶちゃん注…「俗」この場合はこの奇特な夫婦（の行い）を限定して指す。

「何とか」戒名を聴き及んではいたが、真葛が忘れたものであろう。」

此妻女、あしき積しやく「やぶちゃん注…差し込み。」ぞ、もちて、おこる時には、本性ほんしやうなく成て、のけさまに、たふれて、くるしむ、となり。月には兩三度「やぶちゃん注…何度も。」、

きはめて「やぶちゃん注…激しく。」、おこりしを、このから、はうむりて後、絶ておこらねば、

「心やすし。」

と悦みたりしとぞ。

ある日、かの野良山伏、守札まもりふだを持て来りしを、とりいれて、壁に張はりしに、【のら山伏、みだりに札ひくを引ひくことも、乙二がおこたりより、おこりしことなり。「やぶちゃん注…原割注。」】其夜、例の積つつよくおこりて、くるしみ、たへがたく、乙二が嫁よめも行ゆて、介抱けいばうして有あしに、次の夜夫婦の夢に、からを納をさめられし百姓ひやくしやうみえて、しめすやう、

「我身わがみこと、誠に思おもひよらぬ御ごとぶらひにあづかり、御かげにて成佛ぶつじやういたせしこと、重々有あがたく、御禮ごらい盡じんしがたし。されば、我は何もいたすべきこともなし。婦人の身に、あしき積つをもたれしを、せめての御禮ごらいに、御一生ごいっしやうおこらぬやうに守らんと思おもひしに、このほど、参まゐりし山伏さんぷくの爲ために、ころされし身にさふらへば、あの山伏さんぷくの引ひたる守札まもりふだの候ときては、われは此所こゝに居をることあたはず、立たさりし故ゆゑ、又々、御積ごつはおこりしなり。守札まもりふだをだにとりすて給たまはらば、又もとの如ごとく、御積ごつをまもるべし。」

と、つげしとぞ。
夫婦ふうふは奇異おもしろの思おもひをなし、翌朝あしたあさ、早々はやはや、守札まもりふだをとりすてつれば、積つは、跡あともなく直ただりしとぞ。

「かゝる野良山伏のらさんぷくの引ひし守札まもりふだも、かほどのしるし有あからは、けなすべき事こと、ならず。」と、乙二おほいも大おほに感あ心しんして、不動尊ふどうそんを祈いの奉りしとぞ。

野良山伏も、

「のらものゝ分ぶんとして、百姓ひやくしやうを引ひ立たて、しまつせしこと、あし。」
とて、所ところを拂ははれたりき。

伊勢いせの尼には、俳人たいりの便たよりによりて、乙二おほいが方に逗留たうりゆうせしなり。乙二おほいが娘むすめは、松井其甫まつい きほといふ醫師いしやの妻つまなりし故ゆゑ、尼にも此所こゝにては其甫きほが方かたを、やどせしなり。

「やぶちゃん注…」のら山伏のらさんぷく、みだりに札ひくを引ひくことも、乙二おほいがおこたりより、おこりしことなり」本来ほんらいなら、乙二おほいも修験者しゆげんしやであるからして、彼かれが咒じゆした守まもり札ふだを屋敷やしきに張はりるべきであるところを、修験者しゆげんしやのくせに祈いの禱たうも守まもり札ふだも効果こうかは怪あやしいと常日じやうじつ頃考ころえている乙二おほいが、そうした心遣こころづかいいを怠おろそかして全ぜんくしなかつたことを指さす。

「伊勢いせの尼に」不詳ふじやう。女流俳人にょりゆうたいりで、しかも真葛まがせの知り合あひであつたのであろう。則すなはち、この話わも、直接じきにはこの伊勢いせの尼になる人物じんぶつより親おしく聴きいたものだったのであろう。彼女かのじよが医師いしの娘むすめであつたとする点てんからも（真葛まがせの父ちちは仙台藩江戶詰せんたいはんえうけつ医師いしであつた工藤周庵平助くどうしゆあんへいすけ（享保一

(二七三四)年〜寛政二三・享和元(一八〇一)年)であった)、親和性が認められる。

「俳人の便によりて」俳人である乙二の俳句仲間の関係から。

「松井其甫といふ醫師」不詳。」

てんま町

仙臺新てんま町といふ所に、小鳥をかひ、鉢植はちうゑのつぎ木などして、世をわたる人、有し。文化十年「やぶちゃん注…一八一三年。」の頃、四十ばかりと見えたり。何方いづかたの生うまれといふことを、しらず。武藝は何にてもたづさはらぬこと、なし。分わけて、

「馬をよくせし。」
とて、

「のりて見たし。」と、常に云しとぞ。【武藝にたづさはりしをもて思へば、武士の末なるべし。】「やぶちゃん注…原頭注。恐らく馬琴のもの。】

はじめは、妻をも具したりしが、久々、病氣にて、終に、むなしくなりしを、

「人の生死しやうじは天より給はるもの。」

とて、さらに、薬用も、くはへず、貧、極りて、食事さへ、心にまかせずして終らせしが、いづくよりとり出いだけん、金三兩を布施にして、院號をこひうけしを、近邊の人、とがめていはく、

「三兩の金、たくはへあらば、妻女、存世中、薬用をもくはへ、食事をもこゝろよくさせて、看病せよかし。死して後、名のみ高くつきたりとて、何の益かあらん。」

と、もどき云「やぶちゃん注…逆らつて非難して言う。」を、此人、かしらをふりて、

「いや、さにあらず。虎は死して皮をのこし、人は死して名を殘のこす。薬用・食事についえをかけしとて、死しべき命いのちの、とゞまること、なし。是は、上なき、あつかひなり。」

と、そこ清く思ひとりしていにて、いさゝかも悔くの色なかりしとぞ。

獨身ひとりみとなりては、一衣いちえの外、たくはへなく、冬になれば、家の内、一面つちあなに土穴をふかくほり、あたりに段をつけて、鉢植をならべ、其中に琴をひきてたのしみ、寒をしのぎみしとぞ。

詩歌俳諧などのたぐひ、遊藝、すべて、勝すぐれたり。「いやしからぬ人の、なり下りたるならん」と察しられたり。【記者の思へらく、かゝる人には、添そひたくなし。】「やぶちゃん注…原割注。】

「やぶちゃん注…仙臺新てんま町」現在の宮城県仙台市青葉区中央(仙台駅及びその西方)附近(グーグル・マップ・データ)の旧町名。公園(ドットした)名やビル名に今も残る。「そこ清く思ひとりしていにて」「底清く思ひ取りし體ていにて」。心中深く清貧の思いを強く守っている様子で。

「記者の思へらく、かゝる人には、添たくなし」真葛の半生の経験や個人の女としての痛烈な述懐が、ガツンとくる。」

猫にとられし盗人

奥の正ほう寺、消失のことに有し^{あり}のち、諸國の末寺へ、納物^{をさめもの}の事、沙汰有しに、江戸なる徳安寺は末寺につきて、半鐘と雙盤^{そうばん}をわりつけられしに、其品、出來せしかば、和尚、「持參して、奥へ旅立。」

とて、曉天に立て、千手^{せんじゆ}「やぶちゃん注…千住のことであろう。」に小休^{しやうきゆう}して有し時、「希代の珍事、出來せし。」
とて、寺より、飛脚^{おひつき}、追付たり。

その故は、

「和尚、立後、人、少なるを見込^{みこみ}て、盗人の、『内をうかゞふ』とて、障子の紙を、舌にてぬらし、穴を明^{あけ}んとせしを、かねがね、和尚のひぞうせし猫の、其所^{そのところ}にふしめたりしが、舌の先へ、とび付て、かたくはへて、はなさず。盗人は、思ひよらぬこと故、もだへ、くるしみ、障子ごしに、猫をつよくひきしかば、いよいよ、猫も強く食^くたりしほどに、人々、音を聞つけて、見しに、猫もころされしが、盗人も死^したりき。」
と告^{つげ}たりける。

和尚、つぶさに、ことのよしを聞て、猫を哀^{あはれ}とcanじ、又々、もとの寺に歸りて、猫と盗人のあとをとぶらひ、しるしの石をたてゝのち、奥には下りしとぞ。

此僧、最上、出生^{しゆつしやう}なり。幼年より、出家のころざし、深切なりしが、勝^{すぐれ}たる美僧にて有しかば、十八、九のころ、娘子共^{むすめども}のしたふこと、さわがしかりしを、自^{おのづか}うれひて、廿一、二の頃なりしに、寺に、談義有て、人、多くつどひし時、諸人のみる前にて、羅切^{らせつ}したりき。生國^{しやうこく}のもの共は、感じ、たふとみし、とぞ。

最上より來りし、はしたばゝの、ことのよしをよくしりて、語^{かたり}し、まにまに、しるす。出家の道に忠^{ちゆう}有し故、手ならせし猫も、信^{しん}有て、主^{あるじ}の爲に命をすてしなるべし。

「やぶちゃん注…「正ほう寺」奥州にこの名の寺は幾つかあるが、恐らくは最も知られた、東北地方で最初に開創された曹洞宗古刹で仙台藩主伊達氏の帰依を受けていた、岩手県奥州市水沢黒石町字正法寺にある大梅拈華山圓通正法寺(しょうぼうじ)のことではないかと思われる。南北朝時代の貞和四(二三四八)年に無底良韶禪師によって開山された寺である。「消失」回祿による焼失。

「徳安寺」不詳。この名の寺は現存せず、「江戸名所図会」にも載らない。名前が違う可能性が高いが、所在地の片鱗も真葛は記していないのを恨みとする。なお、先の正法寺の公式

[サイト](#)によれば、現在も七十三ヶ寺の末寺を有するとし、宗門において特別の格式を保持する古刹として広く知られているとある。正法寺に直接聞けば、答えは出るかも知れぬが、そこまでやる気はない。悪しからず。

「**雙盤**」底本表記は『**双盤**』。仏具としての金属製の打楽器。台に伏せ置きに据えるか、木製の吊り台に吊って槌状の木製の桴ぼちで打ち鳴らすもの。「**鉦**」「**鉦鼓**」とも呼ぶ。「**双盤**」の名称は、本来、二つ一組で用いたことに由来するものの、現在は一つだけで用いられることが多いようである（参考にした[サイト](#)「[浅野太鼓楽器店](#)」のこちらで画像が見られる）。

「**最上**」[山形県最上郡附近](#)（グーグル・マップ・データ）。

「**羅切**」男根（陰茎）を切除すること（睾丸も含めて切除する場合もかく呼ぶ）。本邦の仏教では修行の妨げになるという意味で、インドの悪魔「マール」に由来する「**魔羅**」という隠語で男性器を呼んだことから、その「**魔羅**」を「**切断**」するという意で「**羅切**」と呼ばれるようになった、と[ウィキの「羅切」](#)にある。」

めいしん

「めいしん」といふ法、有とぞ。

是は、出家の災難に逢し時、身をのがるゝ爲の心がけにして、一生一度とおもふ時、おこなふ法なり。

ある和尚、「この法をしりたる」といふことを、橋本正左衛門といふ人、聞つけて、若きほどのことなりしが、奇なることをこのめる本性なりしかば、【正左衛門は、近親の内、伊賀三弟に八弥と云人、養子にせしかば、正左衛門の傳は八弥が語しなり。「やぶちゃん注…原割注。】一しきりに習得たく思て、和尚にしたしみて、常に行つゝ、夜ばなしのゝち、とまりなどせしことも多かりき。ことにふれつゝ、

「其法を傳へ給はらん。」

と、こひけり。

和尚の曰、

「やすきことながら、今、少し、心さだまらば、つたへ申べし。」
とて、ゆるさず。

其寺に、幼年よりつとめし小性の有しが、是も正左衛門に先立て、

「我、ならばじや。」

と、いどむ心有しが、正左衛門、其執心によりて、和尚にしたしむを、

『もし、先こされなば、くやしからん。』

と思て、しきりに、

「法を習はん。」

と、ねがひしかば、和尚も、もだしがたくや有けん、

「さほど深切に願ことならば、つたふべし。さりながら、正左衛門も、あの如く願をるを、

『そこにばかり傳へし』と聞かば、うらむべし。必、他言無用なり。」

とて、ひそかに傳へたりしとぞ。

正左衛門は、例の如く、夜ばなしして、とまりみしに、十月末のことなりしが、宵はさしもなくて、夜の間に、雪の降つもりしを、音なければ、誰もしらざりしを、丑みつともおぼゆる頃、

「ばつたり」

と、大きな音のせしかば、和尚はもちろん、正左衛門も、とびおきて行てみしに、和尚のはだつきぐぬを、晝、洗て、棹に懸て置たりしを、宵には雪のふらざりし故、とりも入ざ

りに、おほく雪のかよりしかば、物有ものありげに見えしを、かの小性、目もろくにさめずに小用たしにおきて、ふと、見つけ、

『大入道おほにふだうの立て有あり。』

と思ひて、

『是や、一世一度の難ならん。』

と、このほどならひし法をかけしに、あたらしき木綿肌着をかけたるが、棹共さざともに、切物きれものにて、きりたるごとく、眞まづた二つにさけたる音にて、有しとぞ。

小性は、おもてもあげず、ひれふしながら、

「眞平御めん被まつひらごレ下。」

と、わびるたり。

和尚、大おほいに立腹して、

「それみよ。『心の定まらぬうちには、ゆるしがたし』といひしは、爰こゝぞや。にくきやつかな。多年、目かけて召仕めしつかひしも、是切これぎりぞ。明朝、早々、立たちされ。」

と暇申渡いとままし、正左衛門にむかひ、

「そのもとには、たゞ愚僧が法をしむとのみ、思はれつらんが、あれぞ、手本なる。心定まらぬ人にゆるせば、けが有のみならず、法もかろく成行なり。かならず、うらみ給べからず。是は、幼年より召つかひしもの、他事なく願故ねがふ、『心もとなし』とは思ひつれど、ゆるしたりき。かくの如くの、けが、有ことにては、我さへ、こりて、さらに人には、つたへがたし。」

と云しとぞ。

其小性には、二度おこなひても、しるしなき、「けし法ほふ」をかけて、早々、追出おひいだされしとぞ。

正左衛門も、

『實げに、おそろし。』

と、思おもひて、ならはざりし。

「法といふものは、不思議のものぞ。たゞ、となへごとせしばかりにて、棹と、ひとへぎぬのさけたるは、あやしとも、あやしかりき。」

と、常に話し、とぞ。

「やぶちゃん注…本篇では「法」は「はふ」ではなく、総てを「ほふ」で読むこととした。通常一般の「法」の歴史的仮名遣は「はふ」であるが、仏教用語に於いては有意に「はふ」と読むからである。ここは密法中の秘中の秘術なればこそ、かく読んでおいた。

「めいしん」「めいしんといふ法」中国由来の「禅密気功」なるものが現存し、それを伝えるサークルも実際にあり、そこに「明心法」なるハイ・レベルの気功法があり、ある当該サークルの解説には、遠隔を含む「以心伝心」が可能となるように「三位一体」の精神状態に貫入し、「心」を悟ることが出来る気功法という解説がなされてあったが、それと同じとも思われない。但し、「めいしん」に当てる漢字としては腑には落ちるし、小姓（しばしば「小性」とも書く）の成した、その鎌鼬的斬法にもマッチするようには思われる。

「橋本正左衛門」不詳。

「正左衛門は、近親の内、伊賀三弟に八弥と云人、養子にせしかば、正左衛門の傳は八弥が語しなり」この真葛の割注は、「私の近親のうちに、夫只野行義伊賀を長兄とする三兄弟おり、その内の八弥と通称する人が正左衛門を養子に迎えたので、この正左衛門直話のこの話は、私自身は、その八弥から直接に又聴きして書き取ったものである」の意であると採る（「弥」の通称漢字は、当時の通行作品や地下文書などでも、「彌」ではなく「弥」と表記されることが多いので、敢えて正字にはしなかった）。真葛の怪奇談集が非常に優れている点も、**徹頭徹尾、実話譚であることを、本篇内の表現でも、また、こうしたわざわざ添えた割注でも、注意深く、しかもわざとらしくなく、ごく自然に配慮されて叙述してある点にある。**これは、糞のように見え見えな、確信犯の創作怪奇談が蔓延していた（現代のそれも九十九%がそうだ。だから、少しも怖くない）当時にあっても、特異的に真実味を細かな部分にまで施してあることにある。これは、近世怪奇談集の中でも飛び抜けていると言つてよく、しかもそれが数少ない女性作家によって成されている点でも、もっと広く知られてよいと私は思っている。

「切物」名物の太刀・刀。

「となへごとせしばかりにて、棹と、ひとへぎぬのさけたるは、あやしども、あやしかりき」竿と下着は雪の中で氷に近い温度まで下がっているとはいえ、有意に降り積もつて大入道の影に見えるほどになった柔らかな雪の被ったそれを、例えば大太刀であっても、一太刀で、「ばらりずん！」と、一刀両断に成すことは、当時の人を斬ったこともない多くの武士にも到底、出来まいという気がする。「めいしんの法」、恐るべし！」

狐つかひ

清安寺といふ寺の和尚は、「狐つかひ」にて有しとぞ。

橋本正左衛門、ふと出會てより、懇意と成て、をりをり、夜ばなしにゆきしに、ある夜、五、六人より合て、はなしゐたりしに、和尚の曰、

「御慰に、芝居を御目にかくべし。」

と云しが、たちまち、芝居座敷の躰とかはり、道具だての仕かけ、なりものゝ拍子、色々の高名の役者どものいでゝはたらくてい、正身のかぶぎに、いさゝかたがふこと、なし。

客は思よらず、おもしろきこと、かぎりなく、居合し人々、大に感じたりき。

正左衛門は、例のふしぎを好心から、分て悦、それより又、

『習たし。』

と思心おこりて、しきりに行とぶらひしを、和尚、其内心をさとりて、

「そなたには、飯綱の法、習たしと思はるゝや。さあらば、先試に、三度、ためし申べし。

明晩より、三夜つゞけて、來られよ。これをこらへつゞくるならば、傳授せん。」

と、ほつ言「やぶちゃん注」：「發言」。せしを、正左衛門、とび立ばかり悦て、一禮のべ、

「いかなることにも、たへしをぎて、その飯綱の法ならはゞや。」

と、いさみくて、翌日、暮るゝをまちて、行ければ、先、一間にこめて、一人、置、和尚、出むかひて、

「この三度のせめの内、たへがたく思はれなば、いつにても、聲をあげて、ゆるしをこはれよ。」

と云て、入たり。

ほどなく、つらつらと、鼠の、いくらともなく出來て、ひぎに上り、袖に入、襟をわたりなどするは、いと、うるさく、迷惑なれど、

『誠のものにはあらじ。よし、くはれても、疵「やぶちゃん注」：ルビはママ。』はつくまじ。』と、心をすゑて、こらへしほどに、やゝしばらくせめて、いづくともなく、皆、なくなりたれば、和尚、出て、

「いや。御氣丈なることなり。」

と挨拶して、

「明晩、來られよ。」

とて、かへしやりしとぞ。

あくる晩もゆきしに、前夜の如く、一人、居と、此度は、蛇のせめなり。

大小の蛇、いくらともなく、はひ出て、袖に入、襟にまとひ、わるくさきこと「やぶちゃん注…「悪臭きこと」。腥いのである。」、たへがたかりしを、

『是も、にせ物。』

と、おもふばかりに、こらへとほして有しとぞ。

「いぎ、明晩をだに過しなば、傳授を得ん。」

と、心悅で、翌晩、行しに、老人、有て、待ども、待ども、何も出こず。

やゝ退屈におもふをりしも、こはいかに、はやく別し實母の、末期に着たりし衣類のまゝ、眼、引つけ「やぶちゃん注…釣り上がり。」、小鼻、おち、口びる、かわきちぢみ「やぶちゃん注…「乾き縮み」。ミイラ化している雰囲気である。」、齒、出て、よわりはてたる顔色、容貌、髪、みだれ、そゝけたる「やぶちゃん注…解れて乱れている。」、まで、落命の時分、身にしてみても、今もわすれがたきに、少しも、たがはぬさまして、

「ふはふは」

と、あゆみ出、たゞ、むかひて座したるは、鼠・蛇に百倍して、心中のうれひ悲しみ、たとへがたく、すでに詞をかけんとするてい、身に、しみじみと、心わるく、こらへかねて、「眞平御免被レ下べし。」「やぶちゃん注…「まつびらごめんくださるべし。』」と、聲を上しかば、母と見えしは、和尚にて、笑、座して有しとぞ。

正左衛門、面目なさに、それより後、二度、ゆかざりしとぞ。

「やぶちゃん注…実は、本作は既に一度、『柴田宵曲 妖異博物館 飯綱の法』の注で、電子化してある。但し、今回はそれを元とせず、零からやり直した。なお、これは恐らく正左衛門の作話で（実録奇譚である本書の性質から、私は真葛の創作とは全く思わない）、その元は、かの唐代伝奇の名作、中唐の文人李復言の撰になる「杜子春傳」であろう。リンク先は私の作成した原文で、『杜子春傳』やぶちゃん版訓読・「杜子春傳』やぶちゃん版語註・「杜子春傳』やぶちゃん訳、及び、私の芥川龍之介「杜子春」へのリンクも完備させてある。但し、柴田はそれ以外に、『宇治拾遺物語』にある瀧口道則が、信濃の郡司から異術を習ふ話に似てゐる』とも記す。その「瀧口道則習術事」（瀧口道則（たきぐちのみちのり）、術を習ふ事）も「柴田宵曲 妖異博物館 飯綱の法」の注で電子化しておいたので、比較されたい。実際には、私の電子テキストには、この「飯綱の法」に纏わる怪奇談や民俗学上の言及が十件以上ある。『宗祇諸國物語 附やぶちゃん注 始めて聞く飯綱の法』や、『老嫗茶話卷之六 飯綱（イツナ）の法』も読まれたい。

「清安寺」不詳。この話、ロケーションが記されていないので判らない。本「奥州ばなし」は概ね仙台及び奥州を舞台とするものの、江戸と関わる話柄もあるからである。敢えて、陸

奥の比較的、仙台に近いところ（と言っても、仙台からは直線でも九十キロメートル以上ある）を調べると、山形県西置賜郡小国町白子沢にある曹洞宗清安寺（[曹洞禅ナビ](#)のこちらを参照されたい）はあるが、ここかどうかは不明である。青森県弘前にも曹洞宗の同名の寺がある。私が禅宗に拘ったのは、「和尚」を「おしやう（おしょう）」という呼称とするならば、狭義には臨済宗や曹洞宗などの禅宗系或いは浄土宗系で用いられるからである。

「狐つかひ」後の『[飯綱](#)』使ひ』に同じい。

「橋本正左衛門」先の秘術をテーマとした「[めいしん](#)」にも主人公として登場し、そこで真葛は『正左衛門は、近親の内、伊賀三弟に八弥と云人、養子にせしかば、正左衛門の傳は八弥が語しなり』と割注している通り、この手の妖術が大好きだったこと、真葛の怪奇譚蒐集の有力な間接的情報屋であったことが判然とする。

「[飯綱の法](#)」先の幾つかの怪奇談のリンク先で注してあるので、そちら参照されたいが、簡単に言っておくと、管狐（くだぎつね。或いは「イヅナ」「エヅナ」とも呼んだ）と呼ばれる霊的小動物（狐とあるが、狐様の場合もあれば、全く形容し難いニョロニョロ系の身体の場合もある）を使役して、託宣・占い・呪いなど、さまざまな法術を行った民間の呪術者である「飯綱使い」の法術で、「飯綱使い」の多くは修験系の男であるケースが殆んどで、江戸時代の実話で、れっきとした僧侶が駆使するというケースは、比較的、レアと言えよう。」

上遠野伊豆

上遠野伊豆と云し人、明和・安永「やぶちゃん注…一七六四年〜一七八一年。」の頃、つとめし人なり。【祿八百石。「やぶちゃん注…原割注。」】武藝に達せしうへ、分て、工夫の手裏劍、妙なりし。針を一本、中指の兩わきにはさみて、なげいだすに、その當、心にしたがはずといふこと、なし。元來、この針の工夫は、

「敵に逢し時、兩眼をつぶしてかゝれば、いかなる大敵にても、おそるゝにたらず。」と、思ひつきしこととぞ。

常に針を兩の鬢に、四本づゝ、八本、かくしきして置しとぞ。【此世の頃までは、いまだ、こわき敵も有つらんによりて、かくは思よりつらん。今の世人の弱きこと、たとへに取がたし。「やぶちゃん注…原割注。」】

先々、國主の御このみにて、うたせられしに、御杉戸の繪に、櫻の下に駒の立たる形、有しを、

「四ツ足の爪を、うて。」

と有しかば、二度に打しが、少しも、たがはざりしとぞ。

芝御殿類焼の前は、その跡、たしかに有し。

昔、富士の御狩には、仁田の四郎、猪にのりし、といふより、工夫にて、御山追「やぶちゃん注…藩主による鳥獸の山狩り。」の度毎に、いつも、猪に乘し、と云傳ふ。

正左衛門繼母は、上遠野家より來りし人なり。【この伊豆には「やぶちゃん注…にあつては、の意。」、また、甥なり。「やぶちゃん注…原割注。」】この人のはなしに、

「伊豆は、狐をつかひしならん、あやしきこと、有。」
と云しとぞ。

手裏劍と、猪にのるとの工夫など、あやうきことなり。さるを、

「なるや、ならずや。」

といふことを、とひあはするもの有て、

「思立しことなり。」

と語しとぞ。されば、正左衛門も、飯綱の法、習はんとは、せしなるべし。

八弥、若年の頃迄は、伊豆も老年にてながらへ有しかば、夜ばなしなどには、猪にのることを、常に語りて有しとぞ。

「逃てゆく猪にはのられず、手追「やぶちゃん注…手負ひ」に成て、人をすくはん「やぶちゃん注…掬はん」であろう。鼻と牙で下から掬うように襲うことであろう。」とむかひ

来る時、人の本「やぶちゃん注：直前。」にいたりては、少し、ためらふものなり。その時、さかさまに、とびのるなり。猪は、肩骨、ひろく、尻のほそきもの故、しり尾にすがりて、下腹にあしをからみてをれば、いかなる敷中をくぐるとても、さはらぬものなり「やぶちゃん注：背にある自分のことを襲うことは出来ぬものなのである。」。扱、おもふまゝ、くるはせて、少し弱りめに成たる時、足場よろしき所にて、わきざしをぬきて、しりの穴に、さし通し、下腹の皮をさけば、けして「やぶちゃん注：決して。」、仕とめぬことなし。」と云しとなり。

「手利劍は「やぶちゃん注：ママ。」、一代切にて、習人、なかりき。尤人のならはんといふこと有ても、元來、人にをしへられしことならねば、何と、つたふべきこともなし。たゞ、氣根よく「やぶちゃん注：根氣よく。」、二本の針を手につけてうちしに、おのづから得しわざなり。」

と答しとぞ。八弥にも、

「とせよ、かくせよ。」

と、其はじめをつたへられし故、少しはまねびしが、終に、なし得ざりし、とぞ。

「やぶちゃん注：「上遠野伊豆」上遠野広秀（生没年不詳）は江戸中期の兵法家で劍客。願立流劍術・上遠野流手裏劍術の使い手で、特に手裏劍の名人として「手裏劍の上遠野」と称された。伊豆守は通称。参照したウイキの「上遠野広秀」によれば、『上遠野氏は旧姓』は『小野氏』で、応永一一（一四〇四）年に『磐城国菊田庄（菊多郡、現いわき市）上遠野に住んだことから』、『この地名を名乗るようになった。第』十『代上遠野高秀（伊豆守）が伊達政宗に招かれて家臣となり』八百四十三『石を扶持された。広秀は明和、安永』の頃の人で、仙台藩で『三』千石取りとなっていた。家伝の願立』流劍術（正しくは単に「願立劍術」と呼ぶ）『のほか、独自に手裏劍術を工夫した』。『広秀が手裏劍の技を工夫したのは、相手の眼を潰してしまえば』、『いかなる大敵でも恐るるに足りない、という考えからであったといわれる。広秀はいつも両の鬢に』四『本ずつ、計』八『本の針を差しており、この針を指の脇にはさんで投げると』、『百発百中といわれた。広秀は「手裏劍の技は一代限りのもので、教えてもらって上達するものではない。根氣よく自分で工夫して針』二『本打つことを習得すれば、自然に上手になる。』と語ったという。』あるとき、仙台藩』七『代当主、伊達重村』（在職は宝暦六年（一七五六）年七月から寛政二（一七九〇）年（隠居）まで）『が江戸・芝の上屋敷で、御杉戸の絵に、桜の下に馬が立っている図を見て、この馬の足の爪に針を打ってみよ、と命じたところ』、二『本打って』二『本とも』、『命中した。このときの針の痕は、後に上屋敷が焼失するまで残っていたという。』また、『治承・寿永の乱（源平合戦）

の昔、仁田四郎が富士の巻狩りで猪の背に乗ったという逸話を聞き、広秀も山狩りのたびに猪を見つけて飛び乗ることを得意とした。広秀は、猪の背に後ろ向きに乗り、尻の穴に脇差を刺し通せば、『必ず』、『仕留めることができる、といったという。』また、広秀の打針は、後に仙台侯の息女が水戸藩へ興入れた際に笄（こうがい）『として伝わり、これを水戸弘道館の剣術師範をしていた海保帆平（北辰一刀流）が工夫し、安中藩師範の根岸松齡に伝えたのが根岸流手裏剣術の始まりである』とある、大変な達人なのである。真葛の言っていることは、ここに書かれている事実と殆んど違わない。凄いことだ。

「芝御殿類焼」これは、恐らく明和九年二月二十九日（一七七二年四月一日）に発生した大「明和の大火」であろう。真葛は当時十歳で、江戸にいた。父平助は仙台藩藩医として、特別に築地に邸宅を構えており、父の付き添いで上屋敷に入ることもあったに違いない。ここは、直接過去の「き」が用いられているからには、これ以前に、彼女自身、その上遠野広秀が杉戸の馬の蹄に打ち打った針の痕を見しただけを意味しているのである。なお、この「明和の大火」の庶民の惨状が僅か十歳の彼女に強く刻印され、彼女をして後に救民思想を持つに至る引き金となった回祿だったのである。

「仁田の四郎」仁田忠常（仁安二（一一六七）年〜建仁三（一一一三）年は『仁田伊豆国仁田郷（現静岡県田方郡函南町）の住人で』、治承四（一一八〇）年の『源頼朝挙兵に加わっている。頼朝からの信任は厚く』、文治三（一一八七）年一月、『忠常が危篤状態に陥った時、頼朝が自ら見舞っている。平氏追討に当たっては源頼朝の軍に従って各地を転戦して武功を挙げ』、文治五（一一八九）年の「奥州合戦」に『おいても戦功を挙げ』ている。建久四（一一九三）年五月二十八日に発生した「曾我兄弟の仇討ち」の際には、『兄の曾我祐成を討ち取』っている。『頼朝死後は跡を継いだ二代将軍・源頼家に仕えた。頼家からの信任も厚く、頼家の嫡男一幡の乳母父となっている』。ところが、建仁三（一一一三）年九月二日、頼家が病いのために危篤状態に陥って「比企能員の変」が『起こると、忠常は北条時政の命に従い、時政邸に呼び出された頼家の外戚・比企能員を謀殺した』。五日、『頼家が回復すると、逆に頼家から』、『時政討伐の命令を受ける。翌晩、忠常は頼家の命を受けながらも、能員追討の賞を受けるべく』、『時政邸へ向かうが、帰宅の遅れを怪しんだ弟たちの軽拳を理由に』、『逆に』謀反の疑いをかけられ、時政邸を出て御所へ戻る途中、『加藤景廉に殺害され』てしまった。享年三十七であった。頼朝の代に『行われた富士の巻狩りにて、手負いの暴れる大猪を仕留めたとされて』おり、頼家の代では、『富士の狩り場へ行った際、頼家の命』を受けて『静岡県富士宮市の人穴を探索し』てもいる（以上は彼のウィキに拠った）。

「橋本正左衛門」「めいしん」・「狐つかひ」に登場した、間接的乍ら、真葛の大事な情報元である人物。

「なるや、ならずや。」「修練を積めば、上達するものか？ そうでないか？」。

「思立しことなり」おもひたち ここは少しウイキで言っていることと相違しているように見える。則ち、「ある時、思い立って始めた」ことである、と言っているのである。しかし、これは必ずしも違っているとは言えない。「ある時、自分には、その特異な能力があると、気が付いたから、鍛錬を始めた」という意味でとれば、納得がゆくのである。しかし、正左衛門はそういう意味ではなく、鍛錬すれば、誰でも、その能力を引き出せる、という意味に勝手に解釈したと理解出来るからである。だから「飯綱の法」を習おうとした。しかしそれは、小姓の軽率な使用によって和尚本人が封印してしまいう結果となり、正左衛門は習得出来なかった。しかしそれも考えてみれば、「心定まらぬ人」が使えば、途轍もなく危険なものであったという点で、このケースと親和性があると言える。そうして、上遠野伊豆の手裏剣術に生来の素質無き者には習得不能であることは、最後の八弥の事実が証明しているのである。

「正左衛門も、飯綱いづなの法習はんとは、せしなるべし」「狐つかひ」を参照されたい。

「八弥」橋本正左衛門の養子。「めいしん」の本文を参照されたい。「弥」を正字化しなかったのもそれに準ずる。」

砂三十郎

鐵山公と申せし國主の御代には、「ちから持」といはれし人も、かれ是、有し中に、砂三十郎と云し士、男ぶりよく、大力にて、知恵うすく、みづから力にほこりて、大酒なりしが、酒に酔ゑひて歸る時には、夜中、通りかゞり次第に、辻番所を引かへすが、得手物にて、度々のことなりし。寺にいたりては、つき鐘をはずしてこまらせなど、大の徒人いたづらびとなり。

「細横町ほそよこまちといふ所に、あやしきものゝ出いっる。」

と聞て、三十郎、行しが、餘り歸のおそき故、跡より、行てみたれば、塀へいかさ「やぶちゃん注…「塀笠」。」の上に、またがりて居たり。

「何故、そこにはのぼりし。」

と、聲かけしかば、

「いや、此馬の口のこわさ、中々、自由、きかぬ。」

と云て有しとぞ。

「とく、ばかされしぞ。」

とわらはれて、心付しとなり。

其ころ、清水左覺と云し人も、大男に大力なりしが、おとなしき人にて、さらにいたづらはせざりしが、三十郎と、常に力をあらそひて、たのしみしとぞ。

左覺、三十郎にむかひ、

「その方、力自慢せらるれど、尻の力は、我にまさらじ。先、こゝろみよ。」

とて、尻のわれめに、石をはさみて、三十郎にぬかせしに、抜ぬかねて有しとぞ。

左覺は、我わがおもふ所に、一身のちからを集あつむることを、得手たりし。

三十郎、男だてに、いろいろの悪食あくじきをせしとぞ。

「何にても、食くたるものを、はかん。」

といふに、心にしたがひて、はかれしとぞ。

是、一藝なり。昨日、食たるこんにやくのさしみを、味噌とこんにやくと、別々に、はきてみせなど、したりき。

さかやきをすらせる時、頭中あたまぢゆうにちからをあつむれば、髪そり、をどりて、すられざりし。

ある時、酒の肴さかなに、うなぎを、生いながら、食くとせしに、早く、手をくゞりて、腹中はらなかへ一はしりに入いりしとぞ。腹中にてうなぎのあばれしこと、やりにて、つかると如く、さすがの三十郎も、大おほにより、鹽しほ三升を、なめつくしても死せず、にぎり酒二升、たてのみに仕したりしかば、是にて、うなぎ、しづまりしとぞ。

この悪食にて、四、五日、腹の病やまひにふしたりし。見廻みまはりに、左覺、來りて、やうす見合みあはせ、『又々、なぶらん。』

と思ひて、

「いや、そこもとは、いろいろ、悪食せらるれども、犬の糞くそは、くはれまじくや。」
と、とふ。三十郎、

「いや、是は、一向、氣なしなり。」

と、こたふれば、

「われらは、たて引びきなれば、食くふてみせやう。いぎ、ゆきて、みられよ。」

と、すゝめて、うす月夜のことなりしが、かねて、麥こがしをねりて、きれいなる石の上に、糞のごとく、つきかけて置しを、

「むき」

と、つかみて食くひてみせしかば、三十郎、大あやまりなりしとぞ。【昨日、當作饗まじにつくれるあへ、食物、既に腹内はらうちに入れば、半時にして消化せざること、なし。さるを、昨日くらひしものを、一夜歴ひとよへて、そがまゝに吐くこと、理ことわりのなき所なるべし。解「やぶちゃん注よぶわら：曲亭馬琴の本名。】云。【やぶちゃん注よぶわら：原頭注。】

度々、江戸づめもしたりしが、新橋の居酒屋へ入て、酒をのみてゐたりし内、はき物を、とられしとぞ。【此頃までは、みだりに履物をとらるゝことも、なかりしなり。この時より、江戸中、客のはき物を、しまつすること成し、とぞ。大あばれして、町人に仕置せしは、三十郎が手柄なり。【やぶちゃん注よぶわら：原割注。】歸らんとおもひて見るに、はきものなければ、亭主をよびて、

「はきものゝしまつせぬこと、あしゝ。」

と、りくつ、云かゝる。亭主は、

「しらぬ。」

よし、こたへしかば、大おほいにいかりて、

「此みせに有うちは、且那なり。『だんなの、はき物、しらぬ』といはゞ、よし。その過怠くわたいに、酒代、はらはじ。」

と云を、

「それは、いかにも、御無理なり。」

といふ時、酔きげんのあばれぐさに、

「さあらば、食しものは、吐はきて、かへすぞ。」

と、いひながら、かの得手ものゝ分わけばきに、酒は、ちろりに、肴は、鉢はちに、味噌は、猪口ちよくと、其入そのいりたりし器うつは々々へ、吐はきちらすを見て、

『あばれもの。』

と思ひ、かやうの時、とりしづむる爲、かねて、たのみおきし若きもの、五、六人、つれ來、かゝらせしに、片手につかみて、人つぶてに、打し故、

「すは、こと、有。」

とて、むらがる人を、なげのけ、なげのけ、屋敷をさしてもどる道筋、

「あばれもの、あばれもの。」

と聲かけしかば、何かはしらず、棒を持って出る人あれば、とりかへして、なぐりのけ、

「はしごをもちて、とどめん。」

とすれば、又、とり返して、むかふの人を、兩方へ、なぐり、なぐりて、おしとほる故、木戸を打しも「やぶちゃん注：閉じたところが。」、おしやぶり、むらがる人中を、平地の如く、大わらはに成て、かへり、白晝に、はだしにて、御門へ入しかば、早々、仙臺へ、追くだされたりき。

さりながら、

「氣味よき、あばれやうなりし。」

と、人々、かたりき。

三十郎、娘兩人、有しが、とりどり、美女、大力なりし。

姉、七ツなりしころ、大根漬るに、

「おもはしき、おし石、なし。」

と云しを聞て、川近き家なりしかば、河原にいたり、

「是や、よからん。」

と思ふ石を、ひとり、とり持て、家に来り、

「此石が、よかるふ。」

と云しを見るに、子共の持べしとも思はれぬ大石なりしかば、見る人、おどろき、

「其やうな大石を、子共はもたぬもの。」

と、しかりしかば、『ほめられん』と思ひし、心、たがひて、いそぎ、手をはなせしに、足の上に當て、ゆび、壺本、ひしげし、とぞ。

其石を、かたづけんとせしに、大男、兩人して、やうやう、うごかしたりき。

外に嫁しては、力は、かくして、さらに出さざりしが、ある年のくれに、年始酒を作りて有しが、置所、あしかりしを、

「置直すには、皆、とり分て、せねばならぬ。」

と云し時、

「このまゝにて、もたるゝや、いなや、心みん。」

とて、手も廻らぬほどの大桶おほをけに、酒の、なみなみと入たるを、かろがると、外の所へもち行って、すゑたりし、とぞ。

次の娘は、八才より、江戸の御殿につとめて有しが、誰も力ちからの有とはしらざりしに、御風入おんかざいれ有しころ、俄に夕立して、雨の落かりたれば、外に出して有し長持ながもちを、片手打かたてうちに、上へなげ入たりしを見て、

「力、有。」

とは、人、しりたりし。葉賀はが皆人みなとといふ人の妻と成て終りし。

「やぶちゃん注：大正一〇（一九二一）年実業之日本社刊の熊田葦城くまだいじょう（文筆家で歴史学者。報知社（現在の報知新聞社）の編集局長などを務めた。徳富蘇峰と親交し、彼と同じくジャーナリストとして歴史に関わる著作物を多く出版した）著「少女美談」のこちら（[国立国会図書館デジタルコレクションの画像](#)）に、本篇の後半部がやや表現に手を加えた形で載っている。流石に、この標題の本に「犬の糞云々」の話のカットは仕方ない。なお、「葉賀皆人」の読みは、そのルビに従った。

「鐵山公と申せし國主の御代」「白わし」で既出既注であるが、再掲すると、仙台藩主に「鐵（鉄・鋏）山公」という諡号の藩主はいない。「鐵」「鉄」「鋏」の崩し字を馬琴が誤ったか、底本編者が判読を誤ったかしかないと感じる。可能性が高いと私が思うのは、「鉄・鋏」の崩しが、やや似ている「獅」で、獅山公しげんこうは第五代仙台藩藩主にして「中興の英主」と呼ばれる伊達吉村（延宝八（一六八〇）年〜宝暦元（一七五二）年）を指し（戒名「續燈院殿獅山元活大居士」。諡号「獅山公」、元禄一六（一七〇三）年から隠居した寛保三（一七四三）年まで、実に四十年もの長きに亘って藩主を務めた。本書は文政元（一八一八）年成立であるが、例えば、真葛は、名品の紀行随想「磯づたひ」の中で、鰐鮫への父の復讐を果たした男の話の聞き書きを、「獅山公」時代の出来事、と記している。

「砂三十郎」不詳。

「辻番所を引かへす」「引きかへす」というのは、「引っ繰り返す」で、無体な乱暴狼藉を働くということであろう。

「細横町」現在の仙台市中心部を南北に走る幹線道路の一つである晩翠通ばんすいとおりの旧称。同ウイキによれば、『かつてこの通りの大部分は細横丁（ほそよこちょう）と呼ばれていた』とある。[ここ](#)（[グーグル・マップ・データ](#)）。

「いや、此馬の口のこわさ、中々、自由、きかぬ」塀笠ていかさに跨またかっている訳だから、化かされて、塀ていを生き馬と錯覚さくかくさせられている（笠かさは鬘たてかみで腑はらに落ちる）為ため体たいなのである。

「清水左覺」取り敢えず「しみづさかく」と読んでおく。

「心にしたがひて、はかれしとぞ」南方熊楠と同んなじだ!!!

「たてのみ」立て続けに休まず一気に呑むことであろう。

「いや、是は、一向、氣なしなり。」「さて、いやいや、それは、いくら何でも、全く食う気にはならんよ。」

「たて引なれば」「立て引く」は「達て引く」などとも書き、「義理を立て通す・意地を張り合う」の意であるから、ここは「私が、かくも言い出したからには意地がある。食うて見せよう!」と言ったものであろう。

「麥こがし」「麦焦がし」「麦粉菓子」とも書く。大麦や裸麦を炒って、挽き粉末にしたもの。

関西では「はったい粉」「炒り粉」とも呼ぶ。砂糖を混ぜて粉末のまま食べたり。熱湯や牛乳を注いで練って食べたりする。和菓子の落雁の材料でもある。安土桃山時代から、湯水に点じて、「こがし」（今日の香煎こうせんと同じ）として好まれた。

「ちろり」酒を爛するための容器で、酒器の一種。注ぎ口と取っ手の附いた筒形で、下方がやや細くなっている。銀・銅・黄銅・錫などの金属でつくられているが、一般には錫製が多い。容量は一合前後入るものが普通。「ちろり」の語源は不明だが、中国にこれに似た酒器があることから、中国から渡来したものと考えられている。江戸時代によく使用された。

「猪口」「みぐち」「ちよこ（ちよこ）」とも読める。日本酒を飲む際に用いる陶製の小さな器。上が開き、下のすぼまった小形の盃さかずき。江戸時代以降に用いられた陶製の杯について称する。

「人つぶてに」拳固げんこで。

「平地の如く」何の障害物もないかのように。

「白晝に、はだしにて、御門へ入しかば」この酒を飲んだ果ての大立ち回り、実は真っ昼間だったわけだ! 御門は仙台藩下屋敷であろう。[品川区東大井](#)（[鮫洲](#)）にあった（グレーブル・マップ・データ）。

「ひしげし」潰れた。拉ひしゃげた。

「御風入」夏の土用に、虫害や黴かびを防ぐために、屋敷全体に風を入れたり、仕舞ってある物品などを、庭や座敷に出して陰干しすることを指す。

「片手打に」片手だけでヒョイと取り上げて。

「葉賀皆人」不詳。」

澤口忠大夫

澤口忠大夫と云し人も、大力なりし。【覺左衛門が養父なり。「やぶちゃん注…原割注。」】
勝すぐて氣丈きぢやうもの、なりし。

かの三十郎がのせられたる、細横町ほそよこぢやうの化物「やぶちゃん注…**砂三十郎**参照。」を、た
めしたく思ひて有しとぞ。【十八才の時なり。「やぶちゃん注…原割注。」】

外ほかへ夜ばなしに行し歸りがけ、兩三人、つれも有しが、冬のことにて、八ツ時分なりし「や
ぶちゃん注…定時法で午前二時頃。」。雪後、うす月の影、少し見ゆるに、細横町を見通す所
にいたりて、つれの人々にむかひ、

「我、多日、この横町の化物を、ためしたしと思ひしが、時といひ、夜といひ、今夜を過す
べからずと思はるれば、獨行ひとりて、見とゞけたし。失禮ながら、そなた方は、これより、か
へり給はるべし。」

と、いとま、こひしかば、のぞみにまかせて、吉人ひとりやりつれど、つれの人も、物ゆかしけれ
ば、其所をさらで、遠見してゐたりしに、中頃までも、行つらん、とおもふころ、下にゐて、
少し、ひまどりて、あゆみ出いせしが、又、下に、ゐたり。少し、間、有て、又、あゆみ出せ
しが、また、下に、ゐたり。

さて、月影に、
「ひらり」

と、刀の光、見えし故、

「こと有つらん。」

と、足をはやめて、つれの人々、來りたり。

「いかにしつるぞ、下にゐがちなりしは。」

と問へば、忠大夫、曰、

「さて、こよひのごとく、けちな目に逢しこと、なし。けさ、おろしたるがんぢきの緒の、
かたしづゝ、一度に切きて、やうやう、つくろひて、はきしに【「がんぢき」は、雪中、はく、
くつの名なり。「やぶちゃん注…原割注。」】、爰にて、兩方、一度にきれし故、『つくろはん』
と思しおもうち、肩にかゝりて、おすものゝ有しを、引はづして、なげ切きにせしが、たしかに、
そこの土橋の下へ入しと見たり。尋たづくれよ。」

と云し故、人々、行て、みれば、子犬ほどの大猫の、腹より、のんど迄ききられて有しが、
息はまだ絶ひざりしを、引出ひきしたり。

忠大夫、頭を、おさへて、

「誰ぞ、とゞめをさし給はれ。」

と云しを、つれの人は、うろたへて、忠大夫が手を、したゝかに、さしたりしを、忠大夫、刀を、とりかへして、とゞめさしたりし、とぞ。

この時、きられし跡は、一生、手に残りて有しとぞ。

「猫には、けがもせで、人に、あやめられし。」

と語しとぞ。

忠大夫は鐵砲の上手なり。【はき物の緒を切しは、まさしく、猫のせし、わざなるべし。いかにして切しものなるや、ふしぎのことなり。】「やぶちゃん注…原割注。」

「やぶちゃん注…今まで言い添えてこなかったが、本篇「奥州ばなし」には、真葛自身の先行作品である「むかしばなし」という作品の巻五・巻六の内容と重複する話柄が多い（私は「奥州ばなし」が怪奇談に特化していて、非常に面白いと判断して先に電子化したのだが、これが終わったら、そちらの電子化注を始動するつもりである。但し、そちらは真葛が実母の思い出を妹のために書き残す目的で書き始めたものが、いろいろな聴き書きが増えて、かなりの分量になった随想であって、怪奇談集というわけではない）。この一篇もその一つで、実は、「むかしばなし」の同じ話（巻五にある）は、「柴田宵曲 妖異博物館 大猫」の注で電子化しており、柴田が平易な現代語に訳してもいるので、参照されたい。

「澤口忠大夫」上記の通りで、以下の養父とする「覺左衛門」もともに、或いは「むかしばなし」の中で人物がはつきりしてくるようになっていくと思う。さらに補足しておく、**「柴田宵曲 妖異博物館 化物の寄る笛」**には、この人物が再登場し、やはり私が「むかしばなし」のそれを注で電子化してあるのである。そこに**「福原縫殿**という人物を挙げて、この沢口忠大夫の弟子であったとするのである。しかし、この**「福原縫殿**（安永六（一七七七）年～天保一二（一八四一）年）は実在した陸奥仙台藩士であったことが判っている。これを以て改めて、本篇の真葛の怪奇談が総て実録であることを、今一度、再認識して戴きたいのである。

「多日」長いこと。

「ためしたし」相手にしてみたい。

「今夜を過すべからずと思はるれば」今夜のこの時は、時刻といい、天候といい、**「物怪に逢**うて対峙するに絶好の折りであり、この期を逃してはなるまいぞと思うによって。

「物ゆかしければ」おっかなびつくりもあるが、何となく心惹かれ、ちよいと好奇心を掻き立てられたので。

「中頃までも、行つらんとおもふころ」遠くはないけれども、沢口のいる辺りから有意に距

離をおいたところ(但し、夜目には沢口が現認出来る距離である)まで来たかと思って、振り返って見はるかしたところが。

「下にみて」距離をおいているので、沢口が何をしているかは判然としないものの、明らかに道にしゃがんでおり。

「けさ、おろしたる」今朝、おろしたばかりの新品の。

「がんぢき」「標」「櫛」などと漢字表記し、一般には「かんじき」と呼ぶ、雪の上で作業したり、歩行する際、めり込みを防いだり、滑り止めのために装着した履物。標準サイズは長さ三十二・五センチメートル、幅二十二センチメートル、重さ七百四十グラム程で、藁靴やゴム長靴の下に履く。二本の木を組合せて輪を形作り、その接合部分に「ツメ」と称するアイゼン状の滑り止めを附す。大正前期まで使用され、冬季の作業には欠かせないものであった。

「かたしづゝ」片足ずつ。

「刀をとり、かへして」私は「自分の刀を、やおら、とって、返り斬りにして」の意でとる。誤って刺した男の刀とすると、勇猛な武士としては、ちょっと不審だからである。」

「やぶちゃん注…以下は、同じ怪火「龍燈」（日本各地に広く伝わるかなりメジャーな怪火現象。概ね、海中より出現し、海上に浮かんた後、幾つもの火が連なったり、海岸の木などにとまるなどとされる。龍神の棲み家とされる海や河川の淵から現れることが多く、「龍神が灯す火」として「龍燈」と呼ばれ、時に神聖視もされていた。枚挙に暇がないが、「諸國里人談卷之三」がよからうか。「橋立龍」・「嗟叱龍燈」・「野上龍燈」・「光明寺龍燈」がある。また、「三州奇談續編卷之七 朝日の石玉」や「三州奇談續編卷之八 唐島の異觀」も見れたい）を扱っているだけでなく、二篇目は一篇目に対する真葛の考証である。」

四倉龍燈

橋本正左衛門、りうが崎の役人をつとめしころ、少々、上の用金を廻し、旅行のこと有しに、東通りの道中にて四倉と云所に着、人歩「やぶちゃん注…古くは「にんぶ」。公役に徴用された人民。夫役を課された人民。」を、つぎかへしに、滯て、出ず。

「このあたり、物さわがしきこと、有。」と聞て、

「一寸も早く、此宿を行ぬけん。」

と、いらだちて催促せしに、日も暮かゝりしを、

「いそぎの用事。」

と、いひたて、夜通しに人歩を云つけしかば、駕人足ばかり出たりしを、正左衛門、駕にて先へ行、養子八弥に目くばせして、用金入たる物を、さあらぬていにて残し置、

「少しも早く、追付、來れ。」

と云付て立たりしに、八弥、其とし、十八才なりし、大事の荷物、あづかり、心づかひ、いふばかりなし。宿にては、

「物さわがしきをりふし、夜通しに荷廻しは、しごく、あやうし。ひらに、一宿有て、明日早く、出立あれかし。おそれて、人歩も出がたし。」

といはれて、いよいよ、氣もまどへど、

「よし。途中にて、こと有とも、おめおめ、おち恐れて一宿しては、養父に云譯なし。」と、心をはりて、荷物に腰をかけて、人歩を、ひたすらに、せつきしに「やぶちゃん注…せつついたところが。」、四頃「やぶちゃん注…午後十時頃。」に、漸出し馬方は、十二、三の小女兩人なりし。

『まさか。時は、足手まとひぞ。』

と思ふには、有かひもなく、心ぼそけれど、

「是非にをよばず。」「やぶちゃん注：ママ。」
引立行しに、

「その『物さわがしき』と云は、今、行かゝる海邊。うしろは、黒岩そびへたる大山、前は大海にて、人家たえたる中程の岩穴に、盜賊、兩三人、かくれるて、晝だにも、壹人旅のものをとらへ、衣類・身の廻りをはぎとりて、骸を海になげ入しほどに、人通り絶しをりにぞ有し。」

と、馬子共のかたるを聞て、いよいよ、心もこゝろならぬに、はるか遠き海中より、さしわたり壹尺餘りなる、火の玉の如き光、あらはれ、くらき夜なるに、足本の小貝まで、あらはに見えたり。

「はつ」

と、おどろき、

「あれは、何ぞ。」

と、馬子にとへば、

「こゝは龍燈のあがる所と申すから、大方、それでござりませう。」
と、こたへて、はじめて見し、ていなり。

ことわりや、十二、三の小女、いかで、深夜に、かゝる荒磯をこすべき。

八弥も、

『おそろし。』

とは思ひつれど、さらぬだに、三人の小女「やぶちゃん注：底本では「三」の右にママ注記。」
ふるふ、ふるふ、馬、引ゆくを、

『おぢさせじ。』

と、氣丈にかまへて、ひかせ行、

「盜人の住と云、岩穴かく成たらば、聞せよ。」

と、いひ置しに、小聲にて、

「此あたりぞ。」

と、つげしかば、

「何ものにもあれ、出来たらば、たゞ一打に切さげん。」

と、鏢もとを、くつろげて、心をくばり行過るに、小女、云、

「こよひは、留守でござりませう。あかりが見えませぬ。」

と云しかども、

「留守と見せても、ふと、出くるや。」

と、油断せざりしが、盗人の運や、つよかりけん、かしらも、きられざりき。

海中の光は、みたび三度迄見たりしとぞ。

八半過やっはんすき「やぶちゃん注…午前三時過ぎ。」に、先の宿にいたりしに、正左衛門は、用金、あつけおき残して、若き者に預置、

「ものさわがし。」

と聞て、いねもやられず、門に立てまちみしが、遠く来りし影を見るより、

「やれ、八弥、不難ふなんにて来りしか。よしなき夜通しして、大苦だいくをまうけしぞや。」

とて、よろこび悦しとぞ。

「やぶちゃん注…この話、仙台での話ではないので注意されたい。」

「四倉」旧福島県石城郡よつぐらまら四倉町。現在は福島県いわき市四倉町(グーグル・マップ・データ。以下同じ)。当時は磐城平藩領かと思われる。

「橋本正左衛門」「養子八弥」ともに、最早、本書ではお馴染みの藩士とその養子である。

「りうが崎の役人」常陸国河内郡龍ヶ崎村、現在の茨城県龍ヶ崎市にあった仙台藩常陸国龍ヶ崎領の仙台藩龍ヶ崎陣屋の代官附きの役人であろう。初代藩主伊達政宗は、慶長一一(一六〇六)年三月に徳川幕府の代官から、常陸国河内郡(現在の龍ヶ崎市と茨城県稲敷市の一部)内と信太郡(現在の茨城県稲敷郡)内の二十六ヶ村(一万石余り)を与えられて、仙台藩常陸国龍ヶ崎領が生れた。現在の龍ヶ崎市の大半が含まれ、龍ヶ崎村に陣屋を構えて代官を置き、常陸国における仙台領支配の中心地として、また、江戸との物流に中継地としたため、龍ヶ崎は繁栄した。

「上の用金を廻し」藩の御用金の輸送のようである。

「東通り」福島県東部の太平洋側沿岸の南北の広域地域を指す「浜通り」のことであろう。こうした呼び方は今はないと思うが、方位的には腑には落ちる。

「つぎかへしに」「継ぎ變しに」。そこまで雇った馬方人足と駕籠人足を次ぎ替えようとしたところ。

「夜通し」夜間運行。

「荷廻し」馬方による荷物運送。

「その『物さわがしき』と云は、今、行かゝる海邊。うしろは、黒岩そびへたる大山、前は大海にて」地図を見るに、四倉から北へ向かう岬を回り込むルート(この道中がその方向であつたかどうかは判らぬが)は、このロケーションに「バッチ・グー!」(グーグル・マップ・データ航空写真)で、「蟹洗の磯」から「鷹ノ巣」という地名の岬に次いで「波立(はったち)海岸」ときた日にゃ、ここでなくてどうしますか!?! てえんだ!

「骸」言わずもがな、殺した旅人の遺骸の意。

「くらき夜なるに、足本の小貝まで、あらはに見えたり」さりげない描写だが、怪談のキモをしつかり押さえた大切なリアリズム・シーンである。

「かしらも、きられざりき」先に八弥は「一刀のもとに斬り下げてやる！」と生きこんでいたから、「かしら」は盗賊らの頭部の意である。

「先の宿」北上が正しいルートなら、時間と距離から見て、[福島県双葉郡広野町](#)辺りか。」

龍燈のこと

海の漁をするものゝはなしに、世に「龍燈」と云ふらす物、實は、火にあらず、至て、こまかなる羽蟲はむしの、身に螢ひかりあるの如く光有ものゝ、多く集れば、何となく、ほのほ「やぶちゃん注…炎。」の如く見なざるゝものなり。

夏の末、秋にかゝりて、ことに、おほし、時とき有て、おほく、まとまりて、高き木のうら「やぶちゃん注…末」で「うれ」とも言い、梢こずえのこと。」、又は、堂の軒端などにかゝるを、火の如く見ゆる故、人、「龍燈」と名付しものなり。

筑紫の「しらぬ火」も、是なり。

水上うまゐに生る蟲にて、螢たぐひの類なり。沖に舟をかけて、しづまりをれば、まぢかくも、つどひくれど、息、ふきかくれば、たちまち散ちりて、見えずなるなり。

されば、「かならず、此日には、龍燈、あがる」といふ夜も、大風、吹ふき、又は、雨ふりなどすれば、「あがらず」と聞きを、此夜、四倉にて見し光は、是とは異なり、いづれ、ふしぎの光にぞ有し。【解云、この説、極めて、よし。ためして見つるにはあらねど、ことわり、さあるべくおぼゆるかし。】「やぶちゃん注…原頭注。】

「やぶちゃん注…羽虫というのは正体説として全く現実的でないが（蛍以外に、そのような発光状態を持つ「昆虫」は本邦には棲息しない。下界の人工光の反射現象は問題外として、ある種の発光バクテリアを附着させた鳥や昆虫が飛翔して光る可能性は否定は出来ないが、そうした事例を実際に現認したことなければ、そうした科学的事実を立証したデータを見たこともない）、所謂、球電などの物理現象としては、理論上は成立する（実際に私自身は説明不能の火球現象を見たことはない）。ただ、真葛の言い添えている「沖に舟をかけて、しづまりをれば、まぢかくも、つどひくれど、息、ふきかくれば、たちまち散て、見えずなるなり」というのは、実態を正確に述べているとは言えないものの、ホタル類と同一ルシフェリンルシフェラーゼ反応 (Luciferin-Luciferase reaction) で発光するウミホタル（節足動

物門甲殻亜門顎脚綱貝虫亜綱シオドコバ。上目 *Myodocopa* シオドコビダ目ウミホタル亜目
ウミホタル科ウミホタル属ウミホタル *Laryula higerdorffi*) やヤコウチュウ (アルベオラー
タ *Alveolata* 上門渦鞭毛植物門ヤコウチュウ綱ヤコウチュウ目ヤコウチュウ科ヤコウチュ
ウ属ヤコウチュウ *Noctiluca scintillans*) の発光様態と親和性を持つ内容ではある。因果教
訓を垂れたり、糞のような怪奇談明かしをして天狗になっている浮世草子怪談作家なんぞ
に比べたら、真葛は遙かに優れた民俗学者であるとさえ言える。」

狐火

七月半頃、年魚しきりにとらるゝ時、夕方より、雨、いとまなくふりければ、

「こよひは、川主も魚とりには出じ。いぎ、徒ごとせばや。」

と、小性共兩人、云あはせて、孫澤の方へ、河つかひに行しに、狐火のおほきこと、左右の川ふちを、のぼり、下り、いくそぼくてふ、數もしれぎりしとぞ。

『此、狐共等が、魚を食たがりて。』

と、心中に悪みながら、だんだん、河をのぼるに、魚とらるゝこと、おびたし。

「大ふごにみてなば、やめん。」

と、いひつゝ網うつに、【川主の家の方なり。】「やぶちゃん注：原割注。」河上にて、大かゞりをたく、影、見えたり。

兩人、みつけて、立どまり、

「もしや、この雨にもさはらず、川主の出やしつらん。」

と、あやぶむ、あやぶむ、

「今少しにて、ふごにも、みちなん。」

とて、魚をとりつゝ、くらき夜なれば、

『河中では、かゞり火には、てらされじ。』

と思ひしに「やぶちゃん注：ママ。」、かゞり火のもとより、人、獨、たいまつを照して、川におり來りたり。

「夜ともし」の躰なり。【夜ともし」とは、よる、川中へかゞりをふりて、魚をとるなり。

【やぶちゃん注：原割注。】

『すはや。』

と、心、さわぎしかど、

『あなたは一人、こなたは二人なれば、見とがめられても、いかゞしても、のがれん。』

と、心をしづめて、見ふたりしに、【河右衛門がいふ。】「やぶちゃん注：原割注。」

「あれは、人には、あらじ。持たる松の火の、上のみ、あがりて、下におつる物、なし。

化物のせうなり。」

と、見あらはしたり。

いま一人も、此ことに心づきて、よく見しに、實に、火のさまのあやしかりしかば、兩人、川中にたちて、おどろか得有しかば、一間ばかりまちかく來りて、立ち、立るしが、

『ばかしそこねし。』

とや思ひつらん、人形は、

「はた」

と消て、あかしばかり、中をとびて、岡へ、上りたり。

「まさしく狐の化したるを、近く見しこと、はじめてなり。」
と語り。

この見あらはせしは、梅津河右衛門と云ものなりし。

眞夜に、ひとり、川をつかひて、更に、ものにおどろかぬものなりし。

「やぶちゃん注：「川主」恐らくは現在のアユの漁業権や漁期規定と同じで、特定の流域・特定の時期は、川漁をする漁師が限定的に決められていたものであろう。

「徒ごと」「暇潰し」の意で「つれづれごと」とも読めなくもないが、ここは川主の目を盗んでという前振りから、かく読んでおいた。

「孫澤」[宮城県加美郡加美町（かみまち）孫沢か（グーグル・マップ・データ）](#)。田川という川の左岸であるが、すぐ下流で鳴瀬川に合流しており、この鳴瀬川ではアユが獲れることが確認出来たし、この孫沢には、北部分に大きな「孫沢溜池」（但し、これは小さな灌漑専用のダムで昭和一二（一九三七）年の竣工である）があり、附近には、ここからも含めて、南に下る小流れが、三本ほど、現認出来る。

「河つかひ」ちよつと聴いたことがないが、プライベートな川漁のことであろう。

に行しに、狐火のおほきこと、左右の川ふちを、のぼり、下り、いくそぼくてふ、数もしれざりしとぞ。

「魚とらるゝこと」やや使い方がおかしく感ずるが、「らる」は可能で、意外に多く獲ることが出来たというニュアンスであろう。

「ふご」「畚」。ここは釣った魚を入れる魚籠のこと。「大」とあるから、竹で編んだものかも知れない。

「川主の家の方なり」その川主の家の近くで、明確にその主人専用の漁場にまで侵入していたのである。

「夜ともし」鵜飼を考えれば、納得が行く。長良川上流の郡上市美並町や中流の美濃市で今も行われている「夜網漁」がある。夜の川に網を張っておいて、舟上の篝火の明るさと、權を使って舟縁や川面を叩く音で、鮎を網へ追い立てる、昔ながらの漁法である。また、海辺・河口附近での漁であるが、千葉の稲毛海岸の干潟での「夜灯し漁」が知られる。夜の干潟や刈田で、海老・蟹・鯊・鰈・泥鰌などを概ね新月の時に灯りをつけて獲る伝統漁法である。

「化物のせう」「せう」は「性」であろう。火の性質が通常の物理的な現象としてはあり得

ない様態であることから、魔性の妖火と見切った（最後の「見あらはせし」がそれ）のである。この河右衛門の言葉を魔性の「もの」は聴き、その「言上げ」によって自身の正体がバレた故に、退散せざるを得なかったのである。但し、言っておくと、標題や話の中の彼らが見た妖火を「狐火」と呼んでいる結果として、読者は誘導されているのであって、「人」ではないことがバレたのであって、その物の怪が果たして真に狐であったかどうかは、定かではないわけである。

「兩人、川中にたちて、おどろか得有しかば」ここは特異点の用法で、「驚かなった」のではない（最後の「ものにおどろかぬものなりし」は今の「驚く」と同じでよろしいのだが）。

この「おどろく」は「気がつく」の意。闇の中で、しかも安定の悪い川の中に立っていたために、距離感をちゃんと感ずることが出来ず、気づかないうちに、ごく近く（「一間」||一・八一メートル）まで人影が近づいてくるのに気づけなかったというのである。或いは、火と人影は実は別々にあったのかも知れない。大きな松明たいまつのような火を、見た瞬間に人間が手にもって掲げて持っている松明と誤認して刷り込んでしまったとすれば、別にごく近くまで来ていた人影ようのものに気づかないとしても、さらに不自然ではない。しかもそれは人ではなく化生けしやうの「あやかし」であったのだから、なおさらである。

「あかし」「灯あかし」。ここはその怪火。

「岡」川の岸の意味で「陸をか」ともとれるが、ここは川岸近くの有意に高さのある「岡」とった方が、怪奇のクライマックスとして効果的である。」

影の病

北勇治と云し人、外よりかへりて、我居間の戸をひらきてみれば、机におしかゝりて、人有。

『誰ならん、わが留守にしも、かく、たてこめて、なれがほに、ふるまふは。あやしきこと。』と、しばし見あたるに、髪ゆびの結やう、衣類・帯おびにゐたるまで、我、常に着しものにて、わがうしろ影を見しことはなけれど、

『寸分、たがはじ。』

と思はれたり。

餘り、ふしぎに思はるゝ故、

『おもてを、見ばや。』

と、

「つかつか」

と、あゆみよりしに、あなたをむきたるまゝにて、障子の細く明けたる所より、縁先あには、はしり出しが、おひかけて、障子をひらきみに、いづちか行けん、かたち、みえず成たり。

家内に、その由をかたりしかば、母は、物をもいはず、ひそめていなりしが、それより、勇治、病氣びやうまつきて、其年の内に、死たり。

是迄、三代、其身の姿を見てより、病つきて、死たり。

これや、いはゆる影の病なるべし。

祖父・父の、此病にて死せしこと、母や家來は、しるといへども、餘り忌みじきこと故、主あるじには、かたらず有し故、しらざりしなり。

勇治妻も、又、二才の男子をいだきて、後家と成たり。

只野家、遠き親類の娘なりし。【解、云、離魂病は、そのものに見えて、人には、見えず。

「本草綱目」の説、及、羅貫中かが書るものなどにあるも、みな、これなり。俗には、その人のかたちの、ふたりに見ゆるを、かたへの人の見る、と、いへり。そは、「搜神記」にせるせしが如し。ちかごろ、飯田町なる鳥屋の主の、姿のふたりに見えし、などいへれど、そは、まことの離魂病にはあらずかし。【やぶちゃん注・原頭注。】【只野大膳、千石を領す。

この作者の良人なり。解云。【やぶちゃん注・原頭注。】

【やぶちゃん注・最後の二つの注は底本に孰れも『頭註』と記す。孰れも馬琴（既に述べた通り、「解」（かい）はこの写本を成した馬琴の本名）のものしたもので、五月蠅くこそあれ、

要らぬお世話で、読みたくもない。しかし、書いてあるからには注はする。なお、本篇は実は「柴田宵曲 續妖異博物館 離魂病」の私の注で、一度、電子化している。しかし、今回は零から始めてある。

標題は「かげのやまひ」。恐らくは真葛の文章中、最も広く知られている一篇の一つではないかと思われる。かく言う私も実は真葛を知ったのはこの話からであるからである。教えて呉れたのは芥川龍之介である。龍之介が、大正元（一九一二）年前後を始まりとして、終生、蒐集と分類がなされたと推測される怪奇談集を集成したノート「椒圖志異」の中である（リンク先は私の二〇〇五年にサイトに公開した古い電子テキストである）。その「呪詛及奇病」の「3 影の病」がそれである。

*

3 影の病

北勇治と云ひし人外より歸り來て我居間の戸を開き見れば机におしかゝりし人有り 誰ならむとしばし見居たるに髪結び様衣類帯に至る迄我が常につけし物にて、我後姿を見し事なけれど寸分たがはじと思はれたり 面見ばやとつかつかとあゆみよりしに あなたをむきたるまゝにて障子の細くあき間より椽先に走り出でしが 追かけて障子をひらきし時は既に何地ゆきけむ見えず、家内にその由を語りしが母は物をも云はず眉をひそめてありしとぞ それより勇治病みて其年のうちに死せり 是迄三代其身の姿を見れば必ず主死せしとなん

奥州波奈志（唯野真葛女著 仙台の醫工藤氏の女也）

*

或いは、これがその「椒圖志異」の最後の記事のようにも見えるが、それは判らない。今回、この一篇を紹介するに際して、「芥川龍之介がドッペルゲンガーを見たことが自殺の原因だ」とするネット上の糞都市伝説（そんな単純なもんじゃないよ！ 彼の自死は！）を払拭すべく、ちよつと手間取ったが、

『芥川龍之介が自身のドッペルゲンガーを見たと言った原拠の座談会記録「芥川龍之介氏の座談」(葛巻義敏編「芥川龍之介未定稿集」版)』

をこの記事の前にブログにアップしておいた。そちらも是非、読みたい。

「影の病」「離魂病」「二重身」「復体」「離人症」(但し、精神医学用語としての「離人症」の場合は見当識喪失や漠然とした現実感喪失などの精神変調などまで広く含まれる)とも呼ぶが、近年はドイツ語由来の「ドッペルゲンガー」(Doppelgänger:「Doppel」(合成用語で名詞や形容詞を作り、英語の double と同語源。意味は「二重」「二倍」「写し」「コピー」の意) + 「gänger」(「歩く人・行く者」))の方が一般化した。これは狭義には自分自身の姿を自分で見る幻覚の一種で、「自己像幻視」とも呼ばれる現象を指す。それでも私は、この「影

の病い」が和語としては最も優れていると思う。但し、広義のそれらは、ある同じ人物が同時に全く別の場所（その場所が複数の場合も含む）に姿を現わす現象を指すこともあり、自分が見るのではなく、第三者（これも複数の場合を含む）が目撃するケースもかく呼ばれる。なお、私は、「離魂病」というと、個人的にはポジティブなハッピー・エンドの唐代伝奇である陳玄祐の「離魂記」を、まず、思い出す人種である。「離魂記」は、私の「[無門關](#)」[三](#)十五「[倩女離魂](#)」で、原文・訓読・現代語訳を行っているので、是非、読みたい。

さて、やや迂遠にあるが、[日本の民俗社会にとつての「影」から考察しよう](#)。平凡社「世界大百科事典」の斎藤正二氏の「影」の解説の「かげと日本人」によれば（ピリオド・コンマを、句読点或いは中黒に代え、書名の《》を「」に代えた）、『かげ』ということばは、日本人によって久しく二元論的な使いかたをされてきた。太陽や月の光線 light・ray も〈かげ〉であり、それが不透明体に遮られたときに生じる暗い部分 shadow・shade もまた〈かげ〉である。そればかりか、外光のもとに知覚される人物や物体の形姿 shape・figure も〈かげ〉であれば、水面や鏡にうつる映像 reflection も〈かげ〉であり、そのほか、なべて目には見えるが実体のない幻影 image・phantom も、『また』、『かげ』と呼ばれた。そして、これらから派生して、人間のおもかげ visage・looks や肖像 portrait を〈かげ〉と呼び、そのひとが他人に与える威光や恩恵や庇護のはたらきをも〈おかげ〉の名で呼ぶようになり、一方、暗闇 darkness や薄くらがり twilight や陰翳 nuance まで〈かげ〉の意味概念のなかに周延せしめるようになった。このように、まったく正反対の事象や意味内容が〈かげ〉の一語のもとに包括されたのでは、日本語を学ぼうとする外国人研究者たちは困惑を余儀なくされるに相違ない。『なぜ〈かげ〉の語がこのような両義性をもつようになったかという理由を明らかにすることはむずかしいが、古代日本人の宇宙観』、乃至、『世界観が〈天と地〉〈陽と陰〉〈明と暗〉〈顕と幽〉〈生と死〉などの〈二元論〉的で』、『かつ』、『相互に切り離しがたい〈対（つい）概念〉を基本にして構築されてあったところに、さしあたり、解明の糸口を見いだすほかないであろう。記紀神話には案外なほど』、『中国神話や中国古代思想からの影響因子が多く、冒頭の〈天地開闢神話〉からして「淮南子（えなんじ）」[倣真訓](#)・天文訓などを借用してつくりあげられたものであり、最小限、古代律令知識人官僚の思考方式のなかには』、『中国の陰陽五行説が』、『かなり十分に学習し享受されていたと判断して大過ない。しかし、そのように知識階級が懸命になって摂取した先進文明国の〈二元論〉哲学とは別に、いうならば日本列島住民固有の〈民族宗教〉レベルでの素朴な実在論思考のなかでも、日があらわれれば日光（ひかげ）となり、日がかくれれば日影（ひかげ）となる、という二分類の方式は伝承されていたと判断される。語源的にも、light のほうのカゲは〈日光（カゲ）ノ義〉（大槻文彦「[言海](#)」）[なつれ](#)、shade や darkness を意味するヒカゲは「祝

詞(のりと)に『日隠処とみゆかくるゝを略(ハブ)き約(ツ)ゞめてかけると云(イフ)なり』(谷川土清「和訓栞(わくんのしおり)」)とされている。語源説明にはつねに多少とも、『こじつけの伴うのは避けがたいが、原始民族が天文・自然に対して畏怖の念を抱き、そこから出発して自分たちなりの世界認識や人生解釈をおこなっていたことを考えれば、〈かげ〉の原義が〈日気〉〈日隠〉の両様に用いられていたと聞いても驚くには当たらない。むしろ、これによって古代日本民衆の二元論的思考の断片を透視しうるくらいである。』

『〈かげ〉は、古代日本民衆にとって、太陽そのものであり、目に見える実在世界であり、豊かな生命力であった。しかも一方、〈かげ〉は、永遠の暗黒であり、目に見えない心霊世界であり、ものみなを冷たいところへ引き込む死であった。権力を駆使し、物質欲に燃える支配者は〈かげの強い人〉であり、一方、存在価値を無視され今にも死にそうな民衆は〈かげの薄い人〉であり、さらに冷たい幽闇世界へ旅立っていった人間はひとしなみに〈かげの人〉であった。当然、ひとりの個人についても、鮮烈で具体的な部分は〈かげ〉と呼ばれる一方、隠戴されて知られざる部分もまた〈かげ〉と呼ばれる。とりわけ、肉体から遊離してさまざま霊魂は、〈かげ〉そのものであった。そのような遊離魂を〈かげ〉と呼んだ用法は「日本書紀」「万葉集」に幾つも見当たる。近世になってから「一夜船」「奥州波奈志」(……)『曾呂利話』などの民間説話集に記載されている幾つかの〈影の病〉は、当時でも、離魂病の別称で呼ばれる奇疾とされたが、奇病扱いはしたのは、それはおそらく近世社会全体が合理的思维に目覚めたというだけのこと、古代・中世をとおして〈離魂説話〉や〈分身説話〉はごくふつうにおこなわれていた(ただし、こちらのほうには唐代伝奇小説からの影響因子が濃厚にうかがわれるが)のであり、現在でさえ、〈影膳〉の遺風のなかにその痕跡が残存されている。』『ついでに、〈影膳〉について補足すると、旅行、就役、従軍などにより不在となっている家人のために、留守の人たちが一家だんらんして食事するさい、その不在の人のぶんの膳部をととのえる習俗をいい、日本民俗学では〈陰膳〉と表記する。民俗学の解釈では、不在家族も同じものを食べることにより、『連帯意識を持続しようという念願が込められている点を重視しており、それも誤っていないと思われるが、〈かげ〉のもともとの用法ということになれば、やはり霊魂、遊離魂のほうを重視すべきであろう。もつとも、〈かげ〉をずばり死霊・怨霊の意に用いている例も多く、関東地方の民間説話〈影取の池〉などは、ある女が子どもを殺されて投身自殺した池のそばを、なにも知らずに通行する人の影が水に映るやいなや、池の主にとられて死ぬので、とうとう、『その女を神にまつたという。同じ〈かげ〉でも、〈影法師〉となると、からっとして明るく、もはや霊魂世界とすら関係を持たない。この場合の〈かげ〉は、たとえば「市井雑談集」に、見越入道の出現と思つて肝をつぶした著者にむかい、道心坊が〈此の所は昼過ぎ日の映ずる時、暫しの間向ひを通る

人を見れば先刻の如く大に見ゆる事あり是れは影法師也、初めて見たる者は驚く也と語る」と説明したと記載されておるとおり、むしろ、ユーモラスな物理学現象としてとらえられる。〈影絵〉もまたユーモラスな遊びである。古代・中世・近世へと時代を追うにしたがい、日本人は〈かけ〉を合理的に受け取るように変化していった」とある。

さてそこを押さえた上で、[ウイキの「ドッペルゲンガー」](#)を見よう。『ドッペルゲンガー現象は、古くから神話・伝説・迷信などで語られ、肉体から霊魂が分離・実体化したものとされた』。『この二重身の出現は、その人物の「死の前兆」と信じられた』（注釈に『死期が近い人物がドッペルゲンガーを見ることが多いために、「ドッペルゲンガーを見ると死期が近い」という伝承が生まれたとも考えられる』とする)。十八世紀末から二十世紀に『かけて流行したゴシック小説作家たちにとって、死や災難の前兆であるドッペルゲンガーは魅力的な題材であり、自己の罪悪感の投影として描かれることもあった』。『ドッペルゲンガーの特徴として』は、『ドッペルゲンガー』である方の『人物は周囲の人間と会話をしない』。『本人に関係のある場所に出現する』・『ドアの開け閉めが出来る』・『忽然と消える』・『ドッペルゲンガーを本人が見ると死ぬ』『等があげられる』。『同じ人物が同時に複数の場所に姿を現す現象、という意味の用語ではバイロケーション』(Bilocation：超常現象用語。同一人が同時に複数の場所で目撃される現象、或いは、その現象を自ら発現させる能力の呼称)『と重なるところがあるが、バイロケーションのほうは自分の意思でそれを行う能力、というニュアンスが強い』。『つまりドッペルゲンガーの場合には、『本人の意思とは無関係におきている、というニュアンスを含んでいる』ことが圧倒的多数である。『アメリカ合衆国第』十六『代大統領エイブラハム・リンカーン、帝政ロシアのエカテリーナ』II『世、日本の芥川龍之介などの著名人が、自身のドッペルゲンガーを見たという記録も残されている』。十九『世紀のフランス人のエミリー・サジェ』(Emilie Sagee：女性で教師であった)『はドッペルゲンガーの実例として有名で』、『同時に』四十『人以上もの人々によって』彼女の『ドッペルゲンガーが目撃されたといわれる』。『同様に、本人が本人の分身に遭遇した例ではないが、古代の哲学者ピタゴラスは、ある時の同じ日の同じ時刻にイタリア半島のメタポンティオンとクロトンの両所で大勢の人々に目撃されたという』。『医学においては、自分の姿を見る現象(症状)は』「autoscopia」(オトスコピー)：「auto-」+「-scopy」：自動鏡像視認)、『日本語で「自己像幻視」と呼ばれる。自己像幻視は純粹に視覚のみに現れる現象であり、たいていは短時間で消える』。『現れる自己像は自分の姿勢や動きを真似する鏡像であり、独自のアイデンティティや意図は持たない。しかし、まれな例としてホートスコピー(heautoscopy)』(この単語は心霊学用語で「幽体離脱」を示す語として有名)『と呼ばれる自身を真似ない自己像が見えたり、アイデンティティをもった自己像と相互交流する症例も報告されてい

る。ホートスコピーとの交流は、『友好的なものより』、『敵対的なことのほうが多い』(これは解離性同一性障害(旧多重人格障害)によく見られる)。「例えばスイス・チューリッヒ大学のピーター・ブルツガー博士などの研究によると、脳の側頭葉と頭頂葉の境界領域(側頭頭頂接合部)に脳腫瘍ができた患者が自己像幻視を見るケースが多いという。この脳の領域は、ボディー』『イメージを司ると考えられており、機能が損なわれると、自己の肉体の認識上の感覚を失い、あたかも肉体とは別の「もう一人の自分」が存在するかのよう錯覚することがあると言われている。また、自己像幻視の症例のうちのかなりの数が統合失調症と関係している可能性があり』、『患者は暗示に反応して自己像幻視を経験することがある』。『しかし、上述の仮説や解釈で説明のつくものと』、『つかないものがある。』「第三者によって目撃されるドッペルゲンガー」(たとえば数十名によって繰り返し目撃されたエミリー・サジェなどの事例)は、上述の脳の機能障害では説明できないケースである』。以下、「作品中のドッペルゲンガー」では、ハインリヒ・ハイネ(Christian Johann Heinrich Heine 一七九七年〜一八五六年)の詩篇、ドイツの多才な作家エルンスト・テオドル・アマデウス・ホフマン(Ernst Theodor Amadeus Hoffmann)の「大晦日の夜の冒険」(一八一五年)、イギリスの作家アルフレッド・ノイズ(Alfred Noise)の「深夜特急」、エドガー・アラン・ポーの「ウイリアム・ウイルソン」(一八三九年)、イングランドのラファエル前派の画家で詩や小説も書いたダンテ・ゲイブリエル・ロセッティの水彩画「How They Met Themselves」(彼らはどのようにして彼らに相逢ったか。一八六〇年〜一八六四年作)、短編「手と魂」(Hand and Soul: 一八五〇年)、オスカー・ワイルドの「ドリアン・グレイの肖像」(一八九〇年)、ドイツの幻想作家ハンス・ハインツ・エーヴェルス(Hanns Heinz Ewers)の「プラーグの大学生」(一九一三年)、ドストエフスキーの「分身」(一八四六年)、ジグムント・フロイトが書いた病跡学的考証と独自の夢解釈理論の傑作であるドイツ人作家ヴィルヘルム・イエンセン(Wilhelm Jensen)作の「グラディーヴァ」(Gradiva: 一九〇三年・特異的に、自分ではなくて他者のドッペルゲンガー幻想を抱く青年の物語である)を取り上げて分析した「W・イエンセンの小説『グラディーヴァ』に見られる妄想と夢」(Der Wahn und die Träume in W. Jensens „Gradiva“: 一九〇七年)、パリ生まれのアメリカ人作家ジュリアン・グリーン(Julien Green)の「地上の旅人」(一九二七年)、既に本ブログ記事の前で示した芥川龍之介の「二つの手紙」(大正六(一九一七)年)、ドイツの作家ハンス・ヘニー・ヤーン(Hans Henry Jahn 一八九四年〜一九五八年)の「鉛の夜」(一九五六年)、梶井基次郎の「泥濘」(大正一四(一九二五)年。リンク先は「青空文庫」。但し、新字新仮名)及びそれを発展させた「天の昇天」(大正一五(一九二六)年。リンク先は私の古い電子テキスト)をドッペルゲンガーを扱った作品として挙げている。さてもこれらを見ながら、私が驚いたのは、私自身が極めて

ドッペルゲンガー物の偏愛者であることに、今更乍ら、判ったからである。実にここに出て
いる作品は殆んど総てを読んでからなのである。フロイトのそれなどは、彼の芸術論の
中ではピカーに面白いものである。因みに、このウィキ、下方に『上段の項目「歴史と事例」
の北勇治のドッペルゲンガーの話は杉浦日向子の漫画作品『百物語』上巻の「其ノ十六・影
を見た男の話」でとりあげられている』とあるのだが（因みにこの日向子さんの漫画も持つ
ている）、上段の「歴史と事例」に「北勇治」の話なんか出てないぜ？ この記事を書いた
人物は、この「奥州ばなし」の本篇を「歴史と事例」に記したつもりで、うっかりしている
だけらしい。情けない。上記の作品記載がまめによく拾っているのに、残念な瑕疵だね。以
下、モノローグ。——私はウィキペディアの記者だが、直さないよ。先年、ある出来事で、
甚だ不快を覚えて以来、誤字・誤表現や、致命的な誤り以外には手を加えないことにしてい
るからね。誰か僕のこの記事を見たら、直しといてやんな。ウィキペディアは自己の制作物
はリンク出来ないからね。アホ臭——

「北勇治」不詳。

「あなたをむきたるまゝにて、障子の細く明けたる所より、縁先に、はしり出しが、おひか
けて、障子をひらきみしに、いづちか行けん、かたち、みえず成たり」ここが本話のキモの
部分である。この隙間はごくごく細くなくてはいけない！ 北勇治のドッペルゲンガーは
後ろ姿のまま、紙のように薄くなつて（！）この隙間を……しゅうつつ……と抜けて行って
しまったのである……

「是迄、三代、其身の姿を見てより、病つきて、死たり」この事実は、ごくごく主人には内
密にされていた以上、現実の可能性を考えるならば、心因性ではなく、何らかの遺伝的な脳
障害（最後には絶命に至る重篤なそれである）の家系であったことが一つ疑われるとは言え
るようには思う。

「忌みじき」違和感がない。真葛！ 最高！

「勇治妻も、又、二才の男子をいだきて、後家と成たり」真葛の女らしい配慮を見よ。

「只野家、遠き親類の娘なりし」この未亡人が只野（真葛）綾（子）の夫の只野家の、遠い
親類の娘であったというのである。その未亡人からの直接の聴き取りであろう。嘘臭さがこ
こでダメ押しで払拭されるのである。短いが、優れた怪奇譚として仕上がっている。

「本草綱目」これは探し出すのに往生した！ まず、巻十一の「草之一」の「人參」の「根」
の「附方」の中にある以下に違いない！

*

離魂異疾【有人臥則覺身外有身、一様無別、但不語。蓋人臥則魂歸於肝、此由肝虛邪襲、魂不
歸舍、病名曰離魂。】「やぶちゃん注…下略。」

（離魂異疾【人、有り、臥すときは、則ち、身の外に、身、有ることを覺ゆ。一様にて、別ちわか無し。但、語らず。蓋し、人、臥すときは、則ち、魂、肝に歸す。此れ、肝虚に由りて、邪襲ひて、魂、舍に歸らず。病、名づけて、「離魂」と曰ふ。】）

*

「羅貫中が書るものなどにある」羅貫中（生没年未詳）は元末・明初の小説家。太原（山西省）の人。号は湖海散人。知られたものでは「三国志演義」「隋唐演義」「平妖伝」などがあり、「水滸伝」も編者或いは作者の一人であるともされる。私は一作も読んだことがないの
で判らない。馬琴は彼の作品群を偏愛しており、特に「平妖伝」には深く傾倒し、二十回本
を元に「三遂平妖伝国字評」を記しているが、それなら、それと書くであろう。判らぬ。識
者の御教授を乞う。

『それは、「搜神記」にしるせしが如し』先の「柴田宵曲 續妖異博物館 離魂病」の本文頭に出る「搜神後記」（六朝時代の名詩人陶淵明撰とされるが、後代の偽作である）の誤りのように私には思われる。そちらを読みたい。注で原文も示しておいた。

「ちかごろ、飯田町なる鳥屋の主の、姿のふたりに見えし、などいへれど、それは、まことの離魂病にはあらずかし」これは何かの皮肉を掛けているようだが、よく判らぬ。識者の御教授を乞うものである。

「只野大膳」ウイキの「只野真葛」によれば、寛政九（一七九七）年三五歳の綾子は『仙台藩の上級家臣で当時江戸番頭の』只野行義（？）文化九（一八一二）年…通称は只野伊賀」と『再婚することとなった。只野家は、伊達家中において「着坐」と呼ばれる家柄で、陸奥国加美郡中新田に』千二百『石の知行地をもつ大身であった。夫となる只野行義は、斉村』（なりむら）『の世子松千代の守り役をいったん仰せつかったが』、寛政八（一七九六）年八月の『斉村の天逝により守り役を免じられ、同じ月に、妻を失っていた。行義は、神道家・蔵書家で多賀城碑の考証でも知られる塩竈神社の神官藤塚式部や漢詩や書画をよくする仙台城下瑞鳳寺の僧古梁紹岷』（こりようしようみん）『（南山禅師）など』、『仙台藩の知識人とも交流のあった読書人であり、父平助とも親しかった』。『かねてより』、『平助は、源四郎元輔』（次男。長庵元保がいるが、このウイキには彼の名を出すものの、その後の事蹟が記されていない。底本の鈴木氏の解説によれば、この長男は実は早逝しているのである）『の後ろ盾として』、『娘のうちのいづれかが仙台藩の大身の家に嫁することを希望しており、この頃より平助も体調が思わしくなくなったため、あや子は工藤家のため只野行義との結婚を承諾した。彼女は行義に』、

掻き起こす人しなければ埋み火の

身はいたづらに消えんとすらん

『という和歌を贈り、暗に行義側からの承諾をうながしている』。『行義は、幼い松千代が』九『代藩主伊達周宗となったため、その守り役を解かれ、江戸定詰を免じられて』おり、一旦、『江戸に招き寄せた家族も急遽』、『仙台に帰している。したがって行義との結婚は』、『あや子の仙台行きを意味していた』とある。

なお、ここに至って、実は国立国会図書館デジタルコレクションに正字正仮名版の本作「奥州ばなし」が、二つ、あるのを発見した。一つは、

「麗女小説集 徳川時代女流文學集 下」のここから（標題は「奥州波奈志」で作者名は「只野綾女」と本名で出す）

で編著者は荒木田麗女で、与謝野晶子の纂訂、富山房大正四（一九一五）年刊である。荒木田麗女（享保一七（一七三二）年〜文化三（一八〇六）年…或いは単に「麗」とも）は江戸中期の女流文学者で、実父は伊勢神宮内宮の神職荒木田武遠^{たけとお}。十三歳で叔父の外宮御師（おんし）であった荒木田武遇^{たけとも}の養女となった。詳しくはウイキの「荒木田麗女」を参照されたい。しかし、何故、彼女の小説集の最後に、真葛の本作一つだけが載っているのか、実は――判らない。晶子の解題には何も書かれていないからなのである。これは異様な感じがする。まさに怪奇談である。今一つは、

「女流文學全集 第三卷」のここから

で編者は古谷知新^{ふるやちよし}で、文芸書院大正八（一九一九）年刊である。孰れも総ルビに近いのであるが（後者は割注が本場に割注になっていい、それにはルビがない）、総ルビというのが、寧ろ、気に入らない。孰れも親本が明記されていないからである。この何とも怪しい編集になる晶子の、或いは古谷氏の読みが、押し付けられる可能性が高いと言える（私の《》の読みも私の推定に過ぎぬのだが）。しかも、後者の読みが前者を元にしていて可能性も排除は出来ない。とすれば、この読みを信奉するわけにはゆかないのである。本篇は後、六篇を残すのみである。私は以上のそれを参考には一切しないことに決めた。私の自己責任でゆく。

にしても、私は、これを以って、稀有の才媛只野真葛と、稀有の芸術家ソロモン芥川龍之介と、そうして、最後に真に龍之介が愛した、やはり、稀有の才媛片山廣子の三人をコラボレーションすることが出来たと感じている。……真葛の死から百九十六年……龍之介の死から十四年……廣子の死から六十四年……三人の笑みが私には見える……」

高尾がこと

むかしの國主、高尾といふ遊女を、こがねにかへて、廓を出し給ひて、御館までも、めしいれらず「やぶちゃん注」：「らず」の右に編者ママ注記。川にて、切はふらせ給と、世の人、思へるは、あらぬことなり。

是は、うた・上瑠璃「やぶちゃん注」：漢字表記ママ。」に、おもしろく、ことそへて作りなせしが、やがて誠のごとく成しものなり。

高尾は、やはり御たちにめしつかはれて、のち老女と成て、老後、跡をたてくたされしは、番士杉原重大夫、又、新大夫と、代々、かはるがはる名のりて、【祿、玄米六百石。】今、目付役をつとむる重大夫、則、その末なり。只野家近親なる故、ことのよしは、しれり。杉原家にて、『世人、あらぬことをまことしやかに唱ふるは、をかし』と思ふべけれど、『我こそ高尾が末なり』と名のらんも、おもだしからねば「やぶちゃん注」：名誉なことではないので。』、おしだまりて聞ながしをることなりき。

又、「白石の女あだ打」とて、「宮城野しのぶ」などいふも、またく、なきことなり。

此兩説は、作りもの、世にひろがりしなり。【解云、只野氏は、則、このさうしの作者、眞葛の良人なり。その實録たること、うたがひなきものか。高尾の墓、仙臺に在り。「兎園小説」に載せたりき。併見るべし。】【解云、「白石の仇討」は、享保の比、その風聞ありしを、「月堂見聞集」に載て、『虚實詳ならず』といへり。縦その事ありとても、慶安以前の事ならず。享保中の風聞なり。世に傳ふる俗書の妄誕、かゝること多かり。】「やぶちゃん注」：この二つは、頭注。」

「やぶちゃん注」：さても、ここで眞葛は高尾が身請けされて、仙台に迎えられ、後代も出来、綱宗から杉原の姓を受けて、今もある杉原家は、その高尾の嫡孫であるのが真実だという、ちよつと驚くべきことを言っているのである。ところが、これに早くに冷徹な批判の目を向けた大家がいる。一人が「大言海」で知られる大槻文彦であり、今一人が森鷗外である。鷗外は大五（一九一六）年一月一日から同八日まで全六回で『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』に「梶原品（すぎのはらしな）」という考証物をものしており（リンク先は「青空文庫」。新字旧仮名）、そこで先行して批判した大槻の評を撈めながら、記している（但し、鷗外は眞葛（只野綾子）のことを『文字』と記している）。「一」と「二」の途中まで引用する（漢字は恣意的に概ね正字化し、読みは一部に留めた。「青空文庫」版には一部に不審があったので、所持する岩波書店「鷗外選集」で訂した）。

*

私が大禮に参列するために京都へ立たうとしてゐる時であつた。私の加盟してゐる某社の雑誌が來たので、忙しい中にざつと目を通した。すると仙臺に高尾の後裔があると云ふ話が出てゐるのを見た。これは傳説の誤であつて、しかもそれが誤だと云ふことは、大槻文彦さんがあらゆる方面から遺憾なく立證してゐる。どうして今になつてこんな誤が事新しく書かれただらうと云ふことを思つて見ると、そこには大いに考へて見て好い道理が存じてゐるのである。

誰でも著述に従事してゐるものは思ふことであるが、著述がどれ丈だけ人に讀まれるかは問題である。著述が世に公にせられると、そこには人がそれを讀み得ると云ふポツンビリテエが生ずる。しかし實にそれを讀む人は少數である。一般の人に讀者が少いばかりではない。讀書家と稱して好い人だつて、其讀書力には際限がある。澤山出る書籍を悉く讀むわけには行かない。そこで某雑誌に書いたやうな、歴史に興味を有する人でも、切角の大槻さんの發表に心附かずにゐることになるのである。

某雑誌の記事は奥州話と云ふ書に本づいてゐる。あの書は仙臺の工藤平助と云ふ人の女で、只野伊賀と云ふ人の妻になつた文字と云ふものゝ著述で、文字は瀧澤馬琴に識られてゐたので、多少名高くなつてゐる。しかし奥州話は大槻さんも知つてゐて、辨妄の筆を把つてゐるのである。

文字の説によれば、伊達綱宗は新吉原の娼妓高尾を身受して、仙臺に連れて歸つた。高尾は仙臺で老いて亡くなつた。墓は荒町の佛眼寺にある、其子孫が相原氏だと云ふことになつてゐる。

これは大に錯つてゐる。伊達綱宗は万治元年に歿した父忠宗の跡を繼いだ。踰えて三年二月朔に小石川の堀浚を幕府から命ぜられ、三月に仙臺から江戸へ出て、工事を起した。

筋違橋即ち今の万世橋から牛込土橋までの間の工事である。これがために綱宗は吉祥寺の裏門内に設けられた小屋場へ、監視をしに出向いた。吉祥寺は今駒込にある寺で、當時まだ水道橋の北のたもと、東側にあつたのである。この往來の間に、綱宗は吉原へ通ひはじめた。これは當時の諸侯としては類のない事ではなかつたが、それが誇大に言ひ做され、意外に早く幕府に聞えたには、綱宗を陥れようとしてゐた人達の手傳があつたものと見える。綱宗は不行迹の廉を以て、七月十三日にに逼塞を命ぜられて、芝濱の屋敷から品川に遷つた。芝濱の屋敷は今の新橋停車場の眞中程であつたさうである。次いで八月二十五日に、嫡子龜千代が家督した。此時綱宗は二十歳、龜千代は僅かに二歳であつた。堀浚は矢張伊達家で繼續することになつたので、翌年工事を竣つた。そこで綱宗の吉原へ通つた時、何屋の誰の許もとへ通つたかと云ふと、それは京町の山本屋と云ふ家の薰と云ふ女であつたらしい。それ

が決して三浦屋の高尾でなかつたと云ふ反證には、當時万治二年三月から七月までの間には、三浦屋に高尾と云ふ女がゐなかつたと云ふ事實がある。綱宗の通ふべき高尾と云ふ女がゐない上は、それを身受しやうがない。其上、綱宗は品川の屋敷に蟄居して以來、仙臺へは往かずに、天和三年に四十四歳で剃髪して嘉心かしんと號し、正徳元年六月六日に七十二歳で歿した。綱宗に身受せられた女があつた所で、それが仙臺へ連れて行かれる筈がない。

文字は綱宗が高尾を身受して舟に載せて出て、三股みつまたで斬つたと云ふ俗説を反駁する積で、高尾が仙臺へ連れて行かれて、子孫を彼地に残したと書いたのだが、それは誤を以て誤に代へたのである。「やぶちゃん注…ここまでが「一」。以下、標題「二」を外して行空けで続ける。」

然らば奥州話にある佛眼寺の墓むらの主は何人かと云ふに、これは綱宗の妾品せよしなと云ふ女で、初から相原氏であつたから、子孫も相原氏を稱したのである。品は吉原にゐた女でもなければ、高尾でもない。

品は一體どんな女であつたか。私は品川に於ける綱宗を主人公にして一つの物語を書かうと思つて、餘程久しい間、其結構を工夫してゐた。綱宗は凡庸人ではない。和歌を善くし、筆札ひつぱつを善くし、繪畫を善くした。十九歳で家督をして、六十二萬石の大名たること僅わづかに二年。二十一歳の時、叔父伊達兵部少輔せうぼう宗勝を中心としたイントリイグ「やぶちゃん注…Intrigue。陰謀。」に陥いつて蟄居の身となつた。それから四十四歳で落飾するまで、一子龜千代の綱村にだに面會することが出来なかつた。龜千代は寛文九年に十一歳で總次郎綱基となり、踰えて十一年、兵部宗勝の嫡子東市正宗興いづちのかみの表面上の外舅ぐわいけいとなり、宗勝を鼻肩した酒井雅樂頭忠清うたのかみが邸やしきでの原田甲斐の刃傷事件があつて、將に失はんとした本領を安堵し、延寶五年に十九歳で綱村と名告なつたのである。暗中の仇敵たる宗勝は、父子の對面に先だつこと四年、延寶七年に亡くなつてゐた。綱宗はこれより前も、これから後老年に至るまでも、幽閉の身の上であつて、その銷遣せうけん「やぶちゃん注…憂さ晴らし。」のすさびに残した書畫には、往々知過ちくわひつかい必改と云ふ印を用ゐた。綱宗の藝能は書畫や和歌ばかりではない。蒔繪を造り、陶器を作り、又刀劍をも鍛へた。私は此人が政治の上に發揮することの出来なかつた精力を、藝術の方面に傾注したのを面白く思ふ。面白いのはこゝに止まらない。綱宗は籠居のために意氣を挫かれずにゐた。品川の屋敷の障子に、當時まだ珍しかつた硝子板四百餘枚を嵌めさせたが、その大きいのは一枚七十兩で買つたと云ふことである。その豪邁の氣象が想ひ遣られるではないか。かう云ふ人物の綱宗に仕へて、其晩年に至るまで愛せられてゐた品と云ふ女も、恐らくは尋常の女ではなかつたらう。「やぶちゃん注…以下略。」

*

なお、村上祐紀氏の論文「〈立證〉と〈創造力〉——森鷗外「樞原品」論」筑波大学国語国文学会発行『日本語と日本文学』（二〇〇七年二月・[こちらでPDFでダウンロード・ロード可能](#)）も非常に参考になるので、読まれたい。ただ、これらを読んで思うのは、結局、高尾だけでなく、それを記した真葛という女性作家も、さらに冒頭、今になって古臭い嘘話を雑誌に書いている阿呆扱いの記者（これも宮城野萩子というペンネームから恐らく女性であろうか（或いはあまりにクサイペン・ネームであるのは男性の仮託かもという気はせぬでもない）。記事は「實説伊達騒動」（『家庭雑誌』大正四（一九一五）年十月発行）である。しかし、村上氏の論文で判る通り、真葛の高尾杉原説など、そこには実は、書かれていないのである。則ち、鷗外はこの女性記者をも冤罪の犠牲にして、自己の歴史検証法を闡明しているというのであるから、私は開いた口が塞がらぬのである）までも巻き込んで、三人が三人とも、単なる狂言役者の役割しか与えられず、「誤を以て誤に代へた」と鷗外から一蹴され、彼女たちそれぞれの正當な評価も微塵もされることなく、「嘘つきの変な女」として苦界へ退場させられてしまっているのが、いわくいいがたい、何とも言えぬ鷗外の女性差別の視線に対する怒りを私は激しく抱かざるを得ないのである。因みに、本文の「杉原」を「すぎのはら」と読んだのは、鷗外のそれに拠ったものである。

「高尾」高尾太夫。吉原の太夫の筆頭ともされる源氏名で、三浦屋に伝わった大名跡。吉原で最も有名な遊女で、その名にふさわしい女性が現れると、代々襲名された名で、「吉野太夫」と「夕霧太夫」とともに三名妓（寛永三名妓）と呼ばれる。ここで語られるのは、その中でも最も知られた二代目高尾太夫。[ウイキの「高尾太夫」](#)によれば、「万治高尾」「仙台高尾」「道哲高尾」とも呼ばれる。十一代あった中で『最も有名で多くの挿話があるが、その真偽は不明である』。「伊達騒動」絡みで、第三代『陸奥仙台藩主・伊達綱宗』（寛永一七（一六四〇）年～正徳元（一七一）年）『の意に従わなかったために、三叉』（みつまた）現在の日本橋中洲）『の船中で惨殺されたというのはその一つである』とし、万治三（一六六〇）年に没し、『墓所は東京都豊島区巢鴨の西方寺（元は新吉原近くの浅草日本堤にあったが、昭和初期に移転）したとある。[ウイキの「伊達綱宗」](#)にも、『綱宗が酒色に溺れ、僅か』二『歳の長男・綱村が藩主となったことは、後の伊達騒動のきっかけになった。しかし、伊達騒動を題材にした読本や芝居に見られる、吉原三浦屋の高尾太夫の身請けや』、『つるし斬りなどは俗説とされる』とある。

「うた」[ウイキの「高尾太夫」の画像](#)に明治一八（一九八五）年の刷りの月岡芳年の「月百姿」の一枚の彼女の浮世絵があるが、そこに記されている、

君は今駒かたあたりほととぎす

という題代わりに用いられた句は、キャプションに、『隅田川を渡って帰る伊達綱宗へ詠ん

だものである』とある。

「上瑠璃」浄瑠璃「伽羅先代萩」が最も知られる。

「杉原重大夫、又、新大夫と、代々、かはるがはる名のりて、【祿、玄米六百石。】今、目付役をつとむる重大夫、則、その末なり。只野家近親なる故、ことのよしは、しれり。杉原家にも、『世人、あらぬことをまことしやかに唱ふるは、をかし』と思ふべけれど、『我こそ高尾が末なり』と名のらんも、おもだしからねば、おしだまりて聞ながしをることなりき」
鷗外が「杉原品」の後半で考察する通り、この杉原氏が、遠く播磨赤松家の一族であった相原伊賀守賢盛という由緒を持ち、その末裔の品が綱宗に近侍し、彼の子孫を伝えたとなら、まさに軍医森鷗外に言わせるなら、こう平然と書く真葛は——妄想傾向の強い性質の悪い精神病——ということになるんだろうなあ。当の相原家も大迷惑だわな。しかも、只野家の近親だぜ？ 私には、よく判らないねえ、幾ら御大鷗外先生でも、「杉原品」の中で、先に言ったような、嘘を書いて論展開してる日にゃ、まことしやかであつても、信ずる気には、なんねえ。だいたいからして、その三女性蔑視を差し置いておいて、最後に、「綱宗入道嘉心は此後二十五年の久しい年月を、品と二人で暮したと云つても大過なからう。これは別に證據はないが、私は豪邁の氣象を以て不幸の境遇に耐へてゐた嘉心を慰めた品を、畜誠實であつたのみでなく、氣骨のある女丈夫であつたやうに想像することを禁じ得ない」としっぽりゆくなんざ、三文芝居のお笑いでげしよう?! 証拠がなくても——それが文学史の授業で言うた「歴史離れ」というやつで御座んすね？ 鷗外センセー？ だつたら、そんなセコイことせんと、高尾も真葛も、ドーンと法要、基！ 抱擁しておやんなせえよ?! あんたのせいで脚氣衝心で死んじまった無数の帝国陸軍兵士の供養の代わりに、よ！ 都合よく失神してエリス発狂の責任を巧妙にゴマかした太田豊太郎、いやさ、森林太郎さんよ!!!

「白石の女あだ打」「宮城野しのぶ」「ニコニコ大百科」の「宮城野・信夫の仇討」によれば、

『史実を元にした江戸時代の仇討伝の総称で』、『浄瑠璃、歌舞伎を始めとして神楽、狂言、浮世絵、貸本と媒体を選ばず、民衆の間で大流行を巻き起こし』、『その物語は孝女の範として日本全国へ広まり、北は青森の津軽じょんがら節から、南は沖縄の組踊「姉妹敵討（しまいていうち）」まで伝播の過程で様々な芸能に変化している』として、非常に丁寧なシノプシスが記されているので読みたい。姉妹の百姓の父を切り捨てにされた仇討で、リンク先のもものでは、奥州白石の逆戸村に住む百姓与太郎とその娘満千・園の二人姉妹となっている。そうして、その修練のシークエンスには、かの由比正雪が登場する。さて、「史実部分の概要」によれば、『仇討の仔細が世に発せられた最古の証しは、本島知辰（もとしまちしん／とまたつ）が著した「月堂見聞集」巻之十五』（後注する）に、享保八（一七二三）年四月のクレジットで、『仙台より写し来たる敵討の事と題し』、『おおよそ以下のように書き記し

て』あるとする。享保三（一七一八）年のこと、『松平陸奥守様（伊達吉村）の御家老・片倉小十郎殿（片倉村定）が知行の内』の、『足立村に四郎左衛門という百姓がいた』が、『小十郎殿の剣術師範に田辺志摩という』一千『石取りの侍がおり、領地検分の供回りをしていたところ、四郎衛門が前を横切ったとして無礼討ちにした』。『この時残された娘二人は姉』十一『歳、妹』八『歳であり、領内を退居して陸奥守様の剣術師範である瀧本伝八郎へ奉公することになった』。『姉妹は』六『年もの間』、『密かに剣術の稽古を盗み見て覚え、修練を積んだ』。『ある時、下女の女部屋から木刀を振る音が聞こえ、不審に思った伝八郎が戸を開けると』、『姉妹が稽古をしている姿を目撃した』。『わけを聞くと』、『姉妹は仇討を志していると言ひ、感心した伝八郎は正式に稽古をつけて秘伝の技を教え込んだ』。『寸志を遂げさせようと』、『事の次第を陸奥守様へ伝えたところ、白鳥大明神の宮の前へ矢来を組んで』、享保八年三月に『勝負することを仰せ付けられた』。『仙台御家中衆が警固検分を務める中、姉妹は数刻に渡って打ち合い、二人が替る替る戦って程なく』、『志摩を袈裟切りに斬り付けた。最後は姉が走り寄って止めをさした』。『陸奥守様は御機嫌斜めならず、姉妹を家中の者へ養女に迎えるよう申し付けたところ、二人は共に辞退した』。『その上』、『仇とは言え』、『人殺しの罪は逃れられず、願わくば如何ようとも御仕置きを仰せ付けられ下されませう』と申し上げたので、なお以って皆は感心した』。『そこへ伝八郎がやってきて姉妹に向かい、わたしも一時とは言え』、『二人の主人であり、また剣術指南を恩と思うならば』、『この意は受けなくてはなりません』、『と心細やかに諭されたので、姉妹は翻意して』、『お殿様の御意向に従った』。『姉は当年』十六『歳で御家老』三『万石の伊達安房殿（伊達村成）へ、妹は同』十三『歳で大小路権九郎殿へ引き取られた』。『権九郎殿は陸奥守様より妹が負った手傷の養生を仰せ付けられた』。『ただし』、『結びの部分は「実否の義は存せず候（ホントかどうかは知らない）」としてある』。『本島知辰がどこで執筆したかは定かでないが』、享保八年の『時点』、『この仇討伝が仙台藩の外へ出たことは間違いない』とある。

『高尾の墓、仙臺に在り。「兎園小説」に載せたりき。併見るべし』『兎園小説』はオムニバス共著随筆。編者は滝沢解（曲亭馬琴）。文政八（一八二五）年成立。同年、滝沢解・山崎美成を主導者として、屋代弘賢・関思亮・西原好和ら計十二名の好事家によって、江戸や諸国の奇事異聞を持ち寄る「兎園会」と称する月一回の寄合いが持たれ、その文稿が回覧されたが、その集大成が本書。本集全十二巻の他、会が絶えた後も、馬琴の怪奇談蒐集は続き、本集以外に外集・別集・拾遺・余録がある。私も[オリジナル授業案](#)「やぶちゃんと行く江戸のトワイライト・ゾーン」で二篇扱っており、いつか全篇を電子化したいと思っている。ここで言っているのは、本集の第九集（文政八年九月一日に行われた兎園会の記録）で輪池堂（国学者屋代弘賢（宝暦八（一七五八）年〜天保一二（一八四一）年の号）の発表した以下。

というより、最後の仙台の高尾の墓と称する戒名の拓本からの記載以外は馬琴の持っていた本篇をそっくり引き写したものである。吉川弘文館随筆大成版を参考に、漢字を恣意的に正字化して示す。

*

○遊女高雄

著作堂「やぶちゃん注・馬琴。」の珍藏に「みちのくざうし」といふ有り。それは陸奥の太守の醫師工藤平助が女の、同藩只野氏に嫁して仙臺に在りしが筆記なり。その中に、高雄が事跡をしるしたり。世の妄説を正すにたれり。曰、昔の國主、たか尾といふ遊女を、こがねにかへてくるわを出だし給ひて、御たちまでもめし入れられず。中ず川【頭書、中ず中は中洲川にて則三派の事なり。後までも中洲といふをもて知るべし。「やぶちゃん注…これは一言言わずにや気が済まない馬琴のそれ。】にて切りはふらせ給ふと、世の人思へるはあらぬことなり。是は、うた・上りりにおもしろし事添へて作りなどして、やがて誠のごとく成りしものなり。高雄は、やはり御たちにめしつかはれて、のち老女と成りて、老後、跡をたて終はりしは、番士杉原重太夫、又新太夫と、代々、かはるがはる、名のりて、【祿、玄米六百石。】今、目付役をつとむる重太夫は、その末なり。只野家近親なる故、ことのよしはしれり。杉原家にも、世の人、あらぬことを、まことしやかにとなふるは、をかし、と思ふべけれど、我こそ高尾が末なりと名のらんにも、おもたゞしからねば「やぶちゃん注…ママ。」おしたまりて「やぶちゃん注…ママ。」聞きながしをるとなり。これを、いと珍らしきこととおもひて、たづねおきけるに、この比、ある人のもとより、その法號、葬地等の書付を、著作堂の主にしめさんとて、こゝに、のす。その記に曰、仙臺の人、なにがし、遊女高雄が墓碑を、すりてもちたるを、四谷にすめる醫生淺井春昌といふものゝうつしたりとて、島田某の見せたるを、しるす。

二代目 享保元丙申年

○ 淨休院妙讚日晴大姉

三巴の紋十一月廿五日

杉原常之助

于時正徳五年二月二十九日

逆修 源範清義母 行年七十七歳

右の碑、仙臺荒町法竜山佛眼寺に在り。仙臺の人のいふ、高尾、實は國侯に従ひて、奥州にいたる。杉原常之助といふは、義子にて、名跡をたて給ひたるにいひ傳ふ。享保元年七十八歳にて天壽を終ふといふ。

綱宗側臣は、正徳元年六月四日卒去、享年七十六歳。仙臺瑞鳳寺に葬る、法號雄山公威見性院といふ。

*

現在の宮城県仙台市若林区荒町にある日蓮正宗法龍山佛眼寺（ぶつげんじ・グーグル・マップ・データ）にあるこの戒名「淨休院妙讚日晴大姉」とあるのは、鷗外の示した、伊達綱宗の側室の一人である品の墓である。また、「綱宗側臣」は梶原家の誰を指しているのかよく判らぬが、それよりも、この「瑞鳳寺」が、しっかり品絡みで、しかも「高尾門」と呼ぶ門があるのである。こう俗称されている門は品の屋敷にあったものを移築したものであると、サイト「かつちゃんの歩いて撮ったハイキング記録」の同寺のページにある。さても、特にこの混淆伝承自体や鷗外の称揚する「お品さん」には私は食指が動かない。飽きがきた。ケリをつけるには、岡林リョウ氏のブログ「揺りかごから酒場まで☆少額微動隊」の「仙台高尾の足跡を追え！（遊女供養塔刻銘、出身地、昭和明治写真追加、高尾考挿絵追加、仙台の高尾門、通称高尾墓写真、昭和初期写真を追記）ついでに薄雲太夫の墓参り。↓結論めいたことまで↓明治中期お品資料追加」という記事がテツテ的に追跡していて、写真も豊富で、且つ、面白い。これでべとする。

「月堂見聞集」（げつどうけんもんしゅう：現代仮名遣）は元禄一〇（一六九七）年から享保一九（一七三四）年までの見聞雑録。「岡野隨筆」「月堂見聞類從」とも呼ぶ。本島知辰（月堂）著。全二十九巻。江戸・京都・大坂を主として、諸国の巷説を記し、政治・経済から時事・風俗にまで亙っており、自己の意見を記さず、淡々と事蹟を書き記してある。大火・地震・洪水の天災を始め、將軍宣下、大名国替、朝鮮・琉球人の来聘、世を騒がせた一件（御家騒動・「江島生島」事件・刃傷沙汰など）、享保十二年の美作津山百姓一揆、翌十三年の象の献上のことなど、実録体で、参考になる記事も多い。明治大正二（一九一三）年国書刊行会刊の「近世風俗見聞集 第二」国立国会図書館デジタルコレクションのここで読める（右ページ下段中央から始まる「○仙臺より寫來候敵討之事」）。確かに一番最後に、「右之書付實否之義不レ存候得共、仙臺より參候由、世間風説在レ之故留置候、以上」とある。ということとは、風説として既に広まっていたもので、今回、現地仙台からも来書したので書き留めたと言っている辺りは、うーん、怪しすぎるなあ。

「慶安」（一六四八年〜一六五二年）「以前の事」恐らく馬琴の読んだそれにも由比正雪が出て来るように脚色されていたからであろう。「由比正雪の乱」は慶安四（一六五一）年四月から七月にかけて起こった。

「妄誕」出鱈目な話。」

狼 打

木幡四郎右衛門【伊賀舍弟。「やぶちゃん注・原割注。」】、澤口覺左衛門【同三弟。「やぶちゃん注・原割注。」】、兩人つれだち、例の鐵砲、打かたげて、山狩に出しが、得ものもなければ、

「狼をうたん。」

と、宮崎郡多田川村の内、「若みこ」といふ所にいたりて、【此當は狼の巢なり。「やぶちゃん注・原割注。」】岡山よりみおろせば、河原近き平野に、狼、集りゐたり。【數、十四、五疋なり。「やぶちゃん注・原割注。」】

をりをり、里に下り來るものなれど、かく一目に見しは、はじめなりとぞ。

兩人、めづらしく思ひ、その毛色をみるに、赤毛・白毛・白黒のぶちさへ有て、眞犬の如し。【常に見るは、ごま犬のごとくなる多しとぞ。「やぶちゃん注・原割注。」】

岡より、つるびに打しに、【「つるび」とは、ひとしく打ことなり。「やぶちゃん注・原割注。」】覺左衛門が打しは、一ッにあたりて、たふれたれば、とりて行つ。四郎右衛門が打しは、一ッたふれし玉の、又、そばなる雌狼にあたりて、はでに成て逃しほどに、

「とめ矢を付て、ニッたらん。」

と追かけしが、日暮しかば、見うしなひたり。

「打捨置し狼をとらむ。」

と、人をやとひて、松、うちふらせて、先の所に行てみしに、得ものは、なし。

そのほとり、おびたゞしく狼の足跡有し故、そのあとをもとめて行てみるに、河原に引ゆきて、友食せしとみえて、ほね・肉、ともに、少しもなく、たゞ、耆尺四方ばかり、皮の残りて有しのみなり。

いまゝで、むつまじげにつどひみし友の、人にうたれつればとて、暫時に、くらひ盡しける、狼の心ぞ、めざましき。

せんかたなければ、のこりし皮をとりてかへるに、四方、山澤にて、狼のほゆる聲、いくそ百にかあらん、物すごければ、やとはれし歩は、ふるふ、ふるふ、

「よしなき御供つかまつりて、命や、うしなはんずらん。」

と、わぶるを、四郎右衛門は、ただけしく、

「悪き山犬めら、打とめし得物をくらひしうへにも、あだなきば、一打ぞ。」

と、四方をにらみてかへりしが、出來る狼は、なかりしとぞ。【解云、こは狼にあらず、「豺」にて、俗に「山犬」と唱るものなるべし。狼には雜毛のものなく、豺には、雜毛、多かり。】

「やぶちゃん注…これは頭注。」

「やぶちゃん注…標題は「狼打」は「おほかみうち」と読んでおく。さても、馬琴の言うように、ここに登場したそれは、確かに毛色から考えて、哺乳綱食肉（ネコ）目イヌ亜目イヌ科イヌ亜科イヌ属タイリクオオカミ亜種ニホンオオカミ *Canis lupus hodophilax*（北海道と樺太を除く日本列島に棲息していた）ではなく、犬（イヌ属タイリクオオカミ亜種イエイヌ *Canis lupus familiaris*）の野生化した個体の群れであろう。現在、確実な最後の情報は明治三八（一九〇五）年一月二十三日、奈良県吉野郡小川村鷲家口（現在の東吉野村鷲家口。[この附近](#)。グーグル・マップ・データ）で捕獲された若い♂（標本として現存）である。それ以前であるが、明治二五（一八九二）年六月まで上野動物園でニホンオオカミを飼育していたという記録がありはするものの、写真は残されていない。先般、新聞でニホンオオカミが「生き残っている」として探索している方の記事を読んだが、一定のコロニーがフィールドの中になければ、生き残りは考えられないのに、誰一人としてそれを確認・記録した者がいないことから、生態学的遺伝学的に考えて、私は残存説を全く支持出来ない。何らかの野生の犬の中にその遺伝子を有意に保存しているものがないとは言えないが、そういうなら、その裾野は普通の和犬も範疇として含まれてくる。そうしたある種の古い和犬種が一定の群れを持って、山中でひっそりと生存を続けているというのは有り得るかも知れぬとしても、それをニホンオオカミの生き残りとは私は言えないと考える。それは最早、生物学科学的生態学的発言ではなく、個人的なロマンの世界である。ロマンとは文芸的想像的で期待空想の世界であって、共有出来る者同士がそれを語り合って希望を持つのは一向に構わない。しかし、公然と生き残っていると発言し、都合のいい少数の科学的資料や、怪しげな写真や、ちよつと外れた学者の賛同説や、好事家の如何にも嘘臭い話を以って、大衆に妙な期待を持たせるのは如何なものかと考える。私にとってはニホンカワウソやトキが絶滅したのと同じであり、ツチノコやヒバゴンが種として存在しているという類いと変わらないと思うのである。そういうロマンを語る人は、私に言わせれば、既に絶滅してしまった微小貝類や、地味で目立たぬ絶滅目前の生物類にこそ目を向けるべきであると言いたい。絶滅した生物の幻しを求めめるのではなく、今、この瞬間に絶滅しつつある生物群を守るべきである。「大きな体のパンダは可愛い、イルカやクジラは人間に近くて頭がいい、だから守るが、目に見えないようなこんまい貝や、気持ちの悪いによるの蠕虫なんか、いなくなっちゃった方がいい」というのは人間の身勝手である。というより、チェレンコフの業火を手にしたしまった自分たち自身の絶滅こそ実は恐怖すべきである。但し、先の記事の方は、残されてある頭骨標本などを丹念に探し、絶滅したニホンオオカミを語り継ごうとしておられるのが本当の心情であ

られると読んだ。それには甚だ贅意を表するものである。なお、私の「和漢三才圖會卷第三十八 獸類 狼（おほかみ）」（ヨーロッパオオカミ・ニホンオオカミ・エゾオオカミ）も参照されたい。また、「和漢三才圖會卷第三十八 獸類 豺（やまいぬ）」（ドル（アカオオカミ）」もあるが、そこで私が「豺」をドル（アカオオカミ。ユーラシア大陸の東部（中国・朝鮮半島・東南アジア・ロシア南東部）と同大陸の中央部から南部（モンゴル・ネパール・インド・バングラデシュ・ブータン等）に棲息するイヌ科イヌ亜科イヌ族ドル属ドル *Canis alpinus*、別名アカオオカミ（赤狼）、英名「Dhole」）を比定同定したのは、良安の記載部分が「本草綱目」に基づくものだからである。日本に無論、ドル（アカオオカミ）は棲息しない。

「木幡四郎右衛門」小早川秀秋氏のブログ「戦国武将録」の「伊達晴宗家臣団事典」に、『木幡四郎右衛門』『きはたしろうぎえもん』とあり、『伊達政宗家臣』で慶長五（一六〇〇）年の『松川の戦い』で、挙げた頸級を、位牌の描かれた敵の軍旗に包んで持ち帰った。その戦功により、位牌の軍旗は木幡四郎右衛門の軍旗として使用された」とある人物の末裔かと思われる。本文で「きはた」と読んだのは、この記事による。また、岸本良信氏の公式サイト内の「仙台藩（伊達藩）2」（御知行被下置御帳）（延宝四（一六七六）年から三年四月かけて成立した仙台本藩士及び白石片倉家臣の内で禄高十石以上の者千九百三十二人の由緒書からの藩士・家臣のリスト。底本は一九七八年歴史図書社刊佐々久監修「仙台藩家臣録」）に「木幡四郎衛門」と出る。

「伊賀」只野伊賀。真葛の夫只野行義つちよしの通称。
「舍弟」すぐ下の弟の意でとる。

「澤口覺左衛門」「同三弟」とあるが、底本にある只野真葛の別な随想「真葛がはら」の「天」の部に、二篇続けて彼を主人公とする怪奇談が載り（二、沢口覺左衛門のきつね打の次第）及び「三、同じ人奇獣をうちしこと」、この後者の末には『沢口覺左衛門は、只野伊賀末弟なり』とある。この「真葛がはら」も、将来、電子化せざるばなるまい。今年は、只野真葛年となりそうだ。参考までに、宮城県の伝説を扱っている個人サイト「伝承之蔵」のこちらと、こちらに、そのこの二話の現代語訳と見まごう話が載る。但し、そこで彼を「獵師」とするのは、一体、どの資料からなのだろう？ 甚だ不審である。真葛の原本文には獵師とは記していないし、只野伊賀の弟である以上、彼は武士である。いや！ 先に示した岸本良信氏の「仙台藩（伊達藩）2」にも「沢口覺左衛門」とはつきり出ている。彼は獵師ではない！ 武士である！ さて。このサイト主は同サイト内でパブリック・ドメインの「仙台人名大辞書」や「仙台叢書」などの素晴らしい電子化もなされておられ、そこでは異常に厳しい使用注意書を記されておられるのだが、御自身の、以上の「伝説」のパート部分では、その話の基礎資料

とした書誌データや聴取記録を、一切、表示されておられない。これは確かな「伝説」だからこそ、示すのが必須にして当然である。しかもこのサイトはアメリカのフロリダ大学の学生の助力を得て、英訳までなされていて、外国の方も読むのである。民俗学の伝説記録として以上の基礎データは絶対に欠かせない。ただ、言わせてもらえば、私は以上の二つが、どう考えても、只野真葛の「真葛がはら」をもとに作話したものとは思えないのである。「沢口覚左衛門と珍獣」の下方にある「四日切」の解説は「真葛がはら」の「三、同じ人奇獣をうちし」との途中に入る翁の台詞を訳したものに過ぎないからである。だのに、どうして勝手に武士「澤口覚左衛門」が「獵師」になっているのか？ 不思議である。主人公を「獵師沢口覚左衛門」とする、真葛のものとは違う伝承があるのであれば、是非とも、その原拠・採集年月日を示して戴きたいのである。そうでなく、万一、誰かが勝手に「獵師」に設定を作り変えてサイトに話したのだとすれば、これは、他の折角の面白く興味深い同サイト内の他の「宮城県の伝説」群も聊か素直に読めない気がしてくるし、民俗伝承資料としても甚だ残念なことになるのである。

『宮崎郡多田川村の内、「若みこ」といふ所』宮崎郡という郡はない。宮城郡はあったが、同郡内には多田川はない。しかし宮城県加美郡加美町多田川ならばある。航空写真に切り替えて拡大すると、「狼の巢」の雰囲気は、特に北西部（旧上多田川地区）辺りで文句なしだ（「スタンフォード大学」の旧地図も参照されたい）。私は、断然、このこと感じた（但し、「若みこ」は遂に発見出来なかった）。さらに、地図で字地名を調べている内に、旧下田川地区から南東に二キロメートル半ほどのところに、宮城県加美郡加美町上狼塚（かみおいのつか）というとんでもない地名が現存することが判った。「スタンフォード大学」の旧地図では「かみおいぬつか」とルビする。なんか、呼ばれた感じがした！

「河原近き平野」この地区は北西から南東にかけて尾根が南北にあり、村域のその中央を多田川が貫流している。

「狼、集りゐたり。【數十四五疋なり。】」この群れも、あまりニホンオオカミらしくない。彼らは大規模な群れを作らず、二、三頭から多くても十頭ほどの群れで行動したとされるからである。但し、北海道・樺太・千島列島にも分布していたイヌ属タイクオオカミ亜種エゾオオカミ *Canis lupus hattai* とはそこが違う。エゾオオカミは明治になって北海道開拓で捕獲駆除が奨励され、明治二九（一八九六）年に函館の毛皮商によってエゾオオカミの毛皮数枚が扱われたという記録を最後に、確認例がなく、ロシア領有地も含めて同種は絶滅したものとされている。

「一目ひとめ」こう読んで初めて「一度に見えること・一目で総てを見渡せること」の意となる。「常に見るは、ごま犬のごとくなる多し」本当の狼のことを言っているととる。胡麻犬で白

に胡麻を散らしたくすんだ感じの謂いか。ニホンオオカミは周囲の環境に溶け込みやすいように夏と冬で毛色が変化したとされる。東京大学大学院農学生命科学研究科収蔵の剥製(👤・体長一メートル)は冬毛のように思われ、白に薄い茶色交りの感じ。「奈良県」公式サイト内の「[県民だより奈良](#)」のこちらに、オランダの「ライデン自然史博物館」所蔵の基準標本のニホンオオカミの剥製の写真があるが、これが夏毛のようで、濃い茶色を呈している。ニホンオオカミが餌が不足して、下界へ下りてきて人馬を襲うのは冬場が多いから、常に里人が見かけるのは、冬毛で臍に落ちる気はする。

『つるびに打しに、【「つるび」とは、ひとしく打ことなり。】「連びに撃ちしに」。ここは二人一緒に同時に撃ったの意であろう。「連ぶ」いは「並べる」の他に「続けざまに打つ」つるべ打ちに打つ」(連続して放つ)の意もあるが、ここは前者でとった。

「とりて行つ」覚左衛門が、倒れたその獲物をとり下って行つたの意としか読めないが、しかし、それでは後の展開と齟齬する。「とりに行かんとしつ」の意にとつて読み進める。

「四郎右衛門が打しは、一ッたふれし玉の、又、そばなる雌狼にあたりて、はでに成て逃しほどに」前注に従い、また、この「一ッたふれし」も「一ッたふせし後に、その玉の」と読み換え、「四郎右衛門が撃つたそれは、まず、一頭を倒した後に、その玉が跳んで、また、近くにいた雌の狼にあたって、ひどく暴れて逃げてしまったので」の意で採る。但し、ここは「一ッたふれし玉の」は「一ッたふれし狼の」の衍字の誤りととるなら、それはそのまま「覚左衛門が倒した狼の」ですんなりと読めなくはない。

「とめ矢を付て、二ッとらん。」あの手負いの雌狼にも「留めの一発を撃つて、二頭とも獲つてやる!」。無論、「矢」と言っているは従来の習慣からで、鉄砲で、である。

「日暮しかば、見うしなひたり」とあって、その直後に、「打ち捨てて置いてしまった撃ち獲った狼をとりに行こう」と二人で語り決めて、それから、「人を」雇って、「松、うちふらせて」(松明をかざして打ち振って、宵の口の山路を)「先の所に行」き「てみしに」となると、時間経過から考えて、ロケーションはそんなに山谷の奥ではないように読める。当初は現在の多田川地区の最奥と踏んだのだが、これは案外、同地区の中央或いは南東の平地に近いところであったのかも知れぬ。

「得もの」「獲物」。

「いま、で、むつまじげにつどひみし友の、人にうたれつればとて、暫時に、くらひ盡しける、狼の心ぞ、めざましき」先般、私はタイリクオオカミ亜種ツンドラオオカミ *Canis lupus albus* の子育て(👤のみが行う)を見た。母と最初の娘と新生児の子育ての協力が胸を撲つた。娘は新生児を育てるために遂に餓えて巢の中で亡くなる。母狼はしかし彼女を食べることとはなかった。真葛よ、何時の時代も「めざましきは人なるぞ」――

「歩」荷い人夫。

「ふるふ、ふるふ」「ふるふると震えては。

「わぶる」「嘆く。」

與四郎

柴田郡與倉村の内、宿といふ所の百姓に、與四郎と云者、有し。生付、氣丈にて、力つよく、齒などの勝て達者なることは、近郷にたぐひなく、殺くるみを、やすく、かみわりしとぞ。

寛政年中「やぶちゃん注：一七八九年〜一八〇一年。」のことなりし。十一月末に、病狼、荒て、宿の町の者ども、數人、あやめられしこと、有き。

其頃、與四郎、外へ夜ばなしに行て、九ツ頃「やぶちゃん注：午前零時前後。」、歸るに、をりふし眞の闇にて有し。何心もなく、小哥にて歩行するうしろより、狼、出て、こむらを、くひたり。ハット思ひ、ふりむく内、乳の下を食、又、飛越て、あばらをくひし時、狼とは、心づきたり。

「やれ、與四郎は、狼にくはるゝぞや。誰ぞ、出て、たすけよ、たすけよ。」と、聲かぎりによばはりしかども、夜ふけといひ、たまたま聞付し人有ても、おそろしさに、耳つぶしなどして、出あはざりき。

狼は、すきまなく、前後・左右より、とびつき、とびつき、食こと、數ヶ所なり。

『とても、たすかる身にあらず。かたきばかりは、とらんずものを。』

と、をたけびして、とりあへども、闇夜のことなり、狼は、つばさを得たるが如く、とびのき、飛つき、くらひつくに、棒一本だに、もたざれば、手にて拂へば、すぐに、くはれ、足もてふめば、又、くひつかれ、せんかたなし。

くはれながらも、引敷、引敷、足を、おしをりしが、三本まで、をりたれど、壱本にても、飛ぶこと、やまず。

漸、壱本なる足を取し時、をとがひへ食つかれしを、兩手にて引はなせば、我肉まゝ、はなれし時、狼「やぶちゃん注：」が「或いは「の」を添えたい。」のんどに、與四郎、食付て、つひに、のんどの皮をくひやぶりて、かたきをば、とりつれど、惣身、血しほにまぶれながら、其あたりの戸をたゞき、

「狼は、仕とめつれば、氣づかひなし。明けよ、明けよ。」

と、たゞきしかば、漸、明たる所に入て、かいほうに逢、夜の明るを待て、長町と云所に、狼に食れし者のみ、療治する醫の有もとに行て、疵口をあらためしに、四十八ヶ所、有しとぞ。

醫の曰、

「かほど、くはれし人を、見しことなし。數ヶ所の内には、急所にかゝりし所もあれば、療

治、屈とどくやいなや、うけ合あひがたけれど、先まつ、こゝろみん。」

とて、とりかゝる。

その療治の仕方は、狼にくはれし所をくりぬきて、疵口へ、もぐさをねぢこみ込、灸を、度々たびたび、すゆることのよし。

四十八所の疵口へ、十分に灸をせし内、與四郎は、少しもひるめる色なく、こらへて有しとぞ。

醫師は、おもふほど、療治をして、この氣丈を感じ、

「いまゝで、數人、療治をせしに、只、一、二ヶ所の疵にさへ、人參をのませて療ずるに、氣絶せぬ者は、すくなし。五十におよぶ疵口をりやうずる内、かほど、たしかにて有しは、前後に稀なる氣丈もの。」

と、ほめしとぞ。

「犬毒けんどくは、のきたれば、よし。是よりは、きんもつ、大切なり。第一、まず・雉子・小豆の餅なり。この外、油のつよきものは、皆、いむべし。」

と、いはれて、

「私ことは下戸にて、小豆餅、ことに好すきなり。これを、いむことにては、生いきたるかひ、なし。今迄の如く、灸を又一へんすゑ直まっさば、早束まつそくより、何を食しても、よからんか。」

と、問ひしとぞ。

醫の曰、

「いや、さやうにやきしとて、きんもつなしに、よきことは、なし。先々まつまつ、かへれ。」

とて、歸しけるに、正月もちかし、三十日にもたらぬうち、「もちつき」成なりしに、與四郎、こたへず、小豆餅、したゝか、食せしが、少しもさはらざりしとぞ。

もろこしの關羽が、矢疵を療治せしにも、おとるまじ。珍らしき豪傑なり。

雄子・ますなども、ほしきまゝに食くひしが、眼まなこくらく成しかば、

「めくらになりては、せんなし。」

とて、後のちは、くはざりしとぞ。

文化九年「やぶちゃん注…一八二二年。」の頃、五十二才なりしが、達者にて有しと、きし。

同じ寛政の頃のことなり。與四郎、くはれて、五、六年過すぎて、また、狼の荒るゝといふこと有しに、同じ村に劍術をたしなみし百姓有て、狼を切法きるを、つたへられて、一度、ためし見たく、内心に願ねがひみたり。【狼を切には、左の手を出してゆけば、それを食つかんと來る時、手を引てきれば、見事にきらると教られしとぞ。】

親類内にふるまひ有て、夫婦づれにて出しこと有しに、家人は、

「かならず、はやく日の暮ぬうちに、かへれ。」

とは云つけやりしに、妻は、ことにおそれて、先方をも、はやく仕廻しまして、七ツ時分「やぶちゃん注…午後四時前後。」、歸かへりしに、遠く、狼のかたちを見かけしかば、いよいよ、道をいそぎて家に入たり。

夫は、直ただちに、わきざしをさして、門を出るを、妻、とどめて、

「けが、あやうし。」

といふを、

「多年ねがひしこと故、ぜひ、切きりてみたし。」

とて、出たり。

扱、はじめの所にいたりて見れば、遠くすくみてゐたるを、わきざしをぬきて、左の手をさし出いして、ちかよれば、十間ばかり「やぶちゃん注…約十八メートル。」に成し時、狼は、背をたて、胸を、地につけ、このかたをめがけて、ねらふ躰ていなり。

『うごかば、きらん。』

と、心をくばりてゐたれど、一飛ひととびに手に食くつきしが、一向、目にさへぎらざりしとぞ。

手を引ひかねて、くはれながら、切しが、かしらは、そげて、きられつれど、猶、手に食付くて有しを、先まづ、仕とめたれば、

『よし。』

と思ひ、うしろあしに繩を付て引ながら、

「與四郎は四十八所くはれてさへ、生いきおほせつれば、たゞ一所は、心やすし。」

と、おちつきて、かへると、すぐに、かの醫いの本もとに往ゆて、療治りょうぢをたのみしが、一所の灸治しよぢさへ、氣絶して、思ふほど、灸、すゑかね、廿日もたゝぬに、むなしくなりしとぞ。

なまびやう法、大疵おほけがのもとなりき。

「やぶちゃん注…ここに出る複数のそれは、事実、狼（哺乳綱食肉（ネコ）目イヌ亜目イヌ科イヌ亜科イヌ属タイリクオオカミ亜種ニホンオオカミ *Canis lupus hodophilax*）であったか、そうではなく、野生の犬或いは逃げた飼い犬（イヌ属タイリクオオカミ亜種イエイヌ *Canis lupus familiaris*）の野生化した個体であったかは、これだけでは判らない。ただ、複数、咬まれて亡くなったというそれや、最後の左手一箇所だけを咬まれただけに死亡したケースでは、その対象の狼或いは犬が、狂犬病に罹患していた可能性が濃厚であると考えられる（凡そ二十日経たぬうちに死亡しているのを「遅過ぎる」と感じられる方がいるかも知れぬが、狂犬病ウイルス（オルトルナウイルス界 Orthornavirae ネガルナウイルス門 Negarnaviricota：ハプロウイルス亜門 Haploviricotina モンイウイルス綱 Monjiviricetes

モノネガウイルス目 Mononegavirales ラブドウイルス科 Rhabdoviridae リッサウイルス属 *Lyssavirus* Genotype 1 狂犬病ウイルス *Rabies lyssavirus* ・・リッサウイルス属は七つの遺伝子型に分類に分類され、学名も通常のそれとは異なり、属名が属のそれとは一致しない)は神経系を介して脳神経組織に到達して発病し、その感染の速さは、日に数ミリメートルから数十ミリメートルとされており、脳組織に近い傷ほど、潜伏期間は短く、二週間程度であるものの、遠位部では数ヶ月以上、事例の中には二年後の発症例もあるのである)。而して、与四郎を襲ったそれは、或いは狼であったものかも知れず、幸いなことに四十八ヶ所も咬まれながら、十年以上元気に暮らしていたとするなら、その狼或いは野良犬は不幸中の幸いで、狂犬病ではなかったと言える。ともかくも本書は文政元(一八一八)年成立で、与四郎存命の確認がある文化九(一八一二)年からは僅かに六年しかたっていない点で、優れて実録譚としての基盤がしっかりしており、何より、もし、ここに出るその対象の犬のような生物が、実際にニホンオオカミであったとすれば、本篇は、ニホンオオカミ史上、稀有の人を襲った事実の驚くべき実記載であることになる。それを女流作家只野真葛が記していること自体、これはとんでもなくレアにして貴重なニホンオオカミの博物学的記録であるという点で、現代に蘇るべき逸品であると言うべきものである。

「柴田郡與倉」「よくら」と読んでおくが、以下に示す通り、誤記「村の内、宿」「しゆく」
「といふ所」現在の宮城県柴田郡はここ(グーグル・マップ・データ。以下同じ)であるが、
「与倉」や「宿」の地名は見出せない。しかし、同郡の字名を調べると、宮城県柴田郡川崎町(まち)支倉(はせくら)を見出せる。何故、ここで目が止まったかという点、底本は新字で「与倉」とあるからで、草書の「支」は「与」と判読を誤り易いからである。さればこそ！ と探してみたところが、頭に当たった！ 今もこの支倉地区に「宿」があった！
「NAVTIME」のこちらを見られよ！ 「宮城県柴田郡川崎町支倉宿」とある！ 大字「支倉」の字「宿(しゆく)」「読みは「MapFan」のこちらを見られよ！」である！ 探索大団円！！！！
ここがロケーションだ！！！！
「耳つぶし」「聞耳潰し」(動詞形もある) わざと聞かないふりをする事。
「をとがひ」頤。歴史的仮名遣は「おとがひ」が正しい。下顎。
「我肉まゝ、はなれし時」与四郎の顎の肉を咬み喰らったままに引き千切って、狼が与四郎の体から離れた、その瞬間。
「のんど」喉笛。
「かいほうに逢」その家の者から介抱を受け。
「長町」旧宿場町であった宮城県仙台市太白区長町(ながまち)があるが、ここかどうかは不明。但し、狼咬傷専門の灸を主体とする医師という特殊な専門医が、支倉の山間にいたと

は考えにくいから、ここを一つの候補としておく。[ウィキの「長町\(宮城県\)」](#)によれば、『長町宿は仙台城下から数えて一つ目の宿場だった。長町宿の設営には仙台城の普請奉行だった金森隠岐ならびに津田豊前景康が携わり、街道沿いに』八十六『軒の町屋敷が作られた。奥州街道の他に、長町宿から西へ延びる二つの街道もあり、総じて長町宿の伝馬役の負担は大きなもので、それに耐えかねて潰れる家もあったという』。『江戸時代の長町は、仙台城や』、『その城下町で使われる木材の集積地の一つでもあった。それらの木材は、広瀬川の支流である大倉川および新川川』(につかわがわ)『周囲の藩有林、また』、『名取川上流』(支倉はまさにそこに当たる)『周辺の藩有林から切り出されたもので、川の流れを利用して下流へと流された。広瀬川に流された木材は角五郎木場に、名取川に流されたものは長町木場に集められ、そこから城下へ流通して、薪などに使われた。長町木場では毎年』四十五『万本から』六十『万本の流木(ながしぎ)が取り扱われたという』とあり、繁華な宿場町であったことが判る。この驚くべき多量の木材集積の場であったことを考えると、**実際の林業従事者たちが、この関係が深かったことが判り、さすが、山中での伐採作業中などに、狼に襲われることも日常的にあったに違いなく、ここにこの稀有の狼咬傷の専門医がいても、何ら不思議ではないではないか。調べてみてこそ分かったリアリズムである。**

「犬毒」これは、必ずしも狂犬病のみを指すものではなく、咬傷による他の多くの細菌やウイルス感染症も含まれる謂いであろう。

「きんもつ」禁物。以下から、特に予後の禁忌の飲食物を指すことが判る。

「ます」「鱒」であるが、この「マス」とは、現在でも、特定の種群を示す学術的な謂いでは、実は、ない。広義には、サケ目サケ科 Salmonidae に属しながらも、和名の最後に「マス」が附く魚、又は、日本で一般にサケ類(ベニザケ・シロザケ・キングサーモン等)と呼称され、認識されている魚以外の、サケ科の魚を総称した言い方であり、また、狭義には以下のサケ科タイヘイヨウサケ属の、

サクラマス *Oncorhynchus masou*

サツキマス *Oncorhynchus masou ishikawae*

ニジマス *Oncorhynchus mykiss*

の三種を指すことが多い。私の「[大和本草卷之十三 魚之上 鱒 \(マス類\)](#)」を参照されたい。

「今迄の如く、灸を又一ぺんすゑ直さば、早束より、何を食しても、よからんか」自分にとって都合のいいことを言っているようだが、ちょっと理屈が判らず、訳せない。まあ、四十八箇所も咬まれた直後のことなれば、やや意味不明のままの、小豆餅食いの懇請ととって置いて問題ない。

「こたへず」「こらへず」の誤判読か。堪こらえられず。

「關羽が、矢疵を療治せし」私は「三国志」に興味がない人種であるので、話として麻醉せずに矢傷（但し、以下を見ると判るが、古い慢性化したそれである）を手術させたということとは聴いていたが、よくは知らなかった。サイト「[はじめての三国志](#)」の「[關羽は矢傷をどうして麻醉しないで治療したの？](#)」が、さらりと読めてなかなかよかった。

「眼くらく成しかば」一時的な視覚障害が起こったようであるが、それを狼咬傷感染症の予後に雉子や鱒を食ったことと関係づけることは医学的には言わずもがな、無理がある。この視覚障害が所謂、視野狭窄であるとすれば、狼に咬まれたのとは全く別の理由で発症したものと考えるのが自然であり、それも一過性であるから、問題にするに足らぬ。

「同じ寛政の頃のことなり。與四郎、くはれて、五、六年過て」寛政は十八年までしかないから、**与四郎の狼との組打ち事件があったのは、寛政元（一七八九）年から寛政九（一七九七）年の間に概ね限定出来ることになる。**

「同じ村」支倉村。

「ふるまひ」饗応。饗宴。

「先方をも、はやく仕廻て」妻が先方にそれとなく日暮れ時の狼の襲撃を恐れることを言い、先方も宴を短い時間で切り上げたということであろう。

「遠くすくみてゐたる」主語は狼。遠くに、立ち竦すくんで居た。この「すくむ」は、座って上半身をすくくと緊張させていたということであろう。まさに戦闘にかかるためのプレ状態である。

「一向、目にさへぎらざりし」全く以って、その飛びかかる動作が電光石火で動態を視認出来なかったというのである。」

佐藤浦之助

高山公とせうし奉る國主の御代に、「布引」と云し、すまひとり有しが、其かうむりし由來は、ある時、

「ちからを、ためさん。」

とおもひて、日本橋へいでゝ、車うしの、はしり行を引とゞめしに、牛は、はしりかゝる、いきほひ、此方は、大力にて引とめしを、車、中よりわれて、左右へ、わかれしとぞ。

それより後は、牛の胸へ、布をかけて引しに、いつも、とゞまりし故、「布引」とはつきしとぞ。

天下にまれなる力士といはれしを、「松浦ちんさい」と申【六萬石大名。「やぶちゃん注：原割注。】、茶の湯好の大名のかゝへと成て、「日の下かいざん」と名のり、殊の外、祕藏せられしとぞ。【解云、布引は、烏獲が奔牛を曳駐めしといふ故事と、同日の談なり。「やぶちゃん注：原頭注。】

さるを、かねて國主にも、松浦家と御じゆこん「やぶちゃん注：「入魂」。「昵懇」と同じで、歴史的仮名遣はこれで正しい。」なりしうへ、この御家中にも、茶之湯・御弟子、かれ是、有て、しげく御出入被レ成しとぞ。

國主、おほせ出さるゝは、

「布引をなげむと思ふほどのもの、國中にあらば、申出よ。」

と、ひそかに、ふれ、有しに、村方の役人をつとめし人に、佐藤浦之助といひし男、小兵にて、大力の「やはらとり」にて有しが、

「私も、ひしと鍛練いたしなば、なげ申べし。」

と申上たりしを、

「さあらば。」

とて、けいこ、仰付く。其内は、日々、鴨二羽を食料に給はりしとぞ。【鴨を食料に給はりしは、随分、油のつよき物を食うへ、身にも油を引て、其日は出しとぞ。少し手のさはりても、油にすべりて、とらまへられぬ工夫、とぞ。つげごとにや、人の語し。「やぶちゃん注：

原割注。】

日、有て、

「わぎも熟したり。」

と思ひしかば、その由を申上し時、松浦家へ仰入らるゝは、

「手前家中に、『布引』と力をこゝろみたし』と願もの候が、をこがましきことながら、

御慰おなぐさみに勝劣かちあひを御一覽候はんや。」

と仰せつかはされしに、もとより、すまふ好すまひの松浦殿なりければ、

「興有ること。」

と、悦よろこび給ひ、「やぶちゃん注…この引用の格助詞」と「は底本では「よ」。」

「いそぎ、此方へ、つかはされよ。」

と挨拶有しかば、浦之助をつかはされしかば、廣庭ひろにはにて立合たちあひしに、

『あなたは、名にあふ、關とりなり。こなたは、勝れて小兵なり。いかでか、是が勝かっべきぞ。』

と、思召おもしめるゝ風情ふぜいなりしが、浦之助は、こなたへ、くぐり、かなたへ、くぐり、さらに布引が手にのらず、いかゞはしけん、大男をかつぎて、

「ひらり」

と、なげしかば、どよめき興じ給ふこと、しばしは鳴なもやまざりたり。

松浦殿、浦之助を、

「すぐすぐ、是へ、是へ。」

と、めされしかば、

「女中なみぬし奥座敷へ、いなかそだちの無骨もの、はだかのまゝにて立出たちいでしは、布引との立合より、かへりて臆したり。」

とぞ。

松浦殿、そばちかくめされて、

「今日のふるまひ、誠におどろき入いりたり。これはいかゞしけれど、つかはずぞ。」

とて、二重切にじゆうぎりの花いけ【名器なり】を、手づから給はり、

「扱。この坐に有女あるをんなの内、いづれなりとも望次のぞみ第、其方が妻に得さすべし。」

と有ければ、浦之助おもふやう、

『無骨ものゝ妻には、よき女はのぞみても、末、とげまじ。』

と思ひて、一番、みにくき女に、盃さかずきをさしたりとぞ。

浦之助がくふうは、

『とても、大力・大ひやうの角力すまひにつかまれては、かつこと、あたはず。たゞ、ぬけくゞるうち、かつぎなげにせん。』

と、多日、くふうしたりしが、うまく、其手ゆきに行しなり。

布引は、残念に思ひ、

『今一度、たちあはゞ、みぢんになさん。』

と、ひらに立合のこと、願ねがひしかど、勝劣かちあひさだまるやいな、此方こなたより、

「ひし」

と、警護の者、つき添そひ、早々、浦之助をつれて引ひきとり、一生、他行たぎやう、相あひとめられし、とぞ。布引が遺恨に思ひて、もしあやめやせん、との、心づかひなりし。布引も、「やはら」の手にてなげられしを、

「一生、この無念はれず。」
と、いかりて有しとぞ。

このこと、此國人こくじんは誰たれもしりて語れど、江戸人は、たえて沙汰せぬことなり。
いかばかりか、興きやう有あることなりつらん。

「やぶちゃん注…この話、サイト「エキサイト・ニュース」の「[相撲の褒美は結婚？](#)」[江戸時代の結婚観が凄い](#)」に二回に亘って本篇を現代語訳したものがあ。しかし、この程度の古文で直ちに訳に頼るようでは、日本の未来は、何の夢も希望もない、と私は思うことしきりである。リンク先のそれはよく訳されているが、怪奇談に領域では、古文の初級レベルの知識も欠いたとんでもない語訳が有象無象転がっている。まっこと、嘆かわしい限りである。「佐藤浦之助」仙台藩士として実在し、主に元禄時代（一六八八～一七〇四年）には相撲名人として「[紅浦之助](#)」の四股名で知られた人物。宮城県仙台市青葉区通町とほりちょうにある全玖院ぜんきゅういん（ゼンキョウイン・グーグル・マップ・データ）に墓が現存する。[相撲絡みの古文献の電子化などで緻密な内容を持つ、古くから好きなサイトで、坪田敦緒氏の作成になる「相撲評論家之頁」のこちらに](#)（実は流石は同サイト、[こちらに](#)次の「丸山」（冒頭の大男丸山（相撲絡み有り）の話のみ）とともに本篇がちゃんと載っている）、彼の墓所を確認された記事があり、『戒名・円光宗室信士(旧墓正面・新墓左側面)。紅浦之助は、「古今相撲大全』（宝暦一三（一七六三）年叙）の「古キ名人之部」に「紅井浦之助」としてその名を出す、仙台藩抱えの力士で、出身は宮城県北部の志波姫というところ、いまでいう大崎市である。本名を佐藤権三郎、のち浦之助に改め、当時の『第四代『藩主伊達綱村』（万治二（一六五九）年～享保四（一七一九）年：藩主在位は万治三（一六六〇）年七月から隠居した元禄一六（一七〇三）年まで）』によって紅の四股名をつけられたという。江戸にある平戸藩松浦鎮信』（これは初代藩主であるから誤りで、綱村と重なるのは第五代藩主松浦棟（まつらたかし 正保三（一六四六）年～正徳三（一七一三）年：藩主在位は元禄二（一六八九）年七月から隠居した正徳三（一七一三）年二月までであるから、綱村と被るのは棟の在任期の十三年の間となる）『侯の屋敷に招かれ、西国斎蔵（または布引ともいう）と取って勝ち、天下一と名乗れ』、『と褒めそやされたと伝えられている。また、日下開山を称した鬼巖という巨人力士が全国を歩き、仙台で相手を募ったところ、紅は鴨肉を食べ続けて体表に脂を浮かせ、千変万化と讃えられるその取り口で鬼巖を倒し、紅の名を全国に知らしめたという伝説まで残ってい

る。しかも鬼巖はその場で死んだというから、俄かには信じがたいが。相撲をやめてからは、『地元で郡』（こおり）『奉行と』しての藩の御役目の傍ら、『算盤塾を開いていたという。晩年は仙台で御破損方役人となり』、享保一二（一七二七）年六月七日に亡くなった（なお、この記載は、真葛の話をしっかり裏付けている。相撲の相手にやや異同があるが、問題とすべき内容ではない）。『佐藤家墓域の右奥、真ん丸の石が台座の上に乗っている。高さは台とあわせて』六十六センチメートルで、『中央に「円光宗空信士 松室妙貞信女」と彫られてある。無論、この「圓光宗空信士」が「紅のことで、右には「佐藤浦之助景次 享保十二未年六月七日 行年七十歳」とある』（これが正確であるとすれば、佐藤浦之助は明暦四・万治元（一六五八）年生まれとなる。但し、以下に続いて食い違う資料が有る）。『墓域中央には、いつの建』立『か分からないが』、『新墓「佐藤家之墓」があり、棹石』（さおいし）墓の一番上に配される石。墓標部分のメインの石）『左側面から背面に互って多くの戒名がある。一番最初に「円光宗空信士 享保十二年六月七日 浦之助 七十二歳」とある。年齢に喰い違いがみられるが、紅をスタートとして江戸から昭和まで、丹念に彫られてある。さて、新墓には紅のとなり「霊光不味信女 天保三年十一月二日 妻」と彫られてあるのだが、天保』三年は西暦一八四二年で、『いくらなんでも夫婦で』百十五『年も歿年が開くはずはない。とすれば、やはり旧墓の「松室妙貞信女」が紅の妻なのだろう。どうして新墓では消えてしまったのか？』とある。ともかくも、この「松室妙貞信女」こそがこの話柄で彼が貰った妻の戒名であるのである。

「高山公とせうし奉る國主」これは、話の初っ端に示してある以上、仙台藩主の別称と考えねば筋が通らない。「高山公」の異名が見当たらないので、当初は直後に続く相撲取「布引」を抱えていた（或いは後にお抱えとした）「第五代平戸藩主松浦棟たかしの名と「高山公」は意味が通ずるかも」などと安易に考えていたものの、そう都合よくは行かず、松浦棟に「高山公」の異名は見当たらない。「困ったな」と思って今一度よく資料を見てみると、第四代仙台藩主伊達綱村の戒名が目に留まった。「大年寺殿肯山全提大居士」である。「肯山」は「高山」と音通だし、草書の「肯」を「高」と写し誤る可能性もある。さすれば、綱村の「肯山公」の誤り、と私は採ることとした。

「車うし」これは牛を轆の間に挟み込んだ牛曳きの小・中型の荷車（前後長は決して長くない）のことを指している（くれぐれも牛車ウシクルマなんぞを思い浮かべないことである）。大型のリヤカーに大きな農耕牛が繋げられたものを想起できれば、違和感がなくなるはずである。

「はしり行を引とぢめしに」この場合は、行き過ぎたそれを、後ろから、荷車部分の後尾を、やおら、むんずと両手で攔んで、引き留めたのである。

「車、中よりわかれて、左右へ、わかれしとぞ」牛の背後に接続されてある荷車が、引き留め

ている布引との間の、丁度、真ん中で、まず、前後に「バツン！」と割れたのである。さすが、牛に装着されている荷車の轆なぐさの後ろ部分は左右に弾け、また、荷車の後尾を布引は一箇所ではなく、左右位置で捌なぐさんでいたものと思われるから、そのモーメントは今度は前後ではなく、左右方向に「ガバン！」と弾けたとするのは、理に適った描写と言える。

「それより後は、牛の胸へ、布をかけて引し」荷車が完全損壊してしまうので、持ち主から弁償を迫られて当然であるから、そうならないように、牛本体の頸部の下方の前胸部（両前足の付け根前部）に強靱な長い布を引っ掛けて、荷車に負荷がかからぬように、パフォーマンスを行ったということであろう。

「松浦ちゃんさい」「六萬石大名」「茶の湯好の大名」平戸藩は元は六万三千二百石であったが、先に私が同定した松浦棟の先代の、父で第四代藩主松浦重信の藩政中に、分知によって六万千七百石になっていた。また、棟の藩政中の元禄二（一六八九）年には同じく分知により五万七千七百石に減っている。「ちゃんさい」はまず間違いない「鎮齋」と思われ、ここは棟の雅号ではないかと考える。その根拠は、棟の号に「履担齋」という「齋」称のそれがあること、また、何より平戸藩初代藩主は松浦鎮信しげのぶで、例えば、棟の父重信も隠居後に、諱を曾祖父と同じ鎮信と改めるほどに歴代の当主が「鎮」（鎮）の字を好んだからである。なお、棟は名君で、荒廃で苦しむ農民の救済に尽力し、また、優れた文化人でもあった。彼の四代後が、かの「甲子夜話」（リンク先は私の進行中の電子化注）の松浦静山である。

「日の下かいざん」先の坪田敦緒氏の「相撲評論家之頁」のこちらに、『現在において』も『日下開山』なる語が横綱の別称として用いられることがあるが、これは元来は仏教語で、寺の開祖を指すものである。「開山」は、山を開いて寺院を創めた開祖を言う。「山」は寺のこと。開山を崇めて「祖師」と言い、『開祖転じて最高者を表す称となり、双びなき優れた者を示すようになった。さらに、「開山」の頭に「日下」をつけ、最高峰の武芸者や芸能者がこれを称し、さらに芸能者（相撲は武芸に非ずして芸能の一なり。従って力士の身分は「土農工商」の「工」）の一たる力士にも用いられるようになった。「日下」は天ヶ下、これ、『すなわち天下、世界のことである。室町時代から「天下」なる語が使われたが、徳川將軍が「天下様」と呼ばれていたことから、江戸幕府は「天下」呼称の禁令を発布した』（天和二（一六八二）年）。これ『以降、「天下」と称えていた者は「日下開山」を呼称するようになり、『室町頃の職業相撲における最強者を「関」と言う（のちのち「大関」の語源ともなる。関所の意。「関を取って守る」の意から「関取」なる最優秀力士を指す呼称が生まれた）。この「関」を称える強豪やら、永年に互って負け知らずの力士を「日下開山」と言った。日下開山の称を受けた力士は多数ある。幕末頃には横綱免許を受けた大関を指すようになり、さらに後には横綱力士の別称となった。初代横綱とされている明石が、日下開山

の称を受けたというのは伝説であるというが、陣幕が明石を初代横綱としたのは、この伝説による。明治には日下開山の称が横綱の異称として定着していたという例証でもある。しかし、お分かりかとは思いますが、元来は日下開山が、『即ち』、『横綱を意味する語ではなく、また先に「日下開山の称を受けた」と書いたが、免許されるものではなく、単にそう呼ばれて持て囃されたというだけのことである』とある。

「烏獲が奔牛を曳駐めしといふ故事」烏獲（生没年不詳）は戦国時代の秦の將軍で、武王に仕えた。同国の同職であった任鄙じんひや孟賁もうほんと並ぶ大力士として知られ、千鈞きん（きん…当時の換算の機会計算で七・六八トン）の物を持ち上げる力が有ったとされる。参照した彼のウィキよれば、『勇士を好む秦の武王に取り立てられ、彼らと共に大官に任じられた』。『武王は紀元前』三〇七年八月に『洛陽で孟賁と鼎を持ち上げる力比べをした際、脛骨を折り』、『出血多量で亡くなったが、その際』、『烏獲も鼎を持ち上げて両目から出血した』』と言う。孟賁は罪を問われ』て『一族諸共死罪に処されたが、烏獲は』八十『歳を越える年齢で亡くなったとされる』とある。私はそちらの孟賁が生きた雄牛の角を引き抜いたという話は聞いたことがあるが。まあ、八トンを持ち上げるのなら、鉄腕アトムのように、猛牛を人差し指の上で回転させることも出来よう。

「茶之湯・御弟子」敢えて分離した。茶之湯の御弟子も、武道武術の御弟子も。

「ふれ」「觸」。お触れ。

「やはらとり」「柔取」。柔術者。

「つげごとにや」彼の話ではなく、誰かが、そう、まことしやかに言ったことも知れぬが、の意で採る。「神のお告げ」なんぞでは、おかしい。

「女中なみろし奥座敷へ、いなかさだちの無骨もの、はだかのまゝにて立出しは、布引との立合より、かへりて臆したり。」この台詞は後の浦之助の回想の直話として鍵括弧書きとした。

「二重切」竹の花入れの一種。二つの節ふしの間に、各々、窓を開けて、水溜めも二ヶ所設けたもの。利休の創始による。

「浦之助おもふやう、『無骨ものゝ妻には、よき女はのぞみても、末、とげまじ。』と思ひて、一番、みにくき女に、盃をさしたりとぞ」私は思うのだが、真葛は、この浦之助の考え方に親しみを覚えたのに違いないという気がする。そこで真葛は、決して美女ではなかったけれど、浦之助と幸せに添い遂げ、ともに墓に葬られた彼女を幸せだったと感じているのに相違ない。そこにまた、真葛の淋しさがある。真葛が二人の墓に手を合わせている後ろ姿が、私には見える。「松室妙貞信女」という戒名だけが知られる、浦之助の妻は、考えてみれば、決して美人ではないのだが、では、何故、松浦棟のお側に仕えていたかを考えてみれば、名君に

して文化人であった彼が、特に取り立てて選んだ女性だったからだ。さすれば、彼女は知的で
気配りの利く女性だったからではないか？ 浦之助よ、君の選択は正しかったのだ！

「此方より」遊びとは言え、大名同士の引き立て者同士の力比べである。浦之助が勝った場
合に、何らかの不測の事態を伊達綱村は予測し、特に手練れの藩士を警護役として同道させ
ていたのである。

「一生、他行、相とめられし」彼の命の安全を考慮して、生涯、藩外へ出ることを禁じたの
である。江戸時代の藩は国家であり、別段、おかしいことではなく、苦痛なことでもない。
藩外の飛地である藩領や、江戸の藩邸詰めにならなければ、藩域から一步も出なかつた藩士
はごまんという。あまり理解されているとは思われないので言っておくと、江戸幕府の幕臣
である旗本は、江戸を出るには幕府の許可が必要であり、日帰りの物見遊山でも、それが親
族との面会であっても、御府外に出たり、一泊したりすることは、原則上、出来なかつたし、
それが公に知られた場合は、相応の処罰を受けたのである。」

丸山

忠山公と申奉る國主の御代に出しは、丸山權多左衛門といふ大男なり。これは近き頃の故にや、人も、よく、しれり。この大をとこ、江戸見物の爲、家老衆のうちのものと成て、のぼりしが、大男のくせ、道下手なり。身はおもし、一日に、二足づゝわらじをふみ切といへども、足に相應せしわらじ、なければ、宿につきて、藁を打、二足のわらじを作て、はかねばならず、二足、作仕まへば、はや、

「御供、揃。」

と、いつも、ふれられ、日中、つかれても、馬にのれば、足、下へつきて、馬、あゆむこと、あたはず。ぜひなく、終日あゆみては、又、わらじ作りて、夜をあかし、やうやう、江戸へはつきたれど、

「かくの如くにては、歸らんやうなし。」

とて、角力とりとは、思ひ付たりしとぞ。

一向、手をしらず、只、立合て、兩手にて、はねるばかりなれども、はねられて、脚をたつもの、なかりしとぞ。

鐵山公と申奉る國主の御代に出し、「谷風」は、猶、人、しること、故かゝず。をりをり力持の出すこと有國なり。

「やぶちゃん注…前の『佐藤浦之助』に続いて実在した名相撲取「丸山權多左衛門」の話である。ちゃんと彼のウイキがある。丸山權太左衛門(ごんだざえもん(ごんだざえもん) 正徳三(一七一一)年〜寛延二(一七四九)年)は『仙台藩・陸奥国領出身の元大相撲力士』で『**第三代横綱**』とされる。本名は芳賀銀大夫。『陸奥国遠田郡中津山村(現・宮城県登米市米山町中津山)出身。元文年間』(一七三六年〜一七四一年)『頃に初土俵を踏む。家老衆の家来になって江戸見物に出たのは良いが、体が重くて歩くのが下手だったため、二足用意した草鞋をすぐ踏み潰しては、『徹夜で編み直すこととなり、馬に乗せれば、『足が地に着いてしまうほどだった。やつとの思いで江戸に到着したが、これでは故郷に帰るのもおぼつかないために入門したと伝わる』。元文二(一七三七)年四月、『大坂堀江で行われた興行に西大関として出場。その後』、暫く、『出場した記録がないが』、延享元(一七四四)年八月に『京二条河原で行われた興行に東大関として出場し』、寛延二(一七四九)年『までに』、『京や大坂で行われた数興行にいずれも大関として出場している。相撲は下手だったが突っ張るだけで相手は立っていらなかったとされる』。この寛延二年の『長崎巡業の際に現役のまま没した。死因は赤痢と言われている』。享年三十七であった。『丸山が歴代横綱に加

えられているのは、寛政元（一七八九）年にここ出る（後述）『谷風と小野川に横綱免許を
与える際』、『吉田司家が神社奉行に提出した書類に「過去に綾川、丸山と申す者に免許を与
えたが』、『記録は火災で失われた」と記載したことが根拠である』、『現在』、『公認されてい
る横綱では』三『代目に数えられるが、順序が逆で』二代目と『する説もある。ただし』、
『綾川五郎次が大関に昇進したとされる』享保二（一七一七）年の時点では、丸山は未だ五
歳である『ことから』、『綾川が』二『代目であるとすると説が濃厚であるが、いずれにせよ』、
『横綱としての実質がなかったのは綾川と同様である』。『初代横綱とされる明石志賀之助
と第』二『代横綱とされる綾川五郎次の』二『人と共に丸山を含む』三『人は伝説上の横綱
と言う位置付けがなされているが、明石と綾川が実在自体を疑問視されているのに対し、丸
山は実在が確認されているという点で大きく異なる。綾川と順序が逆とする説は』、『このあ
たりが関係しているものと考えられる』。『横綱免許とされている』寛延二（一七四九）年は、
『実際には吉田司家故実門人になった時を指す。実力自体は現在の基準に当てはめれば横
綱でも文句無しだったと言われる』。『怪力で、五斗俵』（約七十五キログラム）『に筆を差し
込んで文字を書いたといわれる。』『ひと握り いざ参らせん 年の豆』という句が知られて
いる』とある。サイト「相撲レファレンス」の彼のデータによれば、七ツ森部屋所属で、身
長は一メートル九十七センチメートル、体重百六十六キログラムとある。

「忠山公」第六代藩主伊達宗村（むねむら享保三（一七一八）年〜宝暦六（一七五六）年）。在任は
寛保三（一七四三）年から亡くなるまで。戒名「政徳院殿忠山淨信大居士」。

「大男のくせ、道下手なり」大男の短所で、歩くのが不得手であった。

「ふみ切」体重があり、歩き方も摺り引くようにするために、昼間の一日の道中で、二足も
草鞋わらじを履き潰してしまうのである。しかも以下、お判りと思うが、サイズがデカ過ぎて、売り
物では履ける草鞋がない。そこで、自分専用の草鞋二足を一から作るのに徹夜せねばならず、
出来上がった時には、出発の触れが出る始末で、睡眠もとれない、昼間中はずっと歩き通しと
いう、体験したことのない地獄の責め苦状態だったのである。だから、「かくの如くにては、
歸らんやうなし」の「ぼやき」が真に迫って響いてくるのである。

「鐵山公」「白わし」他で複数回既注だが、再掲する。仙台藩主に「鐵（鉄・鋏）山公」と
いう諡号の藩主はいない。「鐵」「鉄」「鋏」の崩し字を馬琴が誤ったか、底本編者が判読を
誤ったかしかないと感じる。可能性が高いと私が思うのは、「鉄・鋏」の崩しが、やや似て
いる「獅」で、獅山公しげんこうは第五代仙台藩藩主にして「中興の英主」と呼ばれる伊達吉村（延宝
八（一六八〇）年〜宝暦元（一七五二）年）を指し（戒名「續燈院殿獅山元活大居士」。諡
号「獅山公」）、元禄一六（一七〇三）年から隠居した寛保三（一七四三）年まで、実に四十
年もの長きに亘って藩主を務めた。本書は文政元（一八一八）年成立であるが、例えば、真

葛は、名品の紀行随想「磯づたひ」の中で、鰐鮫への父の復讐を果たした男の話の聞き書きを、「獅山公」時代の出来事、と記している。

「谷風」たにかぜかじのすけ谷風梶之助（寛延三（一七五〇）年〜寛政七（一七九五）年）は陸奥国宮城郡霞目村（現在の宮城県仙台市若林区霞目）かすみのめ出身の元大相撲力士。本名は金子与四郎。大相撲史上、屈指の強豪とされる。力量・人格ともに後の横綱の模範とされたが、現役中に亡くなっている。歴代横綱では第四代横綱とされが、この谷風が事実上の「初代横綱」である。詳しくはウイキの「谷風（2代）」を参照されたい。サイト「相撲レファレンス」の彼のデータによれば、伊勢ノ海部屋所属で、身長百八十九センチメートル、体重百六十二キログラムとある。

以下、底本で一行空けで、話も別に独立しているが、標題がない。「目録」に従おうと見ると、これが悩ましくも、「丸山井谷風 桑田嘉太夫」となっている。「谷風」はどうみても、「独立条にするには痩せ過ぎているので、標題を掲げずに「丸山」に吸収させておき（底本本文もその作りとなっている）、姓の合わないそれは、一応、本文を優先して「(菊田喜大夫)」と挟んで独立させておく。」

(菊田喜大夫)

菊田喜大夫といへる人は、勝れて小身なりしが、獨身にて有し時、思へらく、「味よきものをこのむほど、つゝへなることなし。心の限り、儉約せばや。」

とて、汁・香の物なく、みそ少々をなめて飯を食しが、膳廻り、淋しければ、木にて「ふな」の形を作り、竹串にさして味噌をぬり、あぶりて味噌みそ「やぶちゃん注：ママ。衍字か。」のみ食、なめつくせば、又、みそを引々して、二、三年を経しほどに、金持と成て、いろいろ、功も有き。後には妻子をも具したりしが、

「我等ごとき身代にて、味よき物、くふべからず。」
と、いさめて、魚類などは、くはせざりしとぞ。

金のくり合せ、たのまれて有しほどに、鯛のおほくとれし時、ある人のもとより、一枚、おくりしに、喜大夫は留守なりしかば、妻子、悦、

「いざや、今日こそ鯛を食せん。」

と、思ひて、歸りを待みしに、喜大夫、かへりて、ことのよしを聞、「よしや、もらひたりとも、かゝるものは、くはぬぞ、よき。」

とて、魚のかしらと尾先を持って、隣のかたへ、なげやりしとぞ。

家内は、あきれて、顔見合せてをるに、しばし有て、となりの人、裏に出て、魚をみつけ、おほきにおどろき、

「どうして、こゝへ鯛が、きたぞ。犬にても、くはへ來るか。それにしては、あともなし。」と、引返し、引かへし「やぶちゃん注：表記違いはママ。」、不審するていなり。

「何にしても、鯛をひろふは、めでたい、めでたい。」
と、うれしがり、

「いざ、祝はん。」
とて、酒をととのへ、折ふし來し人にも、ふるまひなどして、賑はふていなり。

是を聞て、喜大夫、家内にしめすやう、

「あれ、あのばかものどもを見よ。鯛壹枚、ひろひしとて、酒をかひ、酢・せうゆをつみやし、人、あつめして、飯をも、いみやすべし「やぶちゃん注：「つみやすべし」の誤りか。但し、その場合は歴史的仮名遣は「費やす」が正しい。」。味よき物、くふ、無益なること、是にて知べし。」

と、云しとぞ。

「やぶちゃん注…ド吝嗇もここまでくると、一つの独特の哲学である。妻は鯛が上手いことを婚前食って知っているが、その子まで喜んでる。さて。彼はどこで鯛を食ったのだろう？ 或いは、この妻子は子連れ再婚だったのかも知れない。」

「菊田喜大夫」不詳。

「金のくり合せ、たのまれて有しほどに、鯛のおほくとれし時、ある人のもとより、一枚、おくりしに」金の都合をつけて貰えないかと人から頼まれて貸してやっておいたことがあったが、その折り、その貸した人物から「鯛が多く獲れたので」と一尾、菊田のところへ贈ってきたのである。」

「やぶちゃん注…以下、最終標題パートであるが、前段と同じく連関性のない二話（但し、後ろの二話は和歌関連で親和性がある）が「とら岩」の標題下以下に、底本では一行空けで組まれてあり、最後に馬琴の写本した旨の辞と署名がある。「目録」の「とら岩^并富塚半兵衛 附貞山公鶉の話」に従って、丸括弧で標題を置いておいた。」

とら岩

とらいは道辨だうべんと云し、外療げりやう、有ありき。寛政年中のことなるべし。大力・大男の元氣ものなりし。甥わかうの若生わかう、時ならず、麻上下あさかみしもを着して來りしをとがめ、

「何故の禮服ぞ。」

とふ。若生曰、

「今日、劍術の傳授すみし、かへりがけなり。」

といふを聞きて、道辨、打わらひ、

「我は長袖のことゆゑ、武藝はかつてまねばねども、その方如きの、小ひやう・非力の者に、まけてはをられじ。傳授あそと有は、こと、をかし。」

と、あざけりしかば、若生も、さすが、傳授もうけし身の、かくあざけられては、聞きのがしがたし、とや思おもつらん、

「さあらば、こゝろみに、立合たちあひて御覽あれ。我方わがかたよりは、そなたを打申うちまうすまじ。われを、一打、うたれなば、まけとせん。」

と、いひしかば、道辨は、

「いざ。おもしろし。」

と庭にとびおり、棒をふつてかゝるに、さすが、傳授をゆるされしほど有ありて、うけやう、しごく巧者かうしやにて、うてども、うてども、身にあたらず、

「まつかう、みちん。」

と打棒うっを、隨分、よくうけとめけるを、道辨、

「こゝぞ。」

と力をいだし、かさにかかゝりて、おしたりしかば、こらへかねて、ひしげしとぞ。

道辨、悦よろこび、

「さぞあらんと、思おもひしことよ。」

とて、上あがりしとぞ。

「やぶちゃん注…」とらいは道辨」不詳。「虎岩」か。とすると、[岸本良信氏の公式サイト内](#)の「[仙台藩（伊達藩）3](#)」に「虎岩吉兵衛」・「虎岩善兵衛」・「虎岩八兵衛」という名を見出せるから、この虎岩一族の者ではあろう。次男以下で、武士をやめて、医師となったものか。

「外療」外科医。

「寛政」一七八九年〜一八〇一年。

「若生」[岸本良信氏の公式サイト内の「仙台藩（伊達藩）1」](#)に、「執槍隊小人」の中に「若生作蔵」が、「周旋方」の中に「若生文十郎」の名が見える。前者か。

「麻上下」麻布で作った単の袴。[江戸時代の武士（或いは庶民）の出仕の際の通常の礼装](#)である。

「長袖」袖括りそでくくりをして鎧を着る武士に対して、長袖の衣服を着ているところから公卿・神官・僧・医師・学者などを指す。長袖者ちようしゅうしやという謂い方もある。

「まつかう、みぢん。」「真向、微塵。」。「額の真ん中を粉微塵にしてくれるわ!」。

「かさにかかゝりて」「嵩かさに懸かりて」「一瞬の優勢に乗じて攻めかかって。

「ひしげし」「拉ひげし」体を押されて地面に倒れて潰つぶされてしまった。」

(富塚半兵衛)

忠山公の御代に、富塚半兵衛といふ人、有し。親は寄人にて、あまた、よみつめたりしを、子なる半兵衛は不精ものにて、常にはよまねど、花のをり、月見の夜などには、

「父の子なれば。」

とて、うた人の内に入れて、題を給はれば、とがめなく、よみて出したりしを、かたはらより、「父の、おほくよみたる中を見出て、さし出すならん。」

と云あへりしとぞ。

或としの秋、十五日、例の如くよみて、さしだせしを、そこなる人の中より、

「そのよまれしといふうたは、父のよみ置しふる哥にはあらずや。」

と云出したりければ、半兵衛、取あへず、其人の袖をひかへて、

かゝる時思ひぞ出る大江山いくのゝ道の遠きむかしを

といひし故、人々のうたがひ、はれて、まことによめるうたなることゝは思ひしとぞ。

時にとりては、よく思よりたりし。

この人、いつたい、おどけものにて、打むかへば、おのづから、人にゑみをふくませしとぞ。

身まづしく、物にかまはぬかたより、居やしきのめぐりも、荒がちなりしを、さることを、いましむる役人の方より、

「垣、ようせよ。」

と、たびたび、いはれしとぞ。其いひふるゝ人も、したしう、きかよふ中なりつれど、おほやけのこと故、しばしば、ことあげせし事にぞ有ける。

ある日、わたくしに、其人の來りし時、酒などのみて、扱、あるじ、書て出したりき。

わがやどのくものすがきもあらがきも貧のふるまひかねてしるしも

「やぶちゃん注…「忠山公」既出既注。第六代藩主伊達宗村(享保三(一七二八)年〜宝暦六(一七五六)年)。在任は寛保三(一七四三)年から亡くなるまで。戒名「政徳院殿忠山淨信大居士」。

「富塚半兵衛」[岸本良信氏の公式サイト内の「仙台藩\(伊達藩\)3](#)」に「富塚半兵衛」の名が見出せる。

「寄人」ここは藩主付きの和歌担当の者(右筆や諸雑務も行ったか)の謂いであろう。

「取あへず」すぐに。

「取あへず、其人の袖をひかへて」「かゝる時思ひぞ出る大江山いくのゝ道の遠きむかしを」
「小倉百人一首」にある和泉式部の娘の小式部内侍の一首、

大江山いく野の道の遠ければまだふみも見ず天橋立

に関わるエピソードを、動作とともに、オツに返したものである。この話は説話集「古今著聞集」（伊賀守橘成季編。（建長六（一二五四）年頃に原型成立）の「巻第五 和歌」に抄入された「小式部内侍が大江山の歌の事」や、作者不詳の「十訓抄」の「第三 不可侮人倫事」（「人倫、侮るべからざる事」）に載るすこぶる知られた話で、ここは先行する後者（「十訓抄」の一本の序には建長四（一二五二）年のクレジットがある）で示しておく。底本は一九四二年岩波文庫刊永積安明校訂を用いた。一部に句読点と推定で読みを追加し、段落を成形した。

*

和泉式部、保昌【右大臣致忠息、大納言民部卿元方孫。】が女にて、丹後に下りけるあとに、歌合どものありけるを、小式部内侍、歌よみにとられて、歌をよみけるに、定頼【公任卿子。】の中納言、たはぶれて、小式部内侍有けるに、

「丹後へ遣はしける人は参りたりや。いかに心もとなくおぼすらむ。」
と云入て、つばねの前を過られけるを、御簾より、なから計出で、わづかに袖をひかへて、

大江山いくのゝみちのとをければ

まだふみもみずあまのはしだて

と、よみかけしる。

おもはずに、あさましくて、

「こはいかに。かゝるやうやは、有。」

と計いひて、返歌にもおよばず、袖をひきはなちて、にげられけり。

小式部、これより、歌よみの世に、おぼえ、出来にけり。

これは、うちまかせて、理運のことなれども、彼卿の心には、『これほどの歌、たゞいま、よみいだすべし』とは、知られざりけるにや。

*

注するのも失礼乍ら、老婆心で言い添えておくと、定頼の台詞は「代わりにお母上に歌を詠んで貰うために、丹後にお遣わしになった者は、もう、帰って参られましたか。いやいや、使いが帰るのが、さぞかし、待ち遠しく、じれったくお思いのことでしょうなあ。」という厭味である。一首については、「いくのゝみち」が現在の京都市福知山市の「生野」或いは

「幾野」で「幾つもの野」に掛けられており、さらに「行く」にも掛けられていると読むべきであり、「ふみ」は「文」（手紙）と「踏み」の掛詞となっており、「踏み」の方は「橋」の縁語とされる。正確な歌枕や地名の読み込み及び下句の倒置表現などを以って、定頼の戯言を一撃のもとに退けた彼女の才覚は驚異的である。

「時にとりては」その時に当たって。絶妙のタイミングで。

「いつたい」副詞。元来。

「いひふるゝ」「言ひ觸るる」。ここは「かなりしつこく何度もそのことに言及する」の意。

「したしう、きかよふ中」「親しく、來通ふ仲」。

「おほやけのこと」藩中での公の場の中で、しばしば彼の家の荒れ方が武家の面目上、問題であるとして批判されていたことを示す。

「ことあげ」「言上げ」。殊更に言葉に出して言い諫めること。

「わたくしに」公務としてはなく、プライベートに遊びに来たことを言う。

「わがやどのくものすがきもあらがきも貧のふるまひかねてしるしも」「我が宿の蜘蛛の巢搔き荒垣も貧の振舞ひ予ねて著しも」「巢搔き」は「蜘蛛が巢を掛けること」或いは「その蜘蛛の巢」を指す。「荒垣」に応じて「素垣」（竹などで編んだ隙間の多い粗末な垣根）も掛けていよう。――私の蜘蛛の巢だらけの家、荒れ果てた粗末な素垣も垣根も、皆、予てよりの吾らの清貧の標に外ならぬのです――の謂いか。和歌嫌いの私でも、いい感じがする。]

(貞山公鶉の話)

貞山公、昔、戦の有し頃、京におはせしに、鳥屋の見世に立よらせ給て、よき「うづらの有しを、

「これは、いかほどのあたひぞ。」

と問せられしかば、鳥屋のをとこ、『今ぞ、高直に申べき時』とや思つらん、

「五十兩なり。」

と申上りしを、聞せ給て、

立よりてきけば鶉の音はたかきさてもよくにはふけるものかな

と、たゞごとに、のたまはせしを、鳥屋、聞て、大にはぢて、あたひなしに奉りしとぞ。

【解云、このうづらの歌を、あるものには、堀田侍従のよし、いへり。いまだ孰か是をしらず。】「藩翰譜」、堀田の譜を参考すべし。【「やぶちゃん注…馬琴の頭注。」

「やぶちゃん注…「貞山公」かの戦国大名にして仙台藩初代藩主伊達政宗（永禄一〇（一五六七）年～寛永一三（一六三六）年）のこと。彼の戒名は「瑞嚴寺殿貞山禪利大居士」。

「戦の有し頃、京におはせしに」知られた上洛は、文禄二（一五九三）年、豊臣秀吉の「文禄の役」に従軍した折りである。ウィキの「伊達政宗」によれば、『従軍時に政宗が伊達家の部隊にあつらえさせた戦装束は非常に絢爛豪華なもので、上洛の道中において巷間の噂となった』。三千名或いは千五百名の『軍勢であったとの記録がある。ほかの軍勢が通過する際、静かに見守っていた京都の住民も伊達勢の軍装の見事さに歓声を上げたという。これ以来、派手な装いを好み着こなす人を指して「伊達者（だてもの）」と呼ぶようになった』といういわく付きの出来事であった。

「鳥屋の見世」鳥を売る店。知ったかぶって「鳥屋」（「疇」とも書く）を「とや」と読んではいけない。「とや」は「鳥小屋」・「鶉などの小鳥を狩りの際に罾を仕掛けて待つために山中や谷間に設けた小屋」・「鷹の羽が夏の末頃から抜け始めて、冬までに生え替ること（これはその時期に巢に籠るところからかく言う）」・「歌舞伎の劇場で花道の揚げ幕の内部にある花道への出入りの際の控えの小部屋」・「旅回りの役者などが不入りなどで次の土地に出発出来ずに今の場所に居続けになること」・「遊女が梅毒で引き籠ること（転じて「梅毒」をも指す）」といった意味の語で、これだけ多様な意味がありながら、「小鳥屋」の意はないからである。

「うづら」鶉。キジ目キジ科ウズラ属ウズラ *Coturnix japonica*。今はあまり馴染みのない鳥であるが、古く「古事記」や「万葉集」の歌に詠まれ、卵だけでなく、成鳥自体を食用にした（平安時代に既に本種の調理法を記した書物があるという）のみならず、ペットとして飼育された歴史も古い。「言繼卿記」（戦国期の公家山科言繼の日記。大永七（一五二七）年から天正四（一五七六）年の凡そ五十年に渡るもの。但し、散逸部分も少なくない。有職故実や芸能及び戦国期の政治情勢などを知る上で貴重な史料とされる）によれば、室町時代に既に籠を用いて本種を飼育していた記載があり、江戸時代には、武士の間で、鳴き声を競い合う「鶉合わせ」が行われ、慶長（一五九六年～一六一五年）から寛永（一六二四年～一六四五年・慶長との間には元和が挟まる）をピークとして、実到大正時代まで流行した。また、別に鳴き声を日本語に置き換えた「聞きなし」として「御吉兆」などがあって、珍重されることもあった。されば、ここで政宗が鶉を求めようとしたこと、法外の吹っ掛けとは言え、小鳥屋の主人が「五十兩なり」と言ったのも、真実味を持って受け取れよう。博物誌は私の「和漢三才圖會第四十二 原禽類 鶉（ウズラ）」を参照されたい。

「立よりてきけば鶉の音はたかしかてもよくにはふけるものかな」前の「富塚半兵衛」の末尾の清「貧」と対称となっていて面白い。言わずもがな、「ね」は「音」と「値」に掛けているわけだが、ふと思うたのは、上の句の掛詞の面白さを考えると、下の句で、「さても欲には耽るものかな」そのままでは芸がないことになる。これは——ふと、さる御屋敷に立ち寄って、鶉の高く鳴く声を聴いたが、さてもさても、音のみでその姿が見えない。いやいや、そうか、能（「よく」）ぞ庭（「には」）に「ふけ」「ふける」には「身を隠す」の意がある）たものであることよ——の意を表に装っているのではないかと考えた。鶉の特に^ねは叢に溶け込みやすい保護色をしている。また、叢の根元に産む卵もまた、その表面の色や模様が外敵から卵を守る多様な保護色となっていることはよく知られており、「身を隠す」と鶉には縁語的關係が成立するからでもある。但し、真葛は「たゞごと」に、のたまはせし」とは言っているのだけれども（「ただごと」（徒言・只言）は古くは「ただこと」で、技巧などを用いずに有りの儘の言葉・歌語でも比喻でもない日常の言葉の意。しかし「鶉の音」としたところは最早「ただごと」ではないし、この話柄そのものが後世の捏造された話とすれば、ヒネリが入っていると読んだ方がいいし、面白いと思う）。

「堀田侍従」不詳。話と前後の記載（特に「藩翰譜」）から見ると、江戸前期の大名で、下総佐倉藩第二代藩主・堀田家宗家第二代にして、堀田正盛の長男である堀田正信（寛永八（一六三一）年～延宝八（一六八〇）年）のことかと思われたが、彼は侍従ではない。彼は後の「藩翰譜」にも記されてあるが、彼のウイキから引用すると、万治三（一六六〇）年十月八日、突如として『幕府の失政により人民や旗本・御家人が窮乏しており、それを救うため

に自らの領地を返上したい」といった内容の幕政批判の上書を幕閣の保科正之・阿部忠秋宛てに提出し、無断で佐倉へ帰城し』てしまい、『まもなく、幕法違反の無断帰城について幕閣で協議がなされ、『正信の上書や行動に同情的意見もあったが、老中・松平信綱の唱えた「狂気の作法」という見解（本来なら「三族の罪」に当たるが、狂人ならば免除できるという理屈）で合意がなされ』、同年十一月三日に『処分が下り、所領没収の上、弟の信濃飯田藩主』『脇坂安政に預けられた。正信が佐倉へ無断帰城した動機については、信綱との確執や正室の叔父の松平定政が起こした出家遁世事件との関係も指摘されるが、不明』である。その後、『安政の播磨龍野藩への転封に伴い、母方の叔父である若狭小浜藩主』『酒井忠直に預け替えられる。しかし』、延宝五（一六七七）年六月、『密かに配所を抜け出して上洛し、清水寺や石清水八幡宮を参拝し』、『これにより嫡男』『正休』（まさやす）』『と酒井忠直は閉門、正信は阿波徳島藩主・蜂須賀綱通に預け替えられた。配流中には「忠義士拔書』『楠三代忠義拔書』『一願同心集』などを著し』ている。延宝八（一六八〇）年五月、第四代將軍『徳川家綱死去の報を聞き、配流先の徳島にて缺で喉を突き』、『自殺した。遺骸は江戸へ入ることを許され、菩提寺の金蔵寺に葬られた』という**数奇な生涯を送った人物として私が興味を持っている人物**である。なお、彼の孫で藩主に返り咲いた江戸中期の大名にして老中首座であった出羽国山形藩第三代藩主・下総国佐倉藩初代藩堀田正亮（ほったまさすけ 正徳二（一七一二）年～宝暦一一（一七六一）年）がおり、彼の官位は従四位下・侍従であるが、『藩翰譜』の記載より後代の人物である。この堀田正亮を指して真葛が書いていると読むことは特に無理はないと思うものの、伊達政宗と話を混同するには後代に過ぎるから、違う。政宗と同時代人の堀田家となると、堀田正吉や、その子で正信の父堀田正盛であるが、彼らは孰れも「侍従」ではない。お手上げ。

「藩翰譜」は江戸時代の家伝・系譜書。新井白石著。全十二巻。元禄一五（一七〇二）年成立。元禄十三年に甲府藩主徳川綱豊の命を受けて編纂したとされる。諸大名三百三十七家の由来と事績を集録し、系図を附したもの。慶長五（一六〇〇）年から延宝八（一六八〇）年までの内容が収録されている。短期に仕上げたため、事実誤認があり、白石自身が後に補訂を加えている。

「堀田の譜」[ここ](#)（国立国会図書館デジタルコレクションの大槻如電校訂明治二九（一八九六）年刊の当該箇所（第六卷）の画像）だが、馬琴は明らかに正信の記事を読めと言っているように見える。」

天保壬辰歲杪立春五日、以三原本二比較畢

蓑笠漁隱

「やぶちゃん注」天保壬辰（みづのえたつ／じんしん）「歲」は天保三年。

「杪」「すゑ」。「終わり」の意。従って以下の「立春五日」とは天保三年十二月二十五日を指す。因みに、この日はグレゴリオ暦で一八三三年二月三日で定気法による計算でこの日に立春が合致する（いつもお世話になる、[かわうそ@暦氏のサイト「暦のページ」](#)の「二十四節気計算」のページで確認した）。

「以三原本二比較畢」「原本を以つて、比較、畢んぬ」。「比較」比較校訂。

「蓑笠漁隱」「さりふぎよいん（さりゆうぎよいん）」。馬琴は文政七（一八二四）年五十八歳の時剃髪したが、これは、それ以後の馬琴の号である。」

只野眞葛「奥州ばなし」（附・曲亭馬琴註）

附・藪野直史注 完